
誰かを救える五分钟前 Part1

神戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰かを救える五分前 Part 1

【Nコード】

N5277R

【作者名】

神戒

【あらすじ】

時衛士は平和な日常から、突如として広大な地下空間へと連れて来られた。理由は、与えられた『特殊能力を持つ道具』に適正があったから。

彼はとある組織の特殊部隊に加入させる為に過酷な訓練を強いられる。だがその前に、ただ一度の実戦を体験させられた。

その内容は、『奪われた道具』を取り戻すこと。

衛士の名を響かせる、その初めの物語である。

数多ある中の始まりの一つ

「おらあっ！」

逆手に握るコンバットナイフは触れた先端から相手の肉を削ぎ落とし、傷口から膨大な血液を流出させる。男は裂かれた喉元を押さえるように崩れて行き、漆黒を纏う彼は呼吸を乱しながらも追っ手の有無を、そしてその数を確認してから、彼は再び走り出した。

「つたくよ……これじゃ隠密もクソもありやしねえ！」

長く暗く湿度が高くも酷く寒い通路。走るたびに足元の水溜りが音を立てて爆ぜ、来るときにはコレほどまで人気の無い通路に感謝しなければな、と意気揚々と大股で歩いていた自分に後悔せざるを得なかった。

無論、逃げ道がここだけというわけではなかったのだが、安全面を考えてこの地下通路を選択した。結果としては――逃げる彼独りに対して無尽蔵と思われる程の警備兵ないし雇用兵等が酷く常識的に刃物を用いて襲い掛かってきていた。

彼としては銃火器を望んでいたのだが、狭い通路で挟み撃ちを目論む時点で武器の取捨選択が行われたのだろう。奪って使用すれば、大きな火力の増大となりえたのだが……と彼は過ぎたことに嘆息した。

課せられた任務は失敗した。しかしそれを嘆いている暇は無い。失敗者は失敗者なりに情報漏洩を防ぐ為に迅速な撤退、あるいは自殺が優先される。彼が前者を選ぶ理由は、敵対している組織が持ち得ない技術を駆使して使用した”道具”を所持しているからである。

これは容易に破壊出来ないものであるし、出来る限り持ち帰ることが推奨されている。その時になればやむを得ずに道具と共に死を選ぶが――出来る事をせぬ内に諦めることは、彼の性には合わなかった。

「あー、畜生。ぜってー報酬を見直させてやる……つっても失敗し

てるからなあ」

だからこそ敵に発見され、このような状況に到っている。最も優先任務である施設の破壊が完了している時点で失敗とは言いがたいのだが、彼としては課せられた全ての任務を遂行することに意味があり、またその定評があった。

今回ばかりは警備の手が厳しく、さらに余りにも情報伝達速度が高すぎて即座に逃げる行動しかとれなかったのだ。

——こんな事が分かっていれば飛び道具でも持ってきたのだが……いや、実は手榴弾を一つ持ち歩いているが、しかしこれは自殺用だ。自分で首を掻っ捌くのは余りにも勇気が要る。こんな臆病な俺には、コレしかないのだ。

腰から下げる一つの手榴弾に片手で触れると、間もなく暗闇の中で強くなる気配が直ぐ目の前までに迫っていることに気がついた。

男は迷う事無く体勢を低くして飛び込むように敵へ肉薄する。その直後に前方から飛び出した破裂音が火花を散らして、耳を劈くように響き渡った。空気を貫く弾丸は高速で男の頭上を通り過ぎ、背後で誰かの悲鳴が聞こえる。

「バカ野郎！　こんな所で銃なんて——」

距離は既に数歩分。今の銃口から弾けた火花のお陰でそれが確認できた。男はそれから立ち上がるようにして大きく踏み込み、壁を背にするようにして立ち代り、即座にナイフを振るう。と、間もなく確かな肉の感触が刃を伝わって腕に響き、続け様に鋸のように細かな刃がつく面を引っ掛けて手繰り寄せ、さらに喉に突き刺した。

開いた手は敵の垂れる腕に伸び、掴まれている拳銃を奪って男は死体となったソレを進行方向とは逆へと蹴り捨て——前方に発砲。直後に悲鳴が耳に届くが、距離は然程近くは無いようだった。

彼はそこで立ち止まり、一つ息を吐く。

これ以上先を急いても体力が直ぐに底を尽くだけだと言う事を十分に承知しているからだ。先はまだ長く、今ようやく半分到達したと考えて良い所だろう。手に入れた拳銃はリボルバーで、重量感が

腕に伝わる。軽量化を施されているナイフでさえ振るいながらの独走は困難である為に、同時使用は半ば不可能と思われた。

銃身は長く、彼はシリンダーを開けて残りの弾薬を、指でなぞるように確認すると後四発程度しかない。彼は銃の知識はあまり豊富と言わねばならないが、なんとなく有名どころの”ピースメーカー”っぽいなと思い、腰のベルトに差して携える。

そうこうしていると前と後ろ、否、壁を背にしている現状では左右から敵の足音が迫ってくる。されど、彼は飽くまで前を向くことしか出来ない。この完全なる闇に包まれる通路で前も後ろも無く戦えばやがて進むべき方向を失い、迷ってしまうからだ。

繰り返すようだが、現在の行うべき課題は迅速な撤退であるか、迅速な自殺であるかの二つに一つ。

組織にとっても男にとっても、前者が限り無く好まれたのだが――。

「CQCは得意じゃないんだがな……」

さらに銃も得意じゃない。手榴弾とてこの狭い空間で使えば被害を被る事は火を見るより明らかだった。されど男はただナイフを逆手に構え、その柄尻に手のひらを当てるように重ねる。

息を吸い込むと濁った空気が肺を満たし、決意する。

「――この闘い、死ぬわけには行かないッ！」

男は決意し、進むべき道へと駆け出した。

敵の喧騒が静まり返るのは、それから約三時間後の事となる。

「残り五分！ 気合を入れろ！」

肌を焼く炎天下の中、汗で堅苦しい迷彩服を濡らす少年、時衛士トキエイジは輪郭が曖昧になる世界を睨みながらも足を止めず、走り続ける。固められた土の上に引かれる楕円形の白線は、何度も踏みつけられて半ば消えていた。

それでも決してその線からずれることは無く、そのグラウンドに

居る十人にも満たない少年少女は一心不乱に身体を動かし続けた。

——空は蒼く澄み渡り広く、太陽は見れば目が焼け付くほど眩しい。しかし彼等が居るそこは地下であり、無論それらはホログラムによって映された偽物であった。

広大な地下空間^{ジオフロント}。日本の都市が二つ三つ収まっても余分となる方が圧倒的に広くなる土地が、地下五〇〇メートル前後の地点に作られている。その外観は衛士が今まで過ごした、いわゆる『外の世界』と大きな違いは無く、二車線の道路が延び、周りを見渡せばビルが立ち並ぶ。少し歩けばちよつとした商店を見つけることが出来、生活に不自由することは無い。

時間ごとにホログラムは空の様子を、そして季節を外と同様に変化させ、感覚が狂うことは無かった。

乱れた呼吸は次第に整ってくる。まるで巨石でも背負っているかのような肉体の倦怠感はいつしか忘却の彼方に葬り去られ、疲れは気がつくと思わせた。まだ走れる。これからもっと頑張れると思えるような、突如として気分が高揚するのは、一般的にランナーズハイと呼ばれる作用によってであった。

が、間も無くマラソンの終わりを告げる様に、筋骨が隆々と逞しいタンクトップ姿の男が、楕円形になる線の上で立ちふさがっていた。次にそこへたどり着けばこれで終了だと言う意味である。

やがて半周も残っていなかった衛士であるが、順位は三着。最も順番を争うものではない為に、特にこれといった競争心が湧くことは無かった。

「自由時間だ。呼吸を整えながら戻れよ！」

現在の時刻は既に午後五時。よって今日の訓練課程は全て修了したのだ。しかし呑気に時間の流れを味わう暇など無く、さっさとシヤワー室か自室に向かって汗を流し、制服を洗わなければならない。この制服には替えが無いために、早い内に洗濯をしなければまた明日、汗の臭いがこびり付いたものを切る羽目となってしまう。

また夕食が始まる時刻は午後六時であるためにゆっくりと疲れを癒す時間は許されていなかった。

二ヶ月ほど前の入学したての時は、余りにも激しい運動や座学の数々に肉体が付いていかずに食事など胃が受け付けなかったものだが、今となつては十分に空腹を覚えることが出来る。しかし、まだ六月も上旬だと言うのに、気温調節でも間違えたかのような炎天下に、身体はすっかりと弱りきっていた。

衛士はしつかりとした足取りであるものの、やはり食欲は出ず、今日は夕食を抜いて明日の朝にでも回そうかと考えていると、背後から迫り来る足音が衛士の歩行を停止せしめた。

「トキ！ 待てよ、部屋、隣だろ？ 一緒に戻ろうぜ」

肩までの長髪を額の真ん中で分ける軽そうな男は呼吸を乱しながら隣に追いつき、歩調を緩める衛士と並ぶ。どうやら同年代らしい彼は毛先を黄色く染める今時の若者といった風貌であるが、ここまですで弱音を吐かぬ彼は見た目とは違って十分しっかり者であった。

「なんだ、フミか」

「なんだとはなんだ」

頭一つ分身長が高い七文太ななぶんたは、にかつと明るい笑顔で衛士の頭をぐりぐりと弄くり倒す。ふらつく視界に伴って体が傾き、衛士は慌てて腕を振り払っておぼろげな足元をしっかりと直す。文太は他人事のようにカラカラと大笑した。

眉は薄く、鼻は通ってすらりと高い。衛士から見れば美形な顔つきであったのだが、生来の三枚目気質故に、女性からの人気は然程高いと言える者ではなかった。また衛士も、目的が己の鍛錬が主であるために自身から誰かと関わろうとはせず、結果的に話せる友人というものは文太だけとなっている。

衛士のようにこの場に呼び寄せられ、半ば強制的にココでの生活を強いられている者は衛士を含めて総勢八名。内、女性是一名である。だからといってそんな彼女等が優遇されることも無く、ごく一般の共学の学校のように親しく、あるいはある種の敬意や遠慮を持

って時を共にしていた。

つまり、衛士が入学当時に危惧していた奇妙な連帯感や馴れ馴れしさが無く、それに彼は胸を撫で下ろす思いだった。

「今日は何食おうかなー」

文太は後頭部で両手を組んで、空を見上げながら呑気に呟く。傍らで衛士は今夜の筋トレは少しばかり軽度にしておこうと考えた。

「おいトキ！ すまん、お前はここで待機している！」

呼ばれて、衛士は短く返事をする。先に行っているぞと文太は手を挙げ合図をし、衛士はそれを背に受け教官の下へと駆け足で戻っていく。やがて彼の元に付くころには、彼は何故だか上半身裸になって最後の一人を向かえ、背を叩いて送っていった。

すれ違うのは小柄な少女。年齢はまだ十五で、召集された八人中では最年少とされる。また最年長は二三の男性。衛士は丁度その中間で、比較的年齢の近い人間が多かった。

ふらふらとおぼつかない足取りであったが、彼女を待つ一人の少女がその肩を抱くようにして支えになって寮へと戻っていく。衛士はそれを見送ってから、実技教官へと向き直った。それから口を開こうとするのだが、彼は手を突き出し、ソレを遮った。

「あー、実は用事があるのは俺じゃ無いんだ。座学担当の『エミリア』が話がある、と」

——衛士が主な生活圏とする訓練学校は主に寮と屋外訓練場、そして屋内訓練場と幾つかの教室で構成される建造物で構成されている。その中で直接彼等に関わってくるのは、現在衛士が対面している、主に実技——あらゆる戦闘技術を専門として教育する教官、『フナサカ』。座学、あらゆる状況を想定し、ソレに対する処理方を教え込み、また共通して必要になるあらゆる専門知識を与える教官『エミリア』。この二人が主に八人の教育を執り行っていた。

食事や医療などは彼等の背後組織が人員を裂いて用意し、不自由は無い。

「エミリア……ですか」

「ここは軍じゃないし、そういった堅苦しい事は基本的に無しにしているが、せめて敬称を付けた方がいい。彼女は厳しいの、知っているだろ？」

確かに彼女は厳しい。衛士はそれを身をもって体感したのだ。

砂時計を使用し思考すらも全開に挑みかかったのに、容易に負けた。圧倒的、と言うほどではなくまた一撃を入れる事も出来なかったが、どう努力しようとも彼女に頭の中で勝てる想像が出来なかった。だというのに、彼女が座学担当で教育を執り行くと聞いたときには、この世界にどれほどの化け物が居るのかと驚愕したものだった。最も、フナサカの姿を見た日には納得せざるを得なかったのだが。

「聞いた話じゃお前の担当だったらしいから、ま、話と言っても副産物か適正、そこいらの話だ。どっちにしろ二ヶ月前と比べて随分とお前は結果を出せている。悪い話じゃ無い筈だ」

「だいいいんですがね」

ぶつきらばうで武骨な風貌を持つ彼は、ひどく優しい笑顔で、だがそんな台詞に自分自身照れを隠せないのか角刈りの頭を撫でながらそう告げる。

衛士は見た目と中身が反比例を起こしている彼に苦笑をして返した。

すると間も無く、衛士の背後から近づく足音が耳に届いて、ゆっくりと振り向き――。

不意に飛び込むその姿は、いつも以上に険しい表情を携える、褐色に白銀の短髪が印象に強い女性と、その背についてくる、肌の白い透き通るような金髪が腰まで伸びる、大きな胸が印象的な女性だった。

そして衛士は二人を知っている。前者はエミリアであり、そして後者は――。

「ミシエル……さん……っ!？」

認識は出来る。されど理解が追いつかない。妙な、心に穴でも空いてしまったかのような孤独感が露になったような気がした。今ま

で其処には肥沃な大地が広がっていると目を反らして吹いていた法螺を、不毛な荒野じゃないかと暴かれたような、否、自分でそう信じたくも無い現実を見せ付けられたような気分だった。

思わず視界がブレ、体がぐらつく。倒れそうになる身体を支えたのはフナサカだった。

「トキ・エイジ。実技訓練（こしら）でも随分と頑張っていると話は聞いている。最も、以前と比べて何が変わっているかと聞かれても、今は特に無いとしか答えられないがな」

「エミリアさん、アンタも相変わらずだ。オレに、一体何の恨みがあるんです？」

「恨みなど塵も無いさ。寧ろその頑張りに応じて……ほら、ミシエル。自己紹介を」

やがて会話の応酬の中で目の前にやってくる彼女等は立ち止まり、エミリアは背後にて両手を前で組んで厳かな雰囲気醸し出すミシエルの背を押し出すように前へ送る。やがて彼女は、澄んだ表情ですっと流れるように衛士の目を見据えると、首を傾げるように微かに笑んだ。

体が揺れると、そのウェットスーツのような衣服に押さえつけられる豊満な乳房が揺れる。だが、衛士の瞳はもう二度と其処に釘付けになる事は無かった。

しなやかな指がへその手前で重なるように組まれている。長い足がすらっと伸びて、しっかりと大地を踏みしめていた。

——以前と何も変わりが無い。

「初めまして、トキ・エイジさん。ミシエルと申します——」

されど衛士は、複雑な心情を表すように眉間に皺をよせ、だが何も知らぬ彼女に不安や不信感を抱かせぬように口元の笑みだけを浮かべた顔で、硬直する。

何も変わりが無いのは、その見た目だけだ。否、髪が伸びているという事だけが、時間の経過をしっかりと衛士に刻み込んでいた。以前はその金髪は肩より少し下までであった。だから少しだけ、今

は彼女が大人っぽく、そして別人っぽく衛士の目には映っていた。だからか、少しばかりの衝撃を受けただけで、衛士は自分で自分を納得させたように心を落ち着かせることが出来た。

やがて満面の笑みで彼女と対面する。と、何かに安堵したのか、ミシエルも微笑み衛士へと手を差し伸ばした。

「以前の担当さんが失踪してしまった、という事でエミリアさんが一時的に代わりとなっていたみたいですが、これからは正式に私が担当となる事となりました」

「そうなんですか。お手柔らかにお願いしますよ」

手を差し出し、握る。柔らかな肉は女性特有な優しさを孕むようであったが、それを感じる間も無く衛士の意識は徐々に現実から引き離されるようだった。まるで、夢でも見ているかのような、自分とそれ以外を隔てるように薄い膜を張ったかのような、突如としての現実感の希薄化が襲い掛かっていた。

「この”担当”と言うのはですね、与えられた副産物とつぐに対して適正を見出された人がここに呼ばれ、育成が終わるまでの間、主に副産物……トキさんで言うところの砂時計ですね。その使い方や、また特有の能力の使用方法、効果、その他諸々をお教えすることとなっています。この副産物を使いこなせるのはまだ数が少ないので、頑張ってくださいましょう！」

——彼女の説明を、衛士は噛み砕いても飲み下しても、知識として理解しても、よく分からないというのが正直なところだった。

そもそも自身がここを卒業した後で何処に行くことになるのか分からないし、そもそもどんな組織なのか名前すらも知らないのだ。特異能力を持つ特殊な道具を生み出すほどの技術を持つ組織だから、世界を裏で牛耳っていてもおかしくはないのだが、だからこそ、何故単なる学生だった自身が呼ばれたのかが分からなかった。

どうせなら最初から適正を持たせる事を前提とする人間を生み出すことも出来るだろう。遺伝子を改造することとて不可能ではないはずだ。

否、ある程度は認識できている。組織名も、そのある程度の目的も。だが衛士は今では考えたくなど無かったのだ。余りにも大きすぎるそれに対して、畏怖を覚えてしまいそうだから。

そして何故——もう納得したはずなのに、胸がこれほど痛くなるのか衛士には分からなかった。

彼女については諦めたはずなのに、情は薄れて冷めたはずなのに、衛士は触れ合う手から伝わる体温が全身に広がるような幻覚を見て、思わず引き剥がすように手を引いてしまう。

「よろしく願います」

衛士は搾り出すように口にする。

そんな彼を見て、エミリアは顎に添えていた手を離して嘆息した。「知りたかったんだろう？　これで満足だろう？　人の気も知らずに自分勝手に突っ込んだんだ。それで勝手に私を怨まれても困るかな。だが一言添えるが——今回については、私は貴様に同意見だ」

同意見——即ち、衛士同様に少しばかりやりすぎではないか？

と組織に疑問を呈すると言う事だ。分かりやすく言えば反乱分子になりえたと、彼女は臆せず口にする。その行為がわざとそうすることで衛士の信頼を得ようとしているのか、本心から口にするのか分からないが、少なくともその発言が彼女の身に、そして自身らに危険が及ぶと理解したフナサカは慌てて二人の間に割って入った。

「おい！　無闇に口走るな……ミシェルだって言っただろ。副産物^{あれ}

が扱えるのは少数なんだ。ただでさえ、憲兵要員の人材でさえ集まりにくい。下手な発言で処分なんて、冗談にすらなりやしないぞ」

「分かっているさ。私とてそこまで無用心ではない。だがな、船坂^{ふなさか}……奴等も私も”味方”だなんて考えては居ない。所詮は駒だ。いづれ任務を続ければ私も死ぬ。お前も知っているだろう、スミスのような」

——時衛士がこの地下空間^{ジオフロント}に招かれたのは三月上旬の事である。しかし訪れて早速この訓練学校に來たわけではなく、いや、來たことには來たのだが、正式に入学したのは四月上旬。選ばれ、連れて

来られた他七名と同時期だった。

ならば彼が一ヶ月間何をしていたのか。衛士は決して忘れる事が出来ないソレを、彼女等の言葉を聴きながら思い出していた。

歓迎会

時衛士はゆっくりと目を開ける。そう促されたような気がしたのは、褐色の女性が肩に乗せた手を離れたからだだった。そして視界に飛び込むその景色は――先ほど見ていたものとは違い、都市部に移動したようなビルが無数に立ち並ぶ風景。そして自身が、交通量が皆無である道路の真ん中に立ち尽くしていることを理解した。

「裏世界」^{アンダーワールド}とまで言うものだからどんなものかと少々恐れていたが、まだ移動していないようでほんと胸を撫で下ろす。そんな彼を尻目に彼女はカツカツと静かな街の中に足音を響かせて先に行く。衛士は慌てるようにその後を付いていった。

「ここは何処なんだ？ 地下鉄にでも乗って移動するとか？」

「私自身理屈が分からないが、転送した。既にここは地下五〇〇メートルのジオフロントだ」

顔を向けずに彼女は告げる。されど、衛士には言葉の意味を理解することが難しかった。

転送、とは言うが肉体を一体どうにして地下へと移動させるのか。よく”トンネル効果”と耳にするが、それでも物質が完全に向こう側へ通り抜けることは無い。

ならば実は落とし穴があって、意識を一時的に喪失させた状態で移動させたのかと考えるも、五〇〇メートルもの落とし穴から落ちたとしたら仮にクッションが用意されていたとしてもタダでは済まないだろう。

だったら、と衛士は彼女同様に理屈は分からないが、とりあえず転送したのだと理解することにした。

そもそも衛士が使用している砂時計自体、どういった構造で作用で時間を巻き戻しているのか分からないのだから、転送^{それ}を考えること自体無謀と言えよう。

「まず初めに寮へ向かう。それまでのある程度の説明をしておこう」

「ああ」

短く返事をする。大股で歩く彼女の速度は衛士が小走りになってようやく追いつく程で、やっと隣に着いたのにも関わらず彼女は目を向けることも無く淡々と続ける。

まず初めに彼女の名前はエミリアだと言うらしい。返すように自己紹介すると、知っているのとぶっきらぼうに切り捨てられた。

そして次に口にするのは、いずれ所属することになる組織について。

名称は『抑圧組織リリース』。目的は犯罪、テロ行為、暴動等を未然に防ぐ事。活動範囲に区切りは無く、国際的に行っている。またその土地に対して人口が膨大になった場合、対象の国と隣国との間を持って紛争を引き起こし、隣国に勝利を収めさせる。見返りとしては食料、ライフラインの確保と当面の保護を約束する同盟。

リリースはその報酬として資源と人材、技術提供を得て、さらに活動を活発化させる。非政府組織でどの国家にも依存せず独立した活動が特徴であり、今では日本以外にも多国に渡り支所を作っているとの事だった。

それでもこの特殊な効果を持つ道具を有するのはこのリリースという組織のみであり、またそれを所持していることすら知れ渡っていない。逃げ出そうとする者も居らず、また居ても早急な処分が求められる為、情報が外へ顔を出すことは無かった。

しかしそれは飽くまで建前であるという事は、口にしない。エミリアにはその権限が無いからである。

納得、理解しきれないと眉をしかめる衛士を尻目に、彼女は息継ぎをしてまた続けた。

「これより半月は、四月から始まる訓練とは別の訓練を行う。殆ど模擬戦であり、その場の判断、処理などを身体で覚えてもらう為である」

「半月……？ 残った半月は？」

「実戦に出てもらう。正直な所——貴様は組織内でも期待と評価を

受けている。試練内で本来干渉できるはずも無い回帰を理解し記憶を引き継いだ為だろう」

「実戦だったって……」

「安心しろ。難易度は結果に伴って上下する方針だ」

ふふんと腕を組んで得意気になるエミリアに、いや、と衛士は口を挟む。彼女はなんだと不服そうに聞き返した。

「具体的に、どんな……」

「貴様にとびきりの白兵戦は期待していない。時間の回帰に干渉したと言う事は特別な能力でもなんでもない。思考力だ。与えられた情報から、自身の知りえない膨大な流れを汲み取る。それを成し遂げられたのは現在では貴様一人となる。最も、時間回帰系の能力の適正さえ数少ないから比較がしにくいのだが」

そんな台詞に、衛士は思わず沈黙する。

彼女は、その背後の組織は衛士のその才能、ないし思考即ち頭脳に期待を寄せている。しかし勿論衛士にはその自覚は無く、もし自身の間抜けさ、愚かさが露呈したらどうなるのかと考えてみると背筋に寒気を覚えてしまう。

さらに、四月から通常訓練が始まるという事は他にも同じような境遇の人間が居るのだろう。だとすればそこで比べられ、さらに落ち零れるかもしれない。そもそも勉強というものはどうにも面倒なのだ。その内失速し、見捨てられるのも時間の問題であろう。

もしそうになったら、記憶を改ざんされて表の世界に戻れるのだろうか。衛士は考えて、震えるように首を振った。妙に恐ろしい予感が過ぎり、ソレについて考えることを、彼は放棄する。

「話せる範囲は伝えておこう。それを聞いて貴様がどういった判断をするのかも気になるしな」

全ての言動、あらゆる思考が時衛士という個人の具体例サンプルと成り代わる。それらから彼がどういった人間なのか、そしてどういった期待に答えられるのか、肉体の耐久度、その精神力はどれほどのものなのか……。恐らく、この時点でその殆どが理解されているだろう。

衛士自身が知らぬことすらも認識されていても然程おかしいことは無い。砂時計を得た時点で、彼の技術に対する驚愕は既に強靱な慣れを覚えてしまっていた。

しかしそれもまた良い。衛士は一人微笑み頷く。

実験体じみたことをされるのは良い。期待とて今では見返してやると心地よく感じられる。重責は無い。仮に失敗して死すこととなろうとも、今の彼はそれこそを望んでいた。

今では半ば殺害されることが目的となっている。だがただでは死なない。せめて最後に、対等な立場でイワイ・ヒデオに討ち勝ち、その上でこの難解な裏を孕む組織に一矢報いるのだ。そうすれば報われる。衛士が勝手に拾い背負い込んだ、肉親の死が。

だがそうするには強大な力が必要。どうするかと考えるも、やがてそれは無駄となった。

力がある。否、与えられるのだ。今日の前にしている組織の人間から。そして期待が大きければ大きいほどその見返りもまた巨大なモノだろう。ではどうすれば期待が大きくなるか？ 答えは酷く易しいものだ。

衛士自身、絶えず期待に応えてやれば良い。

彼の決意は、エミリアと出会った時からその拳に刻まれていた。

「現在、特殊効果を持つ副産物^{どっく}は八種類存在する」

彼女はそれから指折り数え、その一つ一つに簡単な説明を添えた。「まずは貴様の持つ砂時計。特別な名称は無く、命名の権利は貴様にある」

砂時計を使用した瞬間から五分を体験した後、砂時計を使用する直前まで時を巻き戻す。それがこの砂時計の効果である。今では相手の行動を見極め、その上見抜き、先読みして、攻撃を覚えて避けるのではなく、まず初めの時点で出来る限り避け、確実な攻撃を与える手段を打ち込むために時を戻す。相手の動揺や隙を狙えばさらに効果的になる。

彼女は、使用者によって利便性が激しく上下する、と最後に口に

した。

「次に旧・耐時^{たいじ}スーツだ。これは私達が一般的に着用するもので、まず初めに時の操作によって影響を受けることが無くなる」

身体に張り付く全身タイツのような漆黒のそれを撫でるようにして彼女は説明する。

スーツはその上で、個人的に、自身が鮮明に記憶する中であれば自在に時を移動することが出来る。その際のパラドックスが起きる事は無く、そういった機能に集中する為に効果はそれだけであった。

「新・耐時スーツはイワイに与えたものだ」

旧型とは大きく違うのはまずその見た目だった。

新型はぶ厚く、戦闘服を思わせる。上下一体型のつなぎのようなもので、ジッパが首元から股間まで伸びるも、旧式とは違い脱ぎ着する事が実質不可能となっている。ソレは肉体と一体化し、確実に依存する為であった。

それ故にスーツは切り裂かれれば肉体も同時に切り裂き、内部を露出させる。しかしその代わりとばかりに扱える効果は、肉体の強化……正確には脳のリミッター制御を自在にする事。

スーツを脱ぎ着する事が出来ないので排泄は着用する際に取り付けた排泄パックに溜まり、そこからジッパを開けて自身で処分するしかない。

その上で、この耐時スーツにはさらなる種類が存在する、とだけ彼女は付け加えた。

「酷手袋^{ラバーグローヴ}はただ装着するだけで良いお手軽なモノだが、個人的にはあまり好ましくは無いな」

ラバーグローヴは触れた生物を空間に固定し、時を数秒、あるいは数分間停止させる。停止できる時間は使用者によって大きく変異し、無生物に効果は適用されない。さらに触れる事で停止させる時間を初期状態にまで戻すことが出来るが、最大で六度までしか効果を発揮できない。またその為には対象への打撃が必須となる。

「遅延弾丸は一般的な弾丸として扱われるが、任意の地点で一度停止する事が出来る」

しかし停止できる時間は使用者が次の”まばたき”をするまでであり、また停止が終えても速度が落ちることは無く、また殺傷力が落ちることも無い。基本的には弾丸の形をとる道具であり、銃の種類によってそれぞれに合った弾丸を製造されている。砲弾や核弾頭にも採用できるものであるが、組織として扱っていない兵器であるために未だ図面上に留まっている。

現在では拳銃、短機関銃、機関銃、アサルトライフル、ライフル等で使用できる段階である。

「これが一般的に”任務”で狩り出される際に適応者が装備できる副産物だ。最も遅延弾丸の弾帯化は許可されていないがな。そして所持できる道具はスーツを含めて二つまでという規定がある」

裏を返せば、仮に敵組織に捕獲されても、この内の二つまでならどの組み合わせでもどの量でも痛くは無いということである。

衛士は感動詞を口にする。エミリアはそれさえも遮るように言葉を続けた。

「次が試験中の次元刀。^{スプリット}これは三秒前の空間を切り裂くことが出来る」

片刃で、刃渡りは二五センチ。^{ブレード}刃はステンレスで作られ強靱。一般的なコンバットナイフとして使用できることは勿論、ある特定の条件を満たすことでナイフを振るった直後、その斬撃を三秒前に送ることが出来る。

それ故に、三秒前にその場に居た人間、あった障害物にナイフによる攻撃を与える事が出来、それによって負った傷は使用者の時間軸に突如として反映される。またそれを防ぐことは基本的には出来ないが、他の副産物の使用方法によっては不可能と言う事は決して無い。

現在では”ナイフを振るう”と言う定義と発動条件が曖昧になっているために、実用には到底出せない段階であった。

また、改良作業にあたるについて、さらなる効果を増やす予定がなされている。

そして残る二つは物として確かな形とはなっているが、副産物と呼ぶにはあまりにもずさんな道具であるために、実際に作られたことから種類に数える事が出来るのだが、まだその関係者以外が、作られたという以外の情報を知りえることは無かった。

——衛士はそんな副産物の説明を全て頭に叩き込んでみるが、どうにも実感を湧かせることができない。

自身の砂時計でさえ認識が曖昧、半ば遊戯感覚で使用しているのだからそれもまた仕方が無いことだろう。命が掛かっていると、その認識はあり、また自覚はしている。だがどうにも慣れてしまっているようだった。

誰でも便利な世の中にいつまでも感嘆をもらすだけでは無いだろう。すぐさま順応し、使いこなしていく。今の衛士はつまりはそんな状態であった。

「それで、オレがその実戦で使えるのは……」

「砂時計は外してもらいたくは無いい、と言いたところだがな。まずは生還優先で使いやすいと思うものを前者五つの中から選ぶといい——と言われている。つまり自分で判断して選べ」

衛士は説明の中で汎用性がありそうな新・耐時スーツに少しばかり憧れる。見た目がカッコいいというのもあるが、やはり実戦でまだ鍛え抜かれていない肉体を駆使する以上、強化装備が必要だと考えるからだ。しかし、肉体と一体化し、スーツが傷つき破れればその分だけ直接肉体にダメージが来るといのが余りにも痛すぎた。

そもそも直接突っ込む斬り込みタイプではないことを、自分自身で理解しているのだ。

スビードローダー
ならば遅延弾丸あたりだろうかと考えて、彼女の言葉にふむと頷いた。

「それと、基本的にこの地下空間には空間を統治するリリスの関係者しか居ない。商店の店員も、ある適正ないし試験を通過してここ

へ来ている。要望を申せば、そう難しくなければ基本的に通る。最も、貴様が不自由するほどの環境では無いと思うがな」

「へえ、結構自由なんですね。もっと、なんかこう……ガチガチに固められた所かと思いました」

「軍でも国でも無いからな。基本的には上下関係しか無いが、それでも縦社会というわけではない。やることさえやれば軽口を叩こうが忠誠心を露にしようが問題は無い」

「組織に反旗を翻しても？」

彼が悪戯な笑みを浮かべて覗き込むように問うてみるも、彼女はあしらう様に嘲笑して視線も向けずに、声は低く、今にも衛士を飲み込むような冷酷さをもって返答する。

「その時は私が責任を以って討つ。貴様の場合な」

——鋭い眼差しは衛士を貫かないものの、恐らくソレは敵となった者に向けられるものであった。それだけで理解できるのは、彼女は決して容赦はせずに始末をするであろうと言う事。

命令であれば手を下し、そうでなければ傍観する。

エミリアの実力の程は垣間見た程度で実際にどれほどなのかは未だ分からない。しかし、彼はどうにも彼女には逆らえそうに無い事を、本能的に理解した。

——そんな中で、期せずして二人の前に一つの影が現れる。

全身を黒いマントで覆い、顔面は鼻筋から上を黒い革の帯で封じるかのように巻かれている。締まる口元には感情は無く、異様な――

――霊的な雰囲気だけが、周囲に撒かれ始めていた。

道を阻み、二人は足を止める。衛士はエミリアが対処するだろうと一歩後退してみると、今度は彼女が衛士の背後に引くようにして下がり、彼の背を押した。

「貴様は一般的に見れば例外だ。普通、選ばれれば四月にここへ寄越される。だが貴様はその一月前にジオフロントへ寄越された」

「……て、手痛い歓迎って、ヤツですかね」

笑みを浮かべてみようと思ひながら、頬が引き攣つて表面的には苦笑程度にしかならない。

彼は仕方無しに相手に対して身体を斜めに構え、おざなりなフアイティングポーズをとつてみる。が、相手は動じず、微動だにしない。

「一応、試練で貴様は三桁以上の戦闘経験がある。まだ完全に記憶を引き戻しては居ないようだが……」

「覚えてますよ。だから、もう膝は笑つてない」

イワイとの戦闘後に気絶する直前、その全てを思い出した。何度も繰り返した経験だが、その一つ一つを報告書に纏めると言われれば一晩で書き終える事が出来るほど鮮明に覚えている。故に、ケンカ程度の戦闘だが、それも積み重ねれば一〇〇ちよつとに到達していた。

されどやはりこんな事に慣れることはできず、また殆どが閉鎖された空間内で、周囲に障害物があつたからこそ勝利をつかめたのだ。こんなひらけた二車線道路での正々堂々の真剣バトルなどでは一方的な敗北を得る事は半ば確実であつた。

——面倒だ。

目の前のソレは口だけをそう動かしてから、腰を落としてやや前屈姿勢をとる。衛士は思わず横に飛び退くと、それを理解していたかのように飛び出した肉体は彼めがけて加速した。

「とんでもない秘密結社に落ちまつた……」

——殺意は肌を感じるほどに迸る。されど流石に本当に殺すつもりなどないだろう。怪我をするにしても、骨折程度で済むはずだ。感覚的には両手の指の骨折はついさつき完治したばかりなのだから、さらなる負傷は勘弁願いたい……。

衛士は体勢を整えるや否やすぐさま相手へ向かつて走り出し、大きく振りかぶる拳を突き出した。

しかしその影は容易にそれを避け、踊るような軽やかさで衛士の右、腕を伸ばし死角が出来上がる側へと回り込み一閃。硬く握られ

た拳骨が鋭く衛士の腹部へ突き刺さる。

鈍い痛みが肉体を貫通し、思わず痛みにも声を漏らした。顔をしかめ、俯き、相手の腕が離れると共に跪く。

コレで終わりなのだと、衛士は心の中でほくそ笑む。もし見限られたとしても構わない。意味の無い、負ける事が確定している戦闘なんてのは面白くも無い。衛士は咳き込みながらそう考えると、頭上でつかれた溜息が耳に届いた。

「時、^{トキ}本気で戦え、だそうだと。そうでないと彼女は貴様を逃がさんぞ？」

だろうな、となんとなく察していた衛士は口をつぐんで立ち上がる。砂のついた膝小僧を軽く叩いてから背筋を伸ばし、首の骨を鳴らしてから大きく伸びをした。

目の前の、黒い革で視覚、そして恐らく聴覚を封じているのにも関わらず凄まじい速度で迷いも無く肉薄してきたソレはエミリア曰く女性であり、それを聞いてから衛士は悪態でもつきたげに首を振った。

——最近、出会う人間に女性が多い気がする。しかも、馬鹿みたいな強さだ。といってもこの二人だけだが……。

それでも、今まで女性に縁が無かった衛士にとってのこの異性と出会う機会の多さには、少しばかり辟易した。普通に接していればいいのだろうが、どうにも強気で苦手である。

彼はそんな事を考えていると、不意に姉を思い出して苦笑した。

「自分で喋らないと分かりませんよ？ アナタとは、初対面なんスから」

黒いマントの下には太腿まで顔同様の黒い革が巻かれるヒールサンダルが露になる。衛士はそこから、コレが彼女の『耐時スーツ』なのだと判断し、厄介だと嘆息した。

これでは最初から戦闘能力に差が有りすぎる。

そして恐らく——これほどの道具が揃えてありながら、その耐時スーツだけでも多くの種類がある。

イワイであれば旧スーツと同様に全身で着込むもので、さらに肉体と一体化するもの。これを基本として、彼女のような、一体化はせず肉体の要所要所を強化するようなものもある。最も後者は衛士の憶測であるが、それでも下手をすれば適正者の数だけ耐時スーツが存在すると考えても大きな間違いでは無いだろう。

そもそも副産物だ。この道具を作ること自体が目的ではない。されど、半ば手段が目的となっていてもおかしくは無い。

まず時間——即ちこの世界を支配する為に研究してきた技術で道具が出来たわけだ。まずこの時点で本来の技術力、目的の技術より格段に大きく、レベルの高いモノとなる。なれば道具を作れば作るほど、時間を支配する事に関する技術が上がるかもしれない。

そう考えて作成しているのだろう。そうすれば応用力も高まるからだ。

「んとに、理解しがたいくらいにすげえな。漫画みたい」

掛かって来いと言わんばかりに、マントの下から出てきた腕は手のひらを天に向けて、指でクイクイと衛士を招く。その手は黒く、まさか酷手袋でも装備^{はめ}られているのかと危惧したが、革ベルトの継ぎ目が光りに反射して、衛士はほっと安心する。

今は肉弾戦しかないのだ。そんな卑劣な道具などを使用した暁には、意地でも本気を出したくない。が、こんなボンテージもどきな格好の女性に捕縛されるのも真っ平御免である衛士は、どちらにせよ、自身の出来る限りはしてみるつもりだった。

しかし——イワイとて手加減さえしなければ容易に衛士に勝てた筈だ。彼は負けなければ、一時的にでも死ななければあの世界から逃れられないから、そうしたのだ。

だからというわけでもないが、衛士には少しばかり自信が足りなかった。

やる気はある。漫然としたものだが。体調も万全だ。されど緊張がほのかな腹痛を誘発させた。

だが考えていても仕方が無い。

行動して、求められる全力を出して、負けて解放されればいいじゃないか。

そういった結論を元に、衛士は構わず走り出した。

が、直後、彼女の姿は不意に眼前へと肉薄して――。

振り上げた拳が衛士の顎を殴り抜ける。避ける事も出来ぬままに空を向く衛士は揺らぐ視界の中、もういやだと泣き言を吐いた。

追撃は無く、衛士は再び跪く。それでも留まらずにすぐさま立ち上がる。

「誘っというて、そりやないだろう！」

行動が早く、さらに速度としても速すぎる。故にその攻撃力は高く、立ち上がるも足に意識を集中していなければ膝が崩れてしまう程のダメージを肉体は蓄積していた。

叫ぶ声は虚しく響くだけで、彼女の返答を望めない。

衛士は頭を振って舌を打つ。湧き上がる怒りは深い思考を促した。意欲は既に、彼女に一撃でも与えて一泡吹かせてやろうと言う事に費やされる。

そうしている間にも、少しばかりの情けを掛けられているのか彼女は再び正面から肉薄する。衛士は反射的にその影へと拳を突き出して――彼女は死角方向へ回るのを確認した。

衛士はすぐさま虚空を殴り抜けた勢いを利用して、前に飛び込むようにして回避。それから受身を取るようにして立ち上がり、右方向へ素早く拳を穿つ。が、その数センチ先に現れる彼女の顔面には届かず。

衛士は歯を食いしばって飛びずさるように後退。行動を予測し、不意打ち気味での攻撃を行うしか、今の彼には立ち向かう術は無かった。

「んがっ」

素早く後退を続けていると、やがて強い衝撃が背に伝わる。硬い感触が後退を阻み、その衝撃で衛士は後頭部を打ち付ける。どうやら周りを見ずに後ろ走りをしたせいで壁、あるいは商店かビルの外

壁に到達してしまったらしい。

故に逃げ場は左右、前方に限られて――。

マントから突き出される右手は五本の指の肌を露出していた。その代わりとばかりに手のひらから輪っか状に伸びる黒い革ベルトが握られ、投げ縄を彷彿とさせる。否、実際にそれは投げ縄として使われるように、彼女は素早く衛士目掛けて輪っか状のソレを投げつけた。

まるで重りでもついているかのような素早さで投げ縄は接近。息を呑む間も無くそれは衛士の頭部を飲み込み、そして首元まで下がる。衛士は慌てて左腕を輪の中に挿入すると、間髪おかずに縮まり、拘束する。

「ちつくしょ……」

もうどうしようもない。そんな泣き言を吐き出したくなるが、衛士は必死に右手で伸びる革を手で掴んで、重心を低く、決して座り込まないようにしながら屈み込む。しかし力はやはり強く、衛士はじりじりと壁から離れ始めて――立ち上がり、彼女へと飛び込むように大地を蹴り飛ばす。

抵抗は瞬間的に衛士を引っ張る助力となって、彼は凄まじい速度で彼女へと飛び込んだ。衛士は拳を握って腰にひきつける。その間に彼女は腰を落として、手から伸びるベルトを両手で掴み、勢い良く身体を捻る。

彼女の間近に肉薄した衛士は、されどその肌に触れることが出来ぬまま自身を拘束する革ベルトに引っ張られて空を舞い、

「うわあああ――」

悲鳴は無意識に腹から零れ出る。その間にも視界にはやがて大地が接近し、やがてその顔面を叩き付けた。

皮膚が削れ、肉が露になる。衛士はすぐさまに意識を空白に染めて、口角を下げる彼女は、その直後に衛士が先ほどまで居た壁際に砂時計を発見した。

「やれやれ、本氣に殺すつもりならオレも出るとこ出るぞ」

眉間に皺を寄せて、肉薄する投げ縄に対して右腕を振るう。と、それは見事にその輪が腕に絡み付いて右肩までを巻き込み、輪を使用しないながらも縛り上げる。衛士はそれを確認する間も無く走り出した。

その間に、衛士は右腕を回してたるむ革を腕に巻きつけ――彼女は唇を噛み、初めて感情を露にするかのように自身が投げたソレを力強く引き戻す。が、先ほどは容易に出来たそれを、今回はまるで綱引きでもするかのような抵抗を覚えてしまう。

衛士は白い歯をあらわにして食い縛る彼女に構わず右腕で空に弧を描くように背後へまわすと――腰を落とし体重をかける暇も無かった彼女は身体を浮かび上がらせて、空へ舞い上がる。

空中では踏ん張ることも、力任せに引っ張ることも出来ず、また自身へ引き寄せるように衛士は革ベルトを引くと彼女は隕石のように真っ直ぐ彼へと飛び込んでくる。何かの悪い冗談かのようなこの腕力は、腕に巻きつけた革のベルトが強化してくれていた。

距離が瞬く間に縮み、衛士はそれを待つ間に左拳を作り上げ、脇を締め、振り上げた。

彼女はその顔面をやがて数メートルの距離に縮ませ、衛士はタイミングを合わせて頬を狙い、曲線を描くように打撃を与えるが、予期していたかのように添えられた手のひらに、それは受け止められる。肌が叩かれる音が虚しく響いた。

されど衛士は頬を吊り上げた。彼女ははっとして口を開き――とめることなど出来ない勢いに乗せられた身体は肉薄する。

衛士は頭を後ろへ仰け反らせ、力一杯に振り下ろす。

直後にその額は零距离に達する彼女の額と衝突し、ゴチンと鈍い音を鳴らした。

衝撃が両者の脳みそを掻き乱し、衝撃が全ての記憶、機能を僅かな間奪い去る。どうしようもない激痛が頭を襲い、衛士は思わず膝を崩す事無く彼女に押されて後ろへ倒れこんだ。彼女もそれに重な

るようにして、されど腕は狡猾に鳩尾を打ち、膝は金的を砕く。

それらを見守っていたエミリアは苦笑交じりに手を叩いた。

「まさか舐められないように尽力するのではなく、舐められているという立場を逆手に取るとはな。どうだ？ アンナ、評価としては」

革ベルトが包む左手で衛士の顔面を押さえつけ、身体を起こす。

それから彼が腕を自ら拘束したベルトを外し、透き通るような白い肌が露になるのを隠すように、再びソレを巻き始めた。

やがて暫くしてから登場時と変わらぬ様相となる彼女、アンナは額を押さえながら、口元に笑みを浮かべる。

「なるほど。ま、妥当な評価だとは思うがな。そもそも例外自体が酷く久しい。その上お前と対峙し一撃をくれてやるだなどと、正直私も驚きだ」

エミリアは抑えるように笑うと、アンナもそれに促されるように握った拳を口に当てて笑みを殺した。

「だが、いずれ死を背に携えて闘う日が来るだろう。こいつは根に持つタイプだ。特にこの組織に対する恨みは深い」

アンナが頷く。エミリアは静かに続けた。

「だからこそ強くなる。ソレを知って”彼等”も期待している……。辛気臭くなったな。こいつは私が寮へ運ぶ。お前は自称上級者共にも報告をして来い」

エミリアは嘆息交じりに首を振ると、横たわる衛士へと屈み、脇に抱え、持ち上げる。脱力する肉体はただでさえ六〇キロ以上あるそれをより重量を増して感じさせる。彼女はそれでもなんでもないので立ち上がって、アンナへと背を向けた。

「半月後を楽しみにしている」

彼女はそれだけを残して歩みを進める。

アンナはその背を見つめ、高く飛びあがり――手のひらから革ベルトを伸ばして、立ち並ぶ建物のちよつとした突起に引っ掛け、ターザンよろしく高い位置を渡って姿を消した。

かくして、衛士の少しばかり早い歓迎会はどちらが勝利ともつか

ない結果で幕を閉じた。

そして数日後、そんな事などは比較的マシだったのだと思い知らされるような訓練が開始した。

立脚点

目を開けると、目元に違和感があった。視界は曖昧になるように霞が掛かり、衛士は腕で擦るとどうやら涙で濡れていたらしいことが分かる。

何か夢を見たような気がするが、それは記憶に残らない。衛士は嘆息してから身体を起こした。

——そこでどうやら自分は寝台の上に横たわっていた、という事に気がついた。

動いても特にこれといった反発の無い硬いマットレス。見上げれば赤い電球だけが淡く室内を照らす照明。

細長い部屋は寝台から降りて大きく一步を踏み出せば正面に到達するであろう幅であり、長さも寝台の一つ半程度しかない。枕元、その寝台の上方の壁際にはソレと同じ高さの三つの引き出しがついたタンスが一つ置かれていた。

その上には衣服が畳まれて置かれており、その上にはなにやら書き置きらしき紙が一枚乗せられている。

衛士は上着を脱ぎ捨てシャツ一枚になってから、横開きの取っ手も無い扉の脇にあるスイッチを押して照明を付け直し、さらにそのすぐ近くにある洗面台の前へ移動する。備え付けてある鏡を見ると顔色はやや蒼く、疲れが見えている。衛士は構わず水道を捻り顔を洗った。

衣服を持ち上げると迷彩柄であった。分厚く、冬には丁度良いかもしれないがそれでも重く、着慣れなければ動きにくそうである。衛士はそれでも仕方ないと着替えてから、自身が脱いだソレを置き換え、書き残しへと視線を落とす。

それは衛士が居るその場を現在地とした地図であり、そこから出て医務室へ向かえとだけ達筆な字で書かれていた。

彼は嘆息して——ポケットの中から、そして脱ぎ捨てた衣服の中

から砂時計が失われていたことに気がついた。

もしかしたらアレに何か学習装置か記憶媒体やらが組み込まれていて、それを解析するために持ち去ったのかもしれない。あるいは、これよりただの訓練兵になるのだから一時保管という形で取り上げたのだろう。

衛士は何度も命を助けられたソレが身近に無いことに少しばかり不安を覚えるが、そもそもアレが無くとも生き延びる為の訓練を行うのだから、と自分を納得させて扉の前へ立ち直り、立ち尽くす。

「身体測定、検査……だろうな。一日で終わればいいんだけど」

壁と同質の素材。されど色が僅かに濃く、また壁との隙間が僅かに見える。だから扉で間違いは無いのだろうが、取っ手が無い。故に開けられない。どうしようもないと肩をすくめた。

その代わりにあるのは親指大の液晶パネル。鍵穴が無い所を見れば、衛士にとって身近ではない技術を駆使しているのだろう。

彼はそつとそこへ人差し指を乗せると、パネルが指紋を認証するように機械音を短く鳴らす。それから扉は数センチ奥へと沈むと、静かに右側の壁へと収納されていた。

廊下は人二人並べるか否かの幅を持ち、また眩い光りが全体を照らしていた。白を基調としたソコは長く、また近くには等間隔で同様の扉が並ぶ。衛士は素直に感嘆の声を上げながら、与えられた地図を片手に医務室を目指した。

医務室とわかりやすくパネルを掲げる扉にノックを二回。返事があったのは間も無くの事だった。

時刻が分からないから非常識かと思われたが、どちらにせよ二四時間いるらしい。衛士は勝手に開く扉が開ききるのを待ってから中へと足を踏み入れた。

「どうも。今日からお世話になる時衛士ときえいじです。よろしくおねがいします」

新品の下着類は身体に張り付く。黒い軍靴は足を揃えかしこまっ

た風に立つと、衛士の姿を一端の兵隊のように見せていた。

「昨日の朝に来て随分と眠っていたみたいね。呼びに行ったときも、まだ夢の中みたいだったし」

清潔感溢れる室内は、入って右手側にカーテンで囲われる寝台が二つ並ぶ。そして左手側には大きな薬品棚が並び、その奥に机が鎮座する。その上にはディスプレイの大きなパソコンが置かれ、入り口へ背を向ける白衣姿の女性は言葉と共に振り向いた。

「でもまあ……それでも随分と具合が悪そうね。風邪、かしら？」

短い赤髪を掻き揚げて彼女は眉を潜める。机に置かれていた白い縁の眼鏡を掛けて、彼女は立ち上がる。白衣はきつちりと前を閉められていて、長い丈は膝下に到達する。

カツカツと足音を鳴らしながらやがて衛士の目の前まで来ると、自身と身長を比べるように手を頭頂から並行に移動させて彼の額に平手をぶつけてみたり、また微動だにしない衛士の周りを一回転してから、何かを考えるように顎に手をやった。

「もうどこかで訓練してきた後とか言う体で？」

「……意味が分かりませんが、オレがやって来たことと言えば筋トレくらいです」

「身長は？」

てっきりここで計るとばかり思っていたのだが、そう聞かれて周囲を見渡すと測定器が無いことに気がつく。だから衛士は四月――体感的について二ヶ月ほど前に行った身体測定記録を記憶に蘇らせて、恐らくあれから一年近く経つのだから少し成長しただろうと微調整し、口にする。

「一七五……くらいですかね」

彼女はそれを聞くや否や衛士の腕を鷲掴んでみたり、腹を突付いてみたりしてからなるほどと頷いた。

「筋肉も随分あるみたいね。えーっと、歳は一七？」

「ああ、はい」

それから視力やら聴力やらの簡単な検査があった。酷く簡単なモ

ノで、片目を閉じて明確に指示されたモノが何かを説明し、また小さな声で呟いたことを復唱するなど、検査と言うにはあまりにもおこがましいちょっとしたテストだった。

彼女はまた頷いて、再び先ほど座っていた椅子へと戻っていく。

衛士は壁際に置かれる一つの椅子を引っ張り出して、彼女の前に腰を落とした。

「健康体ね。ちょっと疲れてるみたいだけど」

「まあ、でもオレどっちかって言うとなり込み隊長とか、そーゆー勇敢な奴じゃないんですよ。できればこう、後ろで狙い撃って数を減らす、みたいな」

「そう？ 聞いた話だと割りと言わらしいから、てっきり参謀あたりにでもなるのかと」

「参謀なんて」

衛士は肩をすくめてせせら笑う。

「そんな大層な役職だったら、この肉体一つで無数の敵を千切っては投げますよ」

何種類もある耐時スーツならばそれを可能出来るモノが一つくらいはあるだろう。

衛士はいつか装備するであろうそれと砂時計をどう使用すればよいかと考えながら口にした。

「へえ……。ま、どっちにしろこれからの訓練で左右されるでしょうけどねえ」

「オレとしてはやっぱり……。どうせこんな所に来たんです」

「最前線で言われたことを最大限にやり遂げてみせたい？」

「ええ」

「真面目ねえ、それと効率が悪いわ。言われた事をやれば良いの。ヘンなところでヘンな意地張ってヘンに張り切ってヘンに腕見せようとするなんて、愚かの極みだわ」

「なら大丈夫です」

衛士は胸を叩いて笑顔を見せた。彼女は どうして？ と仄かな笑

みを浮かべたまま問う。

「意地張る前に、敵なんて残りませんから」

「ふふ、実力が伴えば、その台詞もいつか格好よく聞こえるかもしれないわね」

彼の台詞には説得力など微塵も無い。もしかすると本当にそうしてくれるのかも、という期待すら感じさせない。

いつものように格好つけた少年、青年は口々に自信を吐き出してこの訓練校を後にして、そう長い間生き残った記録は小数だった。

誰もが自身の資質を上回る事ばかりを行い、そして散る。

彼女には、衛士もその一人に加わるようにしか見えなかった。だが、だというのに組織の連中はこの時衛士に目をつけている。試験による時間の回帰を理解し記憶を引き継いだという、前例の無い事をやったのけたという事が理由であるが……。

彼女は組織から渡された資料を手に取り、視線を落とす。衛士は疲れを隠すような精悍な顔つきで、あたりを珍しげにキョロキョロと見渡していた。

——試験の内容は五つ。その中でも失敗回数が多かったのが、五つ目の『刺客を始末しろ』である。理由としては肉親の死を引きずって精神的に立ち直れず、試験の制限時間を過ぎてしまったことだった。

そして成功したのは、その例の記憶を引き継いだことによる精神の虚無化により何も感じなくなったが故。しかし見る限りでは、どこにでも居そうな若者であることに彼女は疑問を浮かべる。

彼女は其処で、試験終了の日時を確認して、納得した。終了したのは現在から約九ヶ月前の六月であり、その為に吹っ切れた、あるいは立ち直れたのだと理解する。

その直後に彼女が心に浮かべるのは、衛士に対する同情であった。——以前からこの組織は何も学んでは居ないのか。いや、学んだからこそ、こうしたのだとしたら……。

彼女は心中で吐き捨て力がこもる指先を脱力させて、肩の力を抜

く。考えても仕方が無いことだと自分を納得させてから資料を机に置きなおし、衛士へと向く。するとソレに気がつく衛士は落ち着いた面持ちで前へ向き直った。

「ここでは強くなる術なんて教えていないわ。一秒でも長く生き残れる事を、そして少しでも確実に任務を達成することを教えているのよ。それとね、経験が無い実力なんて空っぽよ。科学者だって、それが許されて無いわ」

「返事だけなら犬にも出来ます。だけど、反論だけなら子供^{がき}だってする。ここでは自分勝手が仲間を殺すかもしれない。殆ど、軍みたいなモンですからね。学校とか、任務とか……」

「悩みは聞くけど、愚痴は受け付けてないわ」

その上言葉が抽象的過ぎるのは個人的に困る。そう言おうとするが下手に怒りを煽るのは下策だろう。彼女は故にそこから口をつぐむ。

——衛士にとって、肉親が殺されたのはついこの間のことである。たとえ月日が何ヶ月も経過していようが、衛士が感じているのはつい六月の事。そして数ヶ月の”経験だけ”が追加された、それだけである。だから、そう簡単に吹っ切れるはずもない。

されど彼は引きずらない。その代わりとばかりにそれらはある種の立脚点になる。

自分がなぜここに居るのか。何故そう考えるのか。全てはそれを基にする。

しかし、だからといってこれから仲間になるかもしれない者らに復讐を果たすわけではない。

最終的には計画者への復讐。生き返らせることなんてものが可能であろうとも、彼は望まない。日常にすら戻らなくていい。決意のままに目的を果たし、心残りが無い時に命を散らすことが出来れば良い。

それを口にしたい。

だが今はまだダメだった。心が弱いから。まだ自制が完璧ではな

いから。勢いづいて、場所も分からない本部へ突っ込んでいった。もうから。

「ただの捨て駒じゃ終わらせんよ。オレは……ここに来たんだ」
「強くなりたい？」

「後悔させてやりますよ……ジオフロントだからリスだか知らねえがな。オレは、オレを選んだ奴を！」

瞳には殺気が宿る。手汗が滲んでいた手はいつしか拳を作っていた。気がつくのと立ち上がり、我に返る衛士は、はっと表情を引き攣った笑顔に戻して踵を返した。

「すいません。忘れてください……それじゃ」

衛士は静かな怒りを隠せずにその場を後にする。残された保健医は湧き上がる驚きに肩を揺らして笑みを押さえる。それから小さく笑いを口にしながら顔を押さえ、それから大きく深呼吸をした。

呟くのは、なるほどと言う納得の言葉だった。

確かに”上の連中”の目は確かだった。

彼は真面目そうに見えた。そしてその実、その根も真面目そのものだった。言われたこともすべきことも全うしてやり終えてしまう、今まで散ってきた少年、青年と同様に。だがそれは本気ではなかったのだ。

どこか夢でも見ているかのような、軽い感覚。学校の授業で討論でもするかのような遊び感覚。

そして実際、その内を曝け出せば傍若無人に、されど狡猾に弱点を狙い獲物を一撃で仕留める猛禽を秘めていた。

恐らく、その時間の帰りを理解したのもそんな彼だろう。

彼女は何度も、なるほどと繰り返す。

「ふふ、はははは！ 面白いわ。やるときはやるタイプじゃないわね、やりたいときにやるタイプ。性質が悪いことたちに、副産物の使用に際す才能を秘めてる上に、目的の為なら努力を惜しまない。本っ当に、後悔するんじゃないかしら。最も、それを知らない”奴等”じゃないだろうけど」

当分は衛士の成長と任務とを繰り返すだろう。その間に組織は彼の成長の都度に対策を考える。だが、組織は未だ遣える駒程度にしか成長しないと考えているだろう。

然し彼女は、既にすっかりと彼に目をつけていた。

そしてこの保健医は先見の明があると評判である。それ故に、誰もが通る道であるこの訓練校の保健医という位置に立たされていた。逃げることも出来ず、衛士が言うとおりの捨て駒として育成される人間を見送る毎日。

今年度だけでも適正の無い憲兵を五〇人、適正者を五人育成し、憲兵は丸々生き残っているが、適正者は数が少ない為にすぐさま任務に借り出され――既に二人が死亡した。

油断が招いた事故であるが、それでもこれからその数は増えていくだろう。今回は特に、目に掛かる人間が居なかった年であったから。

「いいわね。あたしも頑張らなくちゃ」

なにやら俄然とやる気が湧いてくる。衛士の覇気に影響されたのかも、と冗談めいて口にすると思しげな笑いが自然に漏れた。

彼もいずれは死ぬだろう。だがその前に、一体何人もの敵、あるいは彼が敵として認識した存在が彼の手に掛かるのか……最低五年生き残るとして、と彼女は指折り数え、ほくそ笑む。

「五感は完璧。やる気も十分、だけど前線タイプじゃない……けど、アンナちゃんくらいは、やるかしらね」

伝聞だと先日既にアンナと拳を交わし、頭突きを一度当てたこの話である。仮にこれが衛士の訓練後で装備も行き渡った状態ならどちらかが確実に命を落とすか、命に関わる重傷を負っていた事だろう。

――彼女はアンナ最近の新参者で一番の実力者だ。大きなハンデを伴って、だからこそ実力を得た。

衛士もいずれそこまで到達する。それは確信でき、またそれ以上となるだろう。

だがそれには時間が必要だし――彼女は何よりも、その成長も、衛士の存在、人となり、全てが知りたくなっていた。

彼女が抱くのは親心でも愛情でも恋愛感情でもない。興味深い実験体が見つかったと、あるいは未発見の物質を見つけたかのような喜びだった。

十年以上続けている仕事だが、ここまでの逸材を見つけるのは初めてのことである。

周りは彼を見てもそこまでだとは思わないだろう。新参^{ルーキー}としてはちよつと出来て、生意気。その程度の認識に終わるが……。

「あー、いいわねえ。楽しくなってきた。すごいわ、すごい。どうにかなっちゃいそうっ！」

悶えるように身体を抱きしめ、彼女はふらふらと立ち上がって寝台へと倒れ込む。彼女はそのままボタンを閉める白衣を力任せに引きちぎると、ボタンが四散し、床に落ちて軽い音を鳴らす。

その中で開け放してある出入り口に気がついて、彼女は足でカーテンを閉めて寝台の空間を閉鎖させた。

「あれ、エミリアさん……？」

部屋まで戻ると、その扉を背にして腕を組み俯く姿が見える。それは褐色の肌を、黒い、体に張り付くタイトのような衣服に包み、それとは対称的な白髪流して右目を隠すようにするのが特徴的なエミリアであった。

衛士の声からややあつて静かに眼を開け、腕組みを解く。彼は思わず身構えた。

「未だ不安定だな、少年」

彼女はそう言って不敵に笑む。冗談めかしく放たれるその言葉は、それでも馬鹿にされたように聞こえて衛士はむっと口角を下げた。気を悪くするな、とエミリアは添えて、続ける。

「だがな、これだけは言っておく。今のソレを乗り越えなければ貴様は貴様が望む強さへ辿り着けはしないぞ？」

「どう、乗り越えればいいんですかね」

何度も繰り返した肉親の死。故に悲しいだとか悲惨だとか感じる事がなくなっていた。

まるでニュースで垂れ流される誰かの死を聞いて、かわいそうだなと感じるような他人事。されど実感が有り、それ故に自分がどうにかしてしまったのかと苦悩する。

泣けばいいのだろうか。喚けばいいのだろうか。今はそれすら分からぬ。

「それは自分で見つけてこそ乗り越えられる……なんて奇麗事を言えば貴様は納得するのか？ 私の知ったところではない。それは貴様の、自分の問題だろう？ ならば自分で見つけ、処理するのが当然だろうよ」

「はは、ですよね」

「それと、保健医をあまり喜ばせないでくれると助かるんだが……」「いや、喜ばせた記憶なんざありませんよ。そりゃ笑い声が聞こえましたけど、なんかあったんじゃないんですか？」

彼女が立ち聞きか何かで情報を得た。それ自体は別段驚くべきことでも何でもない。既に彼はここに來た時点で自室でもトイレでも風呂でも、その全てを見られてもかまわないという心持で居るからである。

「最後に怒鳴ったろう。その時に貴様の本質と言うものが見えたらしく、な。奴は興奮すると素面でも酔っ払いのような厄介さだ。貴様がここに居れば、恐らく貴様の前ではそうでなくとも私に被害が被る。担当、という立場が裏目に出るからな」

「担当……エミリアさんが、ですか？」

「ああ。先日は心配だったが、立場をわきまえた口調で私は嬉しく思うよ」

嫌味たらしく彼女は手を差し出す。衛士は苦笑ながら頭をかいてからそれに応じた。

露出している肌は首から上しかない。それ故に少しばかり硬い表

面を持つ衣服に包まれる手は冷たく、軽く握り合ってから直ぐに離れる。それからその衣服、先日彼女が説明した『旧・耐時スーツ』というモノに疑問を投げてみた。

「そのスーツの基本機能って、やっぱり時間の自然な流れ以外に影響されないって事だけなんですか？」

「ん？ ああ、他には体温、湿度を一定に保つ事が出来、またある程度の防弾性能……だな。最も前者は付属のヘルメットを装備しなければ効果を発揮しないがな」

「防弾って……？」

「一般的な防弾ガラス程度だ。最も衝撃はそのまま肉体に伝わるから、外傷が無いと言うだけだが」

それはある一定の衝撃を受けると硬化する素材を使用した故である。しかし彼女が言うとおり、そのスーツを身体に着ている為に衝撃までを防ぐことは出来ず、イワイが着ていたような戦闘服のようなスーツであればある程度の衝撃を軽減することは可能であった。他に何か？ と彼女は聞くが、衛士は首を振る。そもそも突発的な質問であつた為に、コレほどまで丁寧に説明されては少しばかり彼女が立派に見えてしまつて、思わず畏怖を覚えていた。

つまり格差の効果だつた。最も、だからといって彼女に全てを託そうとまで心は揺るがない。ただ訓練において信用に値するのだからと思える程度だつた。

「これから半月は戦闘に関する訓練を貴様に叩き込む……が、その前に、銀行口座の金を此方に持つてくれば良かったんだよな」

「え、あ、はい。表に行くんですか？」

「記憶、記録はそれ自体の時間を遡り”無かつたことにした”が、口座の関係で残しておかなければならないものがあつたからな。その始末をついでに」

「家の中にモノってありますかね……」

あれば良い。だが無ければそれでいい。衛士はそんな軽い考えで問う。その言葉を深読みして妙な同情心を沸かしてくれるなよ、と

祈りながら。

「ああ、貴様が格好つけて帰宅しなかったから、どうせ後で入り用なモノが出てくるだろうと思って残しておいた。なんだ、服か？」

服や本などは此方でも手に入ると聞いている。だから特に思いいれも無いモノを持ってきてしまえば変に愛着が湧いて手放しがたくなるだろう。それが衣服等となれば尚更である。

衛士は首を振り、どうせなら心がこもったものを、と考え口にした。

「居間に入って直ぐの右側の所にタンスがあるんですよ。固定電話が乗った。その一番下にアルバムがしまっており……そこから、集合写真、撮ってきてくれませんか。多分、中学卒業した時のがあるんですよ。家族の」

「孝行息子だな」

「はは、やめてください。家族に涙も流せないオレなんて……」

それから直ぐに、衛士は何かに気がついたように口をつぐむ。

どうにも最近、人前で自身の弱い部分を見せたり、無駄に会話を重く暗くしてしまう。それに意味が無いこと等知っているのに、つい口について出てしまうのだ。

衛士は視線を落とし、口を手で押さえて、それからそつとエミリアへと視線を戻す。

彼女は相変わらぬ無表情を極めていた。

怒られるか、見事にスルーされるか。衛士は後者を望んで息を呑む。が、彼女はただ静かに口を開いた。

「じれったいな、貴様は。昨日ここに来るとき、貴様をここに連れて来る際に、もう一度強く殴っておけばよかったと思うほどにな」

「……すいません」

「涙を流せない……そいつは今の、今回の貴様だけだろう？」

彼女はそこまで口にし、舌を打つ。

「後は自分で考えろ。それと、部屋の中に用紙と筆記用具を置いた。様々な物品の羅列があるから必要なモノがあればそれをマルで囲め。

無ければ空白に記せ。ここで支給された日用品はココを出た後でも引き継がれる。私物になるそれらだ。料金は貴様が任務で得た報酬から天引きされるが、好きなだけ選んでおけ。少なくとも貴様の立場で、金が無いから衣食住に困ってしまう、なんて事は決して無いからな」

彼女は言いたい事を、伝えるべき事を言い終えたとそのまま背を向け長い廊下を進んでいく。やがてその背がそう小さくならない内に右へと曲がり、姿は消えた。

衛士はエミリアに、結局なされてしまった助言を胸に、部屋へと入る。

——今のオレは涙を流せない。

記憶を蘇らせれば中々どうして、その通りで、三〇回繰り返した肉親の死を目の当たりにして一滴の涙も流せなかったのは、今、というか最後の、試練を達成した衛士だった。

それが何を意味しているのか——分からない。否、わかりたくなかった。

衛士は寝台に腰を落として頭を抱える。照明は消さずに居たのにもかかわらず、赤く淡い光りだけが部屋を照らしていた。

「まさか、オレはもう……」

涙の数だけ……という歌がある。衛士はそれだからこそ、今回の事から立ち直れば今よりもっと急速に強くなれると思い込んでいた。肉体的に無理であっても、精神的には、と。

だが今の様はどうであろうか。涙も出ない、今となってはそう悲しいとも思えない。親戚の十回忌に参加するような、今となってお決まりの事を思い出すかのような悲劇の希薄化。記憶には霞が掛かる。その程度の事象と成り果てていた。

それはつまり、既に乗り越えていると言う事ではないだろうか。

もう肉親の死などは吹っ切れているのに、それでも強くなれない、なれていない自分が嫌で、まだ引きずっているとホウを吹いているのではないか。

衛士は自分を疑い、強く眼を瞑る。

「なら、いい。そうだ、ならいい。それでいい。簡単な事で強くな
んてなれない。死は結局その程度なんだ。だったらいいじゃねえか。
オレは、ここで強くなれば。丁度良い。オレは生まれ変わる。試練^{あれ}
が立脚点だ」

齒を噛み締め、自身の言葉に心底嫌悪しながら立ち上がる。瞳は
潤む事無く乾ききり、表情に引き攣るものの笑みを取り戻した。

思い込むより、実際に口にしたほうがよっぽど”その気”になれ
た。力が湧くような気がした。心は先ほどより、幾分か軽くなった
ような気がした。

「はは、酷えよな、姉さん。オレのせいで死んだのによ、犯人も分
かってんのによ、誰もそれを知らないんだぜ」

衛士が存在は消え去るだろう。だが彼女等はどうなるのだろうか。
普通に考えて、衛士の記憶だけを取り除けば消え去る必要は無い。
だがその死体は誰が弔うのだろう。親戚、と考えれば妥当だが、生
存者の居ない家族などがそう手厚く弔われるはずも無い。

ここを出たら、出る事が出来たら立派な墓でも立ててやろう。衛
士は彼女等の記憶を走馬灯のように過ぎらせながら考えた。

「笑えねえよな。冗談じゃねえよな。何で死んじまったんだよ……
オレなのによお。砂時計のことも、オレが原因って事も謝れねえよ
……」

頬を伝う熱い一筋をソコに感じる。衛士は拳を握り、震えそうに
なる声を抑えながら続けた。

「でもよ、でもよお……オレ、強くなるから」
死人の思いなど分からない。最期に何を考えていたかなんてもっ
と分からない。霊的な事も信じない。

だからいつまでも背負い続ける。構うものか、と衛士は精一杯の
笑顔を虚空に見せた。

「見守ってくれよ。オレ、寂しがり屋だけどき、頑張るから。み
んな、心配しないで逝ってくれよ。オレの、せいなんだけどさあ……」

…逝くから、オレも。みんなの仇を討って……！」

眼を瞑ると熱い何かが全身に走る気がする。

力が抜けたか？

氣力が湧いたか？

考えるも先とは変わりが無い。この精神には、肉体には変化が見られない。

ならコレは無駄なことだろうか。即座に衛士は首を振る。

この経験は無駄にならない。経験というものの自体が決して不必要にはならないのだ。

だがそれは自己満足の類に他ならない。それは理解できていたが――。

「吹っ切れた……いや、スッキリしたって感じかな」

変えがたいのはこの清々しさである。

全てに対して本気で望もう。

今となっては誰にも負けないような気がした。それも若年者の戯言に過ぎないだろうが、そう思えるだけでも衛士は自分自身、大きな一歩を踏み出せたような感じがした。

本当の立脚点はここからだ。

衛士は心に刻み、衣服が畳んでおかれるタンスの上へ向かった。

そこには既に衣服は無く、代わりとばかりにエミリアが言っていた通りの用紙と鉛筆だけが置かれる。彼は大きく伸びをしてから、これからの事を夢想し、大きく息を吸い込んだ。

鬼ごっこ

輝かしい太陽はただの照明。蒼く広がる広大な空はただの幻影。踏みしめる土だけは真実であり、一見するとそこはこの学校にもありそうなグラウンドの風景だった。

されど気温は低く冬の様相を呈している。迷彩服姿の衛士はそれでも身を抱くような様子は見せず、直立不動で目の前のエミリアへと眼差しを向けていた。

「これより簡単な戦闘訓練を開始する。これは最低限身に着けておくべき技術であり、これが高まれば高まるほど、近接戦闘での死亡率が低くなる」

「そもそも任務ってなんなんですか？ 聞く限りじゃ戦闘ばかりじゃないですか」

「我等には敵対組織というモノが多く存在する。あらゆる国家に許され協力を得ていても、その国の中で暴動や犯罪を糧に甘い蜜を吸っていた者らには敵視されてしまう。故に、それらを鎮圧する中で邪魔が入るわけだ。私達にとっては酷く煩わしい存在だ」

つまりはそんな敵対組織の施設に入り込み徐々に無力化、そして弱まったところを叩き潰す。それを延々と繰り返し、また本来の鎮圧作業も加えるというものだった。

「この副産物として無敵ではない。間抜けが使えばそれ相応の結果に繋がる」

故に必要なとなるのは白兵戦での強さとなる。最も敵組織の基本装備と言えば軽火器、例えば短機関銃やアサルトライフル、カービン銃、ライフル等。そして拳銃類だろう。その上で手榴弾やら爆薬やら。弾薬も考え、総量で十キロ程度のそれらである。

一概に兵隊ではないとはい切れぬそれらは兵隊上がりでもあるかもしれないし、敵組織でもこうして育成されているのかもしれない。だがあるいは、軍自体が動き出しているのかもしれない。

そもそも国自体が手を組む事を建前として、なんとしても此方リリースの全貌、ないし駆使する副産物の手がかりでも知ろうと画策しているのかもしれない。

常識的に考えれば兵隊上がり、ないし敵組織が人材を育成しているか、国が動いている……その二つになるだろう。たかが秘密組織を暴く為に軍が独自に動くことなど無いであろうから。

どちらにせよ数は膨大で、だがそれでさえもこの組織には歯が立たなかった。

適正者之行っても精鋭部隊には叶わないだろう。故に死者が出る。だというのに敵は未だ抗い続ける。

その価値があるからだろう。どれほどの犠牲を裂いても手に入れるべきモノが、手に入れた際に今まで捨てた物量、その全てが上回ってしまふほどの技術がここにはあるのだ。

「質問は以上だな？」

「ま、考えても仕方が無いことですし」

——衛士は嘆息する。

確かにそうだ。今それを知ったところでどうなるというわけでもない。ココで飼われている以上下手に勘ぐる事は意味が無いのだ。

言われた事を素直にやってのければ良い。個人としては最低限のリスクで最大限のメリットを得る事が、成長する上での目標である。「ま、今週中に射撃と格闘の技術がある程度の段階まで引き上げるからな。覚悟をしておけよ」

エミリアは酷く彼女らしい冷血な笑みを浮かべると同時に、腰を落とし、太腿に備え付けてあるホルスターから一丁の拳銃リボルバーを素早く抜き、構える。既に撃鉄は起こされていた。

「これから二時間私から逃げ続けろ。此方も本気でやる。貴様も……な」

「はっ！ 分かりましたよ、昨日みたいに殺されちゃ元も子もない」衛士はすぐさま走り出せるような体勢に移行し、重心をやや後ろに下げる。彼女は拳銃を握る腕を空へと掲げ、二の腕で耳を塞ぎ、

もう片方の手で耳栓代わりにし、両耳を音から守る。

と、間も無く彼女は空へと迷い無い発砲を試みて――衛士はつま先で救い上げた砂を蹴り上げ、エミリアへと浴びせてから全力疾走で衛士から見て右方向へと駆け出した。

その背後でむせ込み、体をくの字に曲げる彼女から発させる、油断した自身と素敵な作戦を躊躇無く決行した衛士へと向けられる怒号が周囲に響き渡り、背後で聞こえた発砲音の直後、彼のすぐ横を通り過ぎていく弾丸の影が衛士の恐怖をあおっていた。

「ちょ、銃はッ！」

だだっ広く障害物もない。広さといえばその中心に円周五〇〇メートルの白線で構成される楕円があるだけで、恐らくそれをきっちり並べれば三つ四つ入るだろうとの推計しかできず、ただ逃げ回るだけなら文句の無い広さである。

とはいえ銃などの飛び道具を使われてしまえば逃げ場などあつて無いようなものだ。無論、拳銃である限り距離を取って動き回れば、あるいは行動の中で冷静な対処さえ出来ればある程度は大丈夫だろう。

「安心しろ、使わん」

だが問題は体力だ。

良く訓練され、教官にさえも選抜され、さらに先日襲撃してきたボンテージ姿の女性にさえも一目置かれる彼女である。そんな人間を相手にするのは、ついこの間まで平凡な高校生であった少年。肉体を鍛えてはいたものの、それは飽くまで単なる筋肉を強化したものであり、体力が上がっているのかと問われれば首を振るしか他無い。

振り向く余裕は無いが、声の調子から見て怒りを孕んでいる様子は無い。本気、と口にした以上――その感情を表に出さないことに本心が知れて、それ故に怒号を撒き散らされる以上に恐怖してしまう。

逃げ切れるか？

されどこの問いが無駄であることを衛士は知っている。

逃げ切らねばならない。そうしなければオレはこの世界で生き残ることなど、到底出来ないだろう――。

目の前に金網^{フェンス}が迫る。外の人氣が無い都市街とグラウンドとを遮るそれは周囲をぐるりと包み込み、唯一の出入り口は訓練学校へと繋がる扉一枚。それでさえもグラウンドとを隔てるように十段近い階段があつて、その左右は土手となる。

つまりここはちょっとしたくぼ地であるのだ。

だからどうと言うわけではなく――衛士は咄嗟に右方向へと軽くステップし、着地した足で方向を転換。そのまま左方向へと走り出す。このまま走ればフェンスの角へと到達する。無論、そこへ向かうか否かはどれほどまで距離を縮めていられるかで判断するのだが……。

衛士は背後を確認し、思わず速度を緩め、足を止める。

その理由は――グラウンドの中心で、未だそこに立ち尽くし続けるエミリアの姿があつたからだ。

鼓動は高鳴るも、呼吸は乱れない。冷たくなる頬は、風も吹かない大氣によつて冷えていた。

衛士に背を向ける彼女の頭部には、なにやら黒い一閃が走っていた。目を細め、注視するとそれがなにやら帯であることが分かる。ハチマキのようで――結び目が見え、衛士は舌打ちの後、叶わないなど嘆息した。

彼女は自ら視覚を封じている。それは目で追わずともそれ以外の情報で衛士を捕まえるのは容易という事を言っているのかもしれないし、あるいは衛士の訓練でさえも自身の鍛錬にする貪欲さを垣間見せているのかもしれない。

こういった限られた空間で逃げに徹するにはどうすべきなのか――この際だから考えようと衛士は思う。

開けた場所だ。視界を遮るものも無いし、あるとすれば砂を投げつける目潰し程度。されどそれも一度やってしまえば二度以降は通

じないし、なによりもその射程圏内でそういった行動をするのにはリスクが大きいような気もする。相手にもよるが。

そしてこの寒空の下——これを任務だと仮定するならば、それを想定した訓練ならばココは閉鎖された空間。そして室温は低く、さらに暗いだろうと考えて間違いない。だがそれを想定しているのは彼女であり、衛士が与えられているのは前者だ。

ならば与えられたものを最大限に活用しよう。

二時間逃げ続ける、というのはこの決められた範囲では半ば無謀である。体力の問題もあるし、逃げるパターンも随時考えていかなければ先を読まれてしまうだろう。

腕力、知力、体力、そして戦闘技術、経験。全てにおいて分が悪い。本当に逃げ切れるだろうかと不安になるも、そもそも逃げ切れずとは両者とも考えては居ない。

要は”どこまで出来るか”である。

行動から見る思考、そしてそもそもの行動、その素早さや思い切り。その全てを計ろうとしているのは衛士にも分かった。

だからこそ——自分にとって最大限に”出来る事”をやってみようと考えた。

二時間逃げ回って体力を消耗し、その末に捕まることなど患者の極み。ならば体力がある今こそ——と。

衛士は決意し、迷う事無く走り出す。向かう先は勿論、エミリアの方向だ。

立ち向かう。痛くはあろうが、二時間逃げるよりは比較的马シであり、そして楽だ。

「ははは！　ここまで予想通りだと、私の思考が読まれてるのかと心配になるな」

彼女は高笑いをあながら振り向く。動作は軽やかで、まるで足元に土台があってそれが回転しているかのような自然さで——行動はすぐさま駆け出す事に転じる。

姿勢は低く、空気抵抗を下げるように。

だが彼女の速度は確かに目を見張るものがあれども大気が彼女の行動を遮ることは無い。このまま走れば速やかに衝突するだろうが――衛士は立ち止まる。

目的は可及的速やかに相手を無力化し二時間を経過させることだからだ。こちらから出向いて返り討ちにあうのなら、先制攻撃に失敗して打撃を受けることのほうが幾分かマシであり、

「今度は、避けてみることだな」

目の前までに肉薄する。彼女の姿は恐怖によって何倍にも巨大化するグロテスクな怪物に映り、衛士は思わず肝を冷やす。が、奥歯を噛み締め踏みとどまった。握り拳は正拳を作り、二度と打撃で骨折などといった事態を招かぬように形成される。

衛士は腰を落として、まるで精密狙撃でもするかのように射程圏内に入った彼女へ構えると――直後、大気は渦巻き、砂埃を巻き上げる。彼女の姿は一瞬にして消え去ったかと思うと頭上に気配を感じ、見上げると背後で衝撃を殺すような着地音が耳に届く。

人間離れの跳躍力で背後へと回り込んだエミリアは屈んだままの体勢で足払いをする。衛士は慌てて前方に受身を取るように回避し、振り向き様に立ち上がって、数秒、停止する。

彼女もそれに応対するように、数メートルの距離を取って正面に立ち止まった。黒いハチマキが視界を遮っているというのに、行動はそれを装備する以前と何か変わった部分が一切見えなかった。

「避けるも何も、攻撃してないじゃないですか」

「なら貴様が掛かって来い」

「いやですよ。疲れるから」

「怠け者」

「エミリアさんだって、オレが一撃で倒せないかも知れないから怖くって手が出せないんでしょ？」

「面白い冗談だ。余裕があるな貴様」

「そっちは余裕なさそうですね。口元、引き攣ってますよ」

その瞬間、衛士にあわせて作っていたであろうその僅かながらも

存在していた表情が、一瞬にして彼女から消え去った。同時に彼女の腹の底から溢れ出るような殺意が衛士の額のだ真ん中を貫き、彼はその刹那恐怖を刷り込んだ。

しかし彼にとってこれは予想内のことであり、またむしろコレを望んでいたともいえる。

感情を露にしてくれば行動が安直なモノとなりやすい。彼女にいたってはそれが見せかけのものである可能性もあるが、どちらにせよソレがあるのとないのとは衛士の対応は大きく異なる。

なぜならば、エミリアが衛士の調子に乗せられる、ないし乗ってきたという事になるからだ。

そう思わせること自体が彼女の作戦なのかもしれない。そうでないかもしれない。しかしそんな事を考えれば堂々巡り。折角得たこの機会も仮に運否天賦だとしても利用しない手はないのだ。

ならば存分にやってみせよう。

衛士は苦笑するような笑みを満たして彼女へと肉薄する。

エミリアはそれに応じるように大地を蹴り、それよりも早く衛士の懷に潜り込んで一閃。

衛士はそれを視認するや否やすぐさま背後へ大きく飛びずさる。

故に両者の行動はまるで対になるかのように連動し、彼女の拳が素早く振り抜かれるも――その拳は衛士の胸板手前で停止する。直後に衛士は倒れ込むように彼女のから空きの懷へと沈み、腹に接着するように背を向ける。

突き出された腕を肩に背負い、大きく開いた股に深く踏み込み――腕を基点に彼女の身体を背負い上げ、叩き付ける。エミリアの肉体は予想以上に女性のモノとしての重量しか備えておらず軽量。

地面は揺らぐ事無く砂塵を起こし、彼女は受身も取らずただ衛士の足元に横たわった。

――コレほどまでに容易なものかと彼はそのまま身構えるが、彼女の動きは無い。ただ眼を見開き、虚空を見上げたまま微動だにしない。辺りは奇妙な静寂に包まれていて、それがより、動かぬ彼女

の不気味さを増長させていた。

「正直驚いたな」

彼女はまるでなんでもなかったかのように口を開いた。既知の芸当を新しく発見したと見せられたかのような気の抜けた声の後、エミリアは身体を起こし、立ち上がる。その際に、装備していたハチマキを解き、手に握った。

「私が不意をとられるとは」

どこか遠くを見るように彼女は告げる。衛士はそんな彼女の言葉にただ自分の命だけが心配になってきた。

「は、はは。こんなことで怒らないで下さいよ？　油断したエミリアさんが悪いんだし、そもそも――」

「怒る？　私がこの程度で怒りするはずが無い。逆に、私の油断を見抜いての行動は賞賛に値すると言っている。先日もそうだ。彼女が貴様を侮っていると見たからこそ、あの大胆な作戦だろう？」
「上手く隙を見抜いた攻撃。彼女が見る限り衛士の行動の全てはそれだった。」

その気になれば力押しで完封することもできるだろう。だが彼はそうせず、相手の力を利用する事ばかりに励んだ。そしてそれが確実な手段であろうとなかろうと、実行し、そして成功させてきたのだ。

相手の攻撃の直後、というのはその相手の隙が最も大きくなる。が、攻撃を耐え抜く、あるいは避けねば入り込めない隙である。彼にはそれが出来た。それはなぜか？

――時衛士が感じる恐怖は見てどれほどのものか分かるくらい表情に出ている。それが見せ掛けとでも言うのだろうか。

そもそも彼は自身が既に悲劇を乗り越えていることに気付きながらも否定した男だ。実際、恐怖を感じていなくとも一般人であることを主張するようにそれを表面上に出す事などは容易であろう。

だが彼自身、怖いことは本当に怖いと思い込んでいる。思い込みは彼にとっての真実となるのだ。故に、エミリアから見れば見せか

けのソレかもしれないが、衛士にとっては冗談でもなんでもない、心からの感情であった。

今回、否、これからの訓練は彼の本質、試練で構成されたその精神を表に引き出すことが主となるか――。

彼女は嘆息し、なるほどと頷いた。中々面白い男だ。アンナが、そしてあの保健医が認めるほどのことはある。

「特に深い考えがあったわけじゃないですよ。出来るときにやれることをやって見せただけです」

決断力は極めて高いだろう。以前の彼の担当者の報告書レポートを見る限りでは桁違いに成長している。

「それで、一番相手に通用する攻撃方法、ですかね。講釈垂れて恥ずかしいんですけど、そんなところですよ」

そして咄嗟の判断。これから一週間出来る限りの事を彼に施せばドレほどまでに成長する？

ひ弱な肉体に強化外骨格パワーダースーツを装備させるほどまでに強くなるだろうか。彼女は誰にとも無く首を振る。

さすがに期待しすぎだ。だが可能性は少なくともある。数値に交換すれば途轍もなく低いものとなるが……それでも常人には決して存在しないそれだ。潜在能力が高い、と言うのが一番正しいのだろう。

「まあいい。後九〇分残っている……十数える間に逃げろ。今度はそう簡単にはいかんぞ？」

彼女が人に向けて良いのか分からぬ悪意を孕む笑顔を見せる。衛士は思わずその背筋に冷たいものが走るのを覚えて――。

悪夢と言っても差し支えない一週間が、始まった。

処刑

時衛士に付きっきりで行う訓練もいよいよ一週間が経過する。

単純な肉弾戦、銃火器の扱い方。それらをそれぞれ一日五時間行い育成する。次の段階には七日が経過した時点で強制的に移行させるつもりだった。

褐色の女、エミリアは自身と衛士しか利用していない寮の廊下を歩き、顔に掛かる無造作に刈られたショートカットの白髪を掻き揚げながら嘆息した。

時衛士の成長は思いの外滞っていた。芳しくない、というのだろうか。

最初期の戦闘では中々の腕を見せた。見事に意表もついてくれたのは流石に出来すぎだと苦笑してしまうほどだった。しかしその初日から激しさを増してまた内容も濃くした訓練を続けてきたのにも関わらず、今の彼はその鍛錬によりやく”慣れ”を見せた程度だった。つまりは、一般人に毛が生えた程度。ここに来た者ならば誰でも容易にたどり着ける境地。

動きは確かに良い。判断も中々だ。しかし繰り返す中でそれは研ぎ澄まされるわけでも鋭く剥かれるわけでもなく、良くも悪くも以前と何も変わらない。

天才だと思っていたが、ただの早熟だったのだろうか。彼が自身を磨く事をすれば、表の世界の何らかの競技で世界的に目立つことも出来ただろう。だがその程度では、競技の範囲の強さでは役には立たない。この世界ではそうだった。

まるで肩透かしを食らったような気分になって、また幾度目になる溜息を付いた。

保健医にも相談してみようとは思うが、彼女と一度でも会話を交わせばゆうに二、三時間は潰される。薬品棚に忍ばせる酒瓶を片手に話は一方的に弾んでしまうだろう。下戸である彼女にはそれが苦

痛でしかなかった。

だからといって組織リリースの上役に楯突く訳にもいかない。彼を任された以上、どんな資質を持っていようと一人前に育て上げる事が義務であるからだ。それを放棄したいと、それを成し遂げる自身がな
いとこの口でそう吐き捨てる事など言語道斷、天地がひっくり返ってもありえないことである。

何もせずにあの実力だから評価された。だが一週間、四月から受ける訓練以上の鍛錬を積み重ねた彼の実力が以前のままでは既に評価に値しない。最も、一般人と考えればやはり伸び白はあるのだろうが……。

エミリアはなんだか、好いた男の情けない部分を目撃してしまったような落胆に襲われながらもやがて衛士の部屋の前に来た。

時刻は午前一時〇〇分。恐らく”目標”が派手に行動を起こすまで二時間はあるだろう。

夜はこれからだ。それ故に、タイミング良く起きたコレにこの新参者を体験させない選択こと肢はないだろう。

彼女は今日に限っては耐時スーツではなく、カーキ色のチノパンに黒いタンクトップ姿。冬の空気には些か厳しい格好であったが、特に危険も無い自由時間であると彼女は季節問わずその格好であった。理由は簡単に、動きやすいから、である。

エミリアはポケットから銀色の短いキーを取り出すと、そのままおもむろに人差し指で液晶パネルへと触れる。直後にそこは音も無く赤く点滅し、彼女はそのまま五秒程度指を押し付ける。すると短い電子音の後、その直ぐ下の板が沈み、流れ、鍵穴と入れ替わる。彼女は手にしていたマスターキーで鍵穴を捻り、自力で扉を開けしめた。

廊下の変わりなく辺りを照らす照明の明かりが中へ差し込むと――その正面にある寝台に、半身を起こして彼女へと向く衛士の姿がそこにあった。

音で起きたのだろうか。あるいは気配か、それとも最初からそう

していたのだろうか。エミリアは短く考え、彼のことだから音によって目が覚めたのだろうと答えを導いた後、握りこぶしを腰にやって端的に告げる。

「組織内で不審な動きを見せる影があった。恐らくソレはここを逃げ出し、処刑される。流石に参加は出来ないが、見学だけでもしておけ」

「……ちよっと、聞いてた話と違うんですけど」

——不意に妙な気配に目を覚ましてみると、電子セキュリティが施されているはずの扉はおもむろに開き、逆光の中で偉そうに立つそれが口を開いた。声は聞き覚えがあるというか、嫌と言うほど聞いたエミリアのものである。

覚醒した瞬間には既に頭は冴えて眠気は吹っ飛んでいた。故に、彼女の言葉に妙な違和感を覚える。

以前聞いたとき、逃走者だとかいう、ここから逃げ出す人間は殆ど居ないと聞いたのだ。だというのに、幾らなんでもそんなとびきりに珍しい事が丁度このタイミングで起こりえるだろうか。衛士は首が引きちぎれるくらいに首を振った。心の中で。

「安心しろ。あの説明は逃走者は居るがここを出るものは皆無だ、というものに過ぎない」

「いや、逃げ出すものは居ないって……」

「ある意味そうだ。この地下空間から出られないのだから……言い得て妙と言うものだろう」

詐欺だ。衛士は嘆き頭を抱える。もし夜中に目が冴えて散歩でもしている時にそんな場面と出くわしたらどうするつもりだろうか。話では”処刑人”という特別な役職が存在する事から逃走者の量は勿論、その仕事の正確性は疑う余地も無いのだろうが——。

「まあいい」

「全然良くないですよ」

「一時三〇分までに寮の前に来い。後はそこで説明する」

「ちよっと——」

「遅れるなよ」

扉は一方的に閉められると、直後に自動的に施錠されて隙間が失せた。倉庫のような狭い部屋の中からは再び光りが失せて、衛士はなす術も無く嘆息し、寝台を後にした。

この地下空間では巨大な空調が気温を操作している。だが冬は冬らしく、夏は夏らしく気温を変化させ表の世界と大きな違いを作ろうとしないために、今現在は酷く寒かった。

そうはいつでもこの空間に夜は無く、外、というか部屋から出た時点で凄まじい光量が衛士の網膜に襲い掛かっていた。

彼はしっかりと迷彩服を着込んでいるのにもかかわらず、エミリアはタンクトップにチノパン、それに革の軍靴が如きブーツだけを身に着ける。腰に巻きつけられるホルスターには一丁の愛銃だけが装備されていて、外は一切の無防備だった。

「時に貴様。これまで刀剣と銃をそれぞれ使用してきたわけだが、どちらがより手に馴染んだ？」

何気なく、寮の軒先で並んで立つ彼女は尋ねてくる。衛士はそんな不意の事に、そうだなあと暫し経験を思い返して思考する。

刀剣ではナイフは軽く、また肉弾戦に近い射程でより確実に急所を打つ事が出来る便利な道具だった。また拳のみを使う相手であれば防御が同時に攻撃に転じる。刀の場合は重く、慣れや経験のせいで間合いが分かりづらく、素早い相手には不向きであった。西洋剣も重量が増すだけで同様の結論へと導かれてしまう。

銃火器の場合は、拳銃であれば遠距離からの射撃が不可欠であるものの近接格闘に交えるのならば酷く使い勝手が良い。銃底も固く打撃に移行する事が出来るが、それを目的に使用するにはやや不向きだ。されど素早くともその軌道さえ読めれば問題は無い。ナイフを併用すれば尚よし、と言ったところだろう。

アサルトライフルは予想を上回る反動に驚いたが、慣れれば確かに弾幕を張るのに便利だろう。多勢を相手にするには便利と思われ

る。ライフルの場合では反動は段違いであるものの、その一撃一撃に確かな力強さを感じる。が、やはり衛士に向くものではないようだった。

「西洋剣とかにはロマン感じますけど、やっぱナイフですかね。拳銃は便利でしたが、予備弾倉とかの持ち歩きで荷物が重くなるのが嫌です」

「なるほど」

「剣とか、使う人居るんですか？」

「自称達人、がな。だが実力は確かな者ばかりだ。貴様のように無駄があるわけではないからな」

外にもワイヤーや鞭、ナックルやらスタンガンやらを好んで使う人間も居るらしい。彼は想像もつかないそれらに感嘆し、それから自身の平凡さに照らし合わせて首を振る。

特別な道具を使えるからといって平凡だとか、そうでないとか言う事は無いだろう。それぞれに合った武器を使用し、それで命が長引くのならばそれでいい。各々が珍しい、ないし汎用的、量産的、陳腐的な道具を使用する利用などそんな程度のものなのだ。

特殊な効果が付随する道具として、使う目的はそれと相違ないだろう。ただ特殊、特別なだけ。利便さがいくらか上がっているかもしれないが、かえって面倒になっているものもある。適性者とは、ある種の実験体と考えても大きな間違いでもない。そう考えられたが、特にこれといった感情は湧かなかった。

「いずれ貴様もそれらと肩を並べ背を預けることになるだろう」

「ここでも人間関係は良好で行きたいんですが……幸先が悪かったですからねえ」

「なんだ貴様。まだ”彼女”の事を引きずっているのか？」

「……ッ！」

頬を緩めてちょっと皮肉る。そのお返しがその精神を深く抉る物になるとは思っても寄らなかった。

衛士は思わず反射的に眉をしかめて、エミリアを睨む。彼女は無

表情と言うよりは少し眉尻を下げて同情といった意味を孕む顔をしていた。

そんな、彼女に似つかわしい表情に不意をつかれ、たじろぐ。何か自分が悪いことでもしてしまったかのような後悔に似た感情に襲われるのは、やはり生来女性に弱いからなのだろうか。

エミリアが言う”彼女”とは違う優しさ、あるいはソレに類する何かを彼女から感じてしまう。幻想だ、と衛士は首を振り、気まずそうに顔を背けた。

——直後、耳をつんざくようなアラーム音が周囲に響き渡る。空は未だ蒼く明るいままだが、衛士は本能的に赤く点滅する世界を垣間見る。

傍らのエミリアはリラックスするように腰に手をやるが、まるで初めてである衛士はそんな状態に精神を持っていけるはずも無く、彼女から一歩後ろに引いて身構えた。

何が起こるのか、想像もつかない。目の前で惨殺が行われるかもしれない。だがここに来る遙か後方で全てが片付いてしまうかもしれない。あるいは逃走者の戦闘能力は強く、処刑人と対等な戦闘を繰り広げる可能性さえある。

逃げ出すからにはそれなりの情報と、道具も、武器も持ち出すだろう。だがソレに対抗すべく構成された処刑人である。複数形はついていないものの、複数出てくることは必至だろう。また逃走者と同様だ。

——平和な道路。二車線が広がり、歩道とそれを隔てるように街路樹が植えられている。その風景は衛士が今まで居た世界と何ら変わったところが見えない。大きな違いといえば、この一週間を過ごしてきた中で、保健医とエミリア以外の人間と出会わぬほど人氣が無い事であった。

立ち並ぶビルや商店はただの飾りで中は空洞。建造物はしつかりとした造りであろうとも、それは見せかけの為に作られただけであった。商店やはここより十キロ以上進んだ先にある、いわゆる市

街地に行かなければ存在しない。人も、ソコに行けば表の世界と同様の密度で居るらしい。

そして今回の逃走者も、どうやらそこから此方、つまり出口があるらしい方向へと逃げ出しているとの話だった。

「数は二人。武装はM4カービンをそれぞれ装備し、また試作型である新・耐時スーツの発展型を装備している模様。足は施設に駐車されていた四駆」

対する処刑人はただ一人。武装は試作、発展型に依存しない独自の耐時スーツであり、それに一本の身の丈ほどある大剣のみ。

どう考えても重量以前に追いつくことは無理であるように見えた。「しかし、依存しない独自の……ってなんなんですか？ アンナさんみたいなの？」

名前は先日伺っていた。だから彼はそれを口にする、彼女はうむと顎を下げた。

しかし——着脱不可の耐時スーツが試作型と聞いたときには耳を疑ったものだ。試作でありながらもその効果は他のものに引けをとらぬほど十分で、それを基点に発展型を作ったものの、それを開発した以降で様々な耐時スーツが現れてしまったせいで”基本型”と言うものが存在しなくなってしまった。

あるのは初期型である試作型のみであり、その他はそれぞれの使用目的、ないし利用者の好みによって装備が分かれる。何よりも種類が多いのはそんな事が主な理由だった。

「処刑人は匿名で参加するため適正者の中から無作為に、その際に適切な人数が選ばれる。ここに居る人間は全員関係者だからな。逃走者に義理を掛ける間抜けは居ないが、少なくとも配慮した結果だ」「でも、一人で十分って判断されるんじゃない、もう終わってる可能性も……？」

「貴様の存在は少なくとも適正者全員が知っている。今回の事を貴様に隠す理由が無く、故にわざわざここまで泳がしてくれるだろう」——言っている間に、左方向から僅かなエンジンの駆動音が耳に

届く。聞きなれた、されど最早懐かしいとさえ感じるその音を衛士が聞き逃すはずも無かった。タイヤが道路を掛け、その白い塊は徐々にその輪郭を確かなモノにしていく。

フロントガラスの奥に二つの影。そしてその上に、仁王立ちする一つの影が異様過ぎるほど映えていた。

「……配慮、ですか」

仲間殺しに心を傷つけるものが居るだろうという配慮があったのだろう。仁王立ちする影は覆面を装備しているが、どうにもその行為はパフォーマンスとしか受け取る事が出来なかった。

「ま、多くの者は嬉々として……はないだろうが、躊躇することも無い。因果応報だと吐き捨てるものが殆どだ」

彼女は腕を組んで、そう豊満でもない胸を押さえつける。下着を着けていないのかソレは窮屈な様子も無く形を変えているが、少なくとも衛士の興味がそちらへ向くことは無かった。

衛士は嘆息し、それから再び視線を車へと向ける。

その頃になると、四輪駆動はすっかりその姿を大きくしていた。

衛士はエミリアに促されるように街路樹の脇にまで足を進める。

瞬間——異常なまでに直立不動を極めるその影は途端に飛び上がったかと思うと、凄まじい速度で四駆のやや手前に飛び降り、進路を塞ぐ。八〇キロ近く出されていたその速度で、僅か十メートル足らずの距離に居るソレを四駆が避けられる筈も無く、衝突。

ドン、と鈍い音が響き——タイヤはドリフトでもするかのようにゴムが擦れる甲高い音を鳴らして、停止する。ボンネットはひしゃげつぶれ、僅かに浮き上がる前輪はそれから重量感たっぷりの重鈍な振動で大地を揺らす。

添えていた腕をボンネットから放した処刑人は、その身を鎧に包んでいたと言う事に、衛士は漸く気がついた。

全身鎧。遙か昔の、学校の西洋史やゲーム、漫画でしか見たことの無いような甲冑。それらと違いがあるとすれば継ぎ目が無いことだった。

まるで全てが一枚の鉄板で作られたかのような流線型の胴。後から装備するのであろう手甲は対照的に幾つもの部品を継ぎ合わせて一つになるかのようなもので、厚く、フリルでも着いているかのよう
に下腕から滑らかな鼠返しのような外見となっている。

腰巻き、はいたて佩楯の部分は何枚もが端を重ねるように巻かれ、脚甲はその脚にあわせたように特にコレといった特徴も無いつくりとなっていた。

極めつけはその処刑人の体格である。

鎧、否、耐時スーツを装備しているはずなのにその下の屈強な肉体が良く見えるようだった。背丈は高く、そもそも肉体自体が巨大であった。それ故に、怯える逃走者の姿はまるで赤子のように見え
てしまう。それは決して彼等が萎縮するから、というわけでも無い
だろう。

慌てて車から這い出る二人はそんな処刑人を目の当たりにして、見上げ、構えるカービン銃に全身の震えを伝達する。頭の形に沿った、ただ視界を確保するだけの穴が横に一閃空くだけの兜はそれ故に処刑人の表情を見せない。覆面に見えたのは、そのせいだった。
「て、てて、てめえ……っ！」

ゆうに一〇〇キロは超えているであろうその体軀は鎧、大剣も相まって倍近くになっている筈だ。だというのに四駆に乗っていた彼等はそれに気付かず、またその車の速度を上回って前に飛び出した彼の身体能力のことなども、とうの昔のように忘れ去っていた。

ただ鎧を装着しているから、銃弾が効かず、卑怯だと彼らは言葉にならない声で喚く。処刑人は困ったように兜の後頭部を撫でると、それから背負っていた大剣を、まるで重量を感じていないかのように持ち上げ、構えて見せた。

正眼。それから上段。腕の震えは無く、僅か三・五キロの銃を構える細腕だけが小刻みに振動している。その肉体は立派な戦闘服に包まれているというのに、それ故に処刑人を前にするまで余裕を撒き散らして出てきたであろうと言うのに、今ではすっかり顔面を蒼

白に塗り替えていた。

「い、いやだ、死にたくない、ここを出て、こんなところ出るんだ……」

「俺だって、やだ、やだ、父ちゃん、母ちゃん、俺——」

恐怖が臨界点に達したのか、男は意を決してトリガーにかけた指を力いっぱい押し込むが——カチリと、何かに引っかかるようにトリガーは動かない。処刑人はそれを待っていたのか、あるいは彼の決意、ないし行動を見守っていたのか、短い嘆息じみた息遣いが兜から漏れた。

直後に一閃。

大気を振るわせる豪快でありながらも正確な一太刀が迷い無く男の頭部に振り下ろされた。

刃はそれでもなまくらである様に、刀剣として切ることは無く頭を叩き割る。重量に押された肉体は骨を砕いて肉体を維持し切ることが出来ず、そのまま破壊音と骨がひしゃげる音、水が立てる音とを混じらせてやがて刀身は冷たい道路へと到達する。

周囲に肉が、血が飛び散った。大剣は血に塗れ、その下には肉塊と成り果てた男が血溜まりを作り出す。冷たい灰色の景色に鮮やかな赤い華が散ったかのようだった。

処刑人は残る一人へと向き直ると、彼は既に腰を抜かして道路に座り込み、そして股間部を濡らし蒸気を上げて失神しているようだった。

それはまた嘆息してから、今度は大剣を地面と並行に構え、男の首筋にピタリとあて、やや引く。

勢いをつけて再び薙ぐ一閃を振るうと——見事に切断された首が、衛士らの正面にあるビルのガラスを叩き割り、中へと逃げていった。主無き首は切断面を見せた直後に血を沸かせ、噴水のように血を噴出させる。処刑人は退避するように飛び退いた後、剣を振って血を散らせ、それからそれ以上は気にしないように背負いなおした。

——容赦が無い。

衛士の感想の初めはそれだった。

そして豪傑で、だというのに繊細な剣捌き。大剣だというのにコレほどまで簡単に、そして適切に扱えるのを見るのは流石に初めてだった。漫画みたいだ、というのが正直なところである。

肉塊を間近で見るのははじめてであるはずなのに、それは余りにもグロテスクすぎて現実感が湧かず衛士の心を揺らがすことは出来ない。

処刑人は呆然とする衛士へと、片手を上げて接近した。

「まあ、安全装置も外してねえ間抜けが相手とは思わなかったがなあ！」

がははと豪快に笑う声は明かに男のものだった。低く渋いそれであり、確かな強さと威厳を孕んでいる。見た目を裏切らない、強さの権化たるソレだった。

「ったく、ふなさか船坂。これを誰が片付けると思っている……？」

「俺だよ。自分の始末くらい自分で付ける。それが俺だ」

「戦闘時とそれ以外では随分と豹変する男だと、私は毎度思うのだから」

「敵に容赦するなつてのが俺の信ずる所だからな。それに、四月から俺が戦闘技能を教えることになるんだろ？ 期待の新人に、良い所を見せておこうと張り切ったんだ……えーと、トキエイジ時衛士だったか。同じ日本人だ。仲良くやっていこうや」

船坂と呼ばれた男は鎧姿のまま、その武骨な手甲を衛士の前に差し出した。彼はぎこちなく手を返すと、彼は力強く握り返す。冷たい感触に押されるのはまるで万力に挟まれているような感覚だったが、その奥から男の生命力を感じるようで、なにやら元気が湧いてくるようだった。

衛士がまっすぐ前を向けば男の厚い胸板に視線が刺さる。それを考えても、彼の身長が二メートルを超えているのは明らかだった。

——この組織にはこんな桁違いの人間が居る。

そして彼の話によれば四月から、他の適正者がこの訓練校に来る

頃に戦闘面を習うのはこの男からだと言う。今までエミリアに教わり、またこれからもそうだろうと腹を括っていた衛士には途轍もない衝撃で、俄かに信じられなかった。

エミリアは強い。だが恐らく、単純な戦闘面、力では圧倒的にこの船坂のほうが強いだろう。ただ見た目からそう思うのではなく、闘い方の違いからそう思えた。

なるほど、と衛士は頷いた。

飽くまでこの一ヶ月はある程度までレベルを上げるためだけの訓練だ。そのためには、その速度を上げるためには彼女が適任で、じっくりと長い期間を使用して鍛えるならば船坂が適任。そういったところだろう。

「よろしくお願いします」

衛士は半ば尊敬の眼差しの後に頭を下げると、船坂は満足げに声を上げた。

「愛想振り撒いたって容赦はしねえぞ？」

彼は再び大きくがははと笑った後、背を向け、大破した四駆の前、肉塊へと引き返していく。

エミリアはソレを見送りながら、我々も戻ろうと察へと促した。いくらかは戦闘に加わることを想定していた衛士は、結局本当に見学だけで済んだ処刑の光景を、何度も頭の中で反芻しながら、その動き、足捌き、鎧の下の方の筋肉の流動などを想像しながら、自身のものにしていく。

あの肉塊、その直前まで人であったとは思えない――などと考えながら自室に戻り、服を脱いで布団に潜り込む。

そのせいで悪夢を見る事になるのは、半ば必定な事であった。

初任務？

空気は冷たい。それこそ肉体が芯から冷えるほどに。だというのにこの左腕は焼け付くような熱さを覚えている。息をするのもやっとなほどの激痛がそこから広がっていた。

額に汗が滲む。だがそれを拭うことすら出来ずに、男は建物の壁面を背にして構えるアサルトライフルを下げてしまう。最早腕に力が入らない。何故こんなところで俺が、とぼやきたくなるも、声を出す余裕は無かった。

——民間軍事会社から帰ってきた途端にコレだ。せっかく日本で、また改めて平和な生活を築こうと思ったのだが、どちらにせよこんなものを握ってる時点で本心ではそれを望んでいなかったのだろう。彼は以前まで居たアフリカの紛争地域の事を思い出しながら、力が抜けていく足をそのままにズルズルと背を壁に押し付けながら尻餅をついた。

以前は前線で弾幕を作るだけの簡単なお仕事だった。簡単なだけに離職率も高かったが、なんとか生き残れた。帰って来た理由は無様にも地雷に引っかかった仲間を見て軽度のPTSDに掛かったせいだった。

日本に戻り、貯金を崩しながら細々とやってきて、立ち直れて、以前の経験を生かそうとしたところでこの妙な会社に声を掛けられた。何をやっているかは良く分からなかったが、ただ武装して表を警備していればいい仕事だった。給料はいい。男は二つ返事で頷き——今日で三日目が経過するところだったのだ。

訳も分からない、黒装束の二人。一方はフルフェイスのヘルメットをかぶり、ウェットスーツのような服の上にタクティカルベストを装備するだけの身軽な格好。一方は、顔を隠すこともせず、マントのようなモノを着込む少年。見た目はまだ高校生といったところだろうが、そんな彼の存在でさえ、射撃されるまで気付かなかった。

いや、そもそも今でさえどちらが射撃したのかすら分からない。ただ音、この激痛を覚えて、その方向を推測して目を向けるとそこに居ただけなのだから。

こんな敵は見た事が無い。日本にっぽんでの装備がアフリカよりも軽いということもあるが、そんな事は理由にならない。気配が無いのだ。辺りは車も通らず、故に驚くほどに静かだ。自身の呼吸音がうるさいとさえ思うほどに。

だから誰かが近づけば確実に分かるのだ。足音を消そうとも、殺意やら敵意やらが滲み出る。それを直感が捉えるのだ。理屈ではない、その瞬間、人を殺す刹那には抑えようの無い感情が溢れるはずだった。

仮にそれが出ないのであれば、人を殺すことに何も感じない程、人を殺しすぎているのか——現実を現実と認識していない。あるいは感情が無い、ということだろうが……。

——ここは日本だ。日本の筈だ。

何故こんな所で撃たれて死なにゃなんのだ——。

「よりもよって、こんな田舎とんちやで……」

だが、まだ死なない。しかし長くないのは確実だった。

男は薄れていく意識をそのままに、やがて銃を支える腕を脱力させてうな垂れた。

二人は男の意識が途切れたのを理解してから、死体を漁り、カギを入手するとそのまま裏手であるその入り口から中へと侵入する。

少年は驚くほど静まり返る自身の心に驚きつつも、減音器サブレッサーの有意性を認識し、それを撫でながら扉の隙間へと身体を滑り込ませる。

彼、時衛士はそうしながらも未だに”処刑”の事後処理を忘れられずに、そこはかとなく思い出していた。

裏切り者が速やかに処刑された翌日。表の世界が日の光で満たされる頃には既に、亡き者にされた彼等が取引しようとしていた組織

が明らかになっていた。

どこの、何をやっている組織か。そして何と関係が強く、リリースに対してどのような妨害行為を行い、敵対意識を抱いているのか。それらが全て暴かれた頃には、裏切り者、いわゆる逃走者を手助けした者は勿論人知れず処刑されていた。違法に作られた偽造免許証、パスポート類やどこからか調達された銃器や四輪駆動の出所から容易に察知されたとの事だった。

それから適正者数人に、隣国のとある民事会社へ赴く任務が与えられる。

内容は出来る限り好意的に接触し、友好関係を結ぶことだったが――ソレを知る全員は、そんな事など建前に過ぎぬことを理解している。

相手は無謀にも世界に広がる抑圧組織リリースの人員を引き抜こうと手筈を整えた愚か者だ。

交渉の際に一度でも拒絶ないし、僅かながらの言葉の詰まりを感じたらご破算。交渉は決裂だと認識すると言う事が暗黙の了解となっていた。

最も――それを衛士が知ったのはそんな事があったあくる日、つまり処刑が為された翌日の、さらに次の日だった。

適正者達が任務から帰ってきたぞとエミリアから言われたのだが、それまで何があったのかを知らされていなかった衛士には訳が分からなかった。故に、そこでまとめて聞いて――この組織が、とてつもないものだとは再認識したものだ。

異常なほどの行動の早さ。そして凄まじい情報収集能力。三人で傭兵五〇人を屠ほふったと聞いた時には流石に耳を疑ったが、副産物を扱えるものは須らくして、最低限の戦闘能力をその程度にまで引き上げているらしかった。

――時衛士はオレもいつかは、と夢を見ながら、グラウンドに隣接してある、同程度の広さを有するアスレチックのフィールドを駆け回っていた。

丸太で構成された巨大なはしごを上り、乗り越え素早く降りる。次は大地に貼り付けられたアミを潜り、広い間隔で階段状となっている丸太に飛び乗り、そこを踏み台にしてより高い位置の丸太へと飛びつく。

また別の場所では既に使われていない建物を利用して擬似的な潜入任務を行い、また規模が大きい植物園を利用して二日間のサバイバルを執り行う。その際に使用するのは、特殊なゴーグルだった。装備すれば、衛士が見る景色の中に本物と見紛う敵影が現れる。

敵が銃を撃ち、あるいはナイフで腹を切り裂けば衝撃が衛士を襲う。また彼が弾丸で見事に敵を撃ち抜けば敵は銃創を押さえ、崩れていく。

最も、それを実現させるにはそれに連動する装備が必要だったが、無論それが無い筈も無く、故に彼はより過酷な一週間を過ごしていた。

かくして、課せられた二週間の特殊訓練が終わりを告げて――衛士はミーティングルームで、頬杖をつきながらラフな格好のエミリアの話を聞いていた。

白を基調とした小奇麗な室内は殺風景で、机がいくつか整列して並ぶだけである。壁一面にホワイトボードが固定されていて、その光景はまるで学校の教室を思わせるのだが、衛士は特にこれといった感慨に耽るわけでも、懐かしいなと涙ぐむわけでもなく、ただこういう部屋だと認識するだけだった。

「明日は貴様にとって初任務だが、肩の力を抜け。任務といっても殆ど訓練のようなものだ」

教卓に手をついて彼女は言う。その背後のホワイトボードには明日の、衛士に割り当てられる基本装備が羅列されて書かれてあった。機械的なその文字はまるでワープロかパソコンで印刷したモノをカーボン紙で映しているのではないかと思うほど上手に書かれていて、衛士はそれに感心しながらもそれらを訓練どおりに実際に扱えるか、不安を抱いていた。

——まず銃火器は9mm機関拳銃が一丁。必要に応じて減音器サプレッサーの装備を認めるらしい。さらに予備武器サブウェポンに9mm拳銃。予備弾倉をそれぞれ二つずつ携行し、衝撃波によるダメージを主体とする手榴弾を三つ。さらにファイティングナイフが一本。

武器はそれ以上である。

防具は驚くことに存在せず、あるとすれば支給されるタクティカルベストが一枚と、レッグホルスターが一つであった。

通信機器は、気がつくと支給されていた携帯端末のみ。

作戦時間は深夜だというのに、暗視スコープも赤外線スコープも支給されないことに、衛士は驚いていた。

そもそも装備の基本なぞはゲームや漫画などでしか知らないから、何が基本なのかは分からない。彼女がこれで十分だというのだから本当に十分なのかもしれないが、それでもなにかを忘れているような気がした。

「それに加え、貴様は適正者だ。副産物を使用する権利がある。二つまで、だがな」

衛士はなぜ数が限定されているのか俄かに理解している。

それは敵にやられて死体を回収してしまった場合、その科学力や技術を敵に盗まれ利用されることを恐れている——からではない。適正者というのは、選ばれる時点で何らかの才能があると言う事だ。故に、自身と同様に何かの道具が一つ与えられていることだろう。そして必然的にソレに対する才覚を見せる。その使用に確かな実力を見せるのだ。

だから下手に複数の副産物を与え、広く浅く扱わせて器用貧乏プロフェッショナルにさせるのではなく、狭く深く、その道具の専門家へと進化させるのだ。

その方が効率も良く、要領もいい。だがそれ故に、特定の道具に対する適正者の不足が現れてしまうのだろう。砂時計が正にそれであるらしかった。

「なら、耐時スーツがいいですね。自分が思った通りに動く、こう、

危ないって思ったら硬化して、やってやるって思ったら腕に巻きついてドリル状になったり」

これは以前から、こういったものがあつたらな、とアンナとの戦闘を経て考え理想化させたものである。

汎用性、柔軟性が高い事を一番にして考えたそれだった。

「抽象的だな。要領を得ない」

「あの、アンナさんのベルトもそうでしょう？ 多分意思か何かで強化されてるんですよ。それと同じなんですけど、意思によって自主的に変化するスーツ、みたいな」

「攻防一体型、と言うわけか？」

「はい。弾丸を受けて、それでいて拳を包むスーツが鋭く変化するような」

「そうだな……基本的には耐時スーツとは攻防一体型だが、特殊に動き変化するモノか……。難しい注文だ」

だが科学者でも技術職でも無い彼女にはそれがどの程度の困難さなのかは分からない。ただ言って見たかっただけである。

「まあ的確にあつたら、それはそれで驚きですけど」

「新・耐時スーツは多種類だ。それこそ、現在の適正者の数は五八人だが――これでも三つあるうちの組織でも多い方――その数だけ在ると言っても過言ではない」

だがそれは同一の”リリース”という組織である以上、種類や数は共通している。そうしなければバランスが崩れてしまう恐れがあるし、統一された意思になりきれない面がある場合、そういった批判要因を餌に反乱もおこされる可能性を生んでしまうのだ。

最も、そういった可能性はこの日本支部が明日壊滅してしまうほどしかないのだが。

「近いものを探しておこう。他の装備はどうする？」

「銃はあるし、他に使えるような副産物^{もの}って言ったら砂時計くらいしかないですよ」

他には触れた生物の時間を僅かに停止させる手袋と、任意のタイ

ミングで空間に数秒固定させることが出来る弾丸だ。耐時スーツは新旧だが旧式は使いどころがそもそもない。

構想段階を含めて八つの副産物があるとは言うが、実際に使えるのはそれら五種類のみである。

「貴様らしい考えだ。どちらにせよ、ある段階になればわざわざ副産物などは使用する必要もなくなるからな」

「？　どういう意味です」

彼女は白々しくふっと一息分笑ってみせる。

「貴様もいずれ分かる」

使用する必要がなくなるほどに強くなると言う事か、あるいはその肉体に道具が依存しすぎて、あるいは道具に肉体が依存しすぎて、その体自体がある種の副産物となりえるのか。

ならばそもそも耐時スーツを装備していた人間はどうなるのか？
分からない。より強化されるのか、その者の特性が現れるだろうか。

衛士は簡単に思惟してみしてから、やはり無駄だと考えて首を振った。

「それじゃ、楽しみにしてますよ——」

その場はそれで解散となった。

自由時間となった衛士は寮にある食堂へと向かう。個人の部屋が並ぶ通路からやや離れて、ホール状の広間へと到達する。そこに行くくと正面に屋内訓練場へ続く扉が、そして右手側に浴場が、そして左手側に食堂がある。衛士は迷う事無く、その食堂の扉を開いた。

本来ならば人で溢れかえるであろうそこにはやはり人など居らず、無数に並ぶ長机に奇妙な虚しさを覚えた。壁際にはカウンターがあり、その奥には台所が存在する。だが彼の昼食はそこには無く、カウンターのの上に乗るカゴに二つばかりのクラブサンドと、市販のお茶が置かれているだけだった。

どこかで購入したらしいそのサンドは綺麗にビニールで包まれて

いて衛生的な問題は無い。ベーコンとタマゴ、あるいは野菜類がそれぞれ具となっていて栄養面を考えているのだろうか――。

「またか……」

ここに来てから二週間はこの調子だ。朝昼晩と常にクラブサンドで食事を済ませている。多様な具のお陰で飽きることにはなさそうだが、たまには別のものが食べたいという贅沢が出てくる。

やはり慣れのせいだろうか。

これから自室でお決まりのトレーニングをするに当たってサンドイッチが二つばかりでは腹がすきそうなものだが、手のひらに乗せても一回り以上、さらに分厚いそれのお陰で杞憂で済むのだ。

衛士はそれらを回収して自室へ引き返そうとすると――出入り口近くの壁に背を預ける、赤毛の女性がこちらを見ていることに気がついた。

口元を吊り上げてにやにや笑いを浮かべる彼女は白衣姿で、それと同色の眼鏡をかけた保健医である。

だが、今までで一度も怪我をしていないから世話になった覚えはない。そもそも出会うのは今回で二度目であった。

「君は自分をどう評価しているのかしら？」

不意に彼女はそう問うてみせる。だが突然すぎて、衛士にはその言葉の意味が良く分からなかった。言葉どおりに受け取ればよいのだろうか、不意なことであるが故に、それさえも理解できなかった。「はは、オレ、心理テストとかあまり好きじゃないんですよね」

――言ってから、記憶が脳裏に蘇る。

平和だった一年前。だが体験的には二、三ヶ月前のこと。自身に友好関係を築こうとしてくれた少女の、父親にしてやられたことを思い出す。

あの時オレはなんといったのだろうか。あの時彼はなんと質問したのだろうか。今となっては大事な思い出であるはずなのに、すっかり思い出せなくなっていた。

だからどうというのだ。衛士は自嘲して、彼女の返答を待ち構え

た。

「明日は君がどんなヘマをしても生き残るでしょうね。彼女……エミリアと君のペアだし、そう難しい任務でも無いわ」

だから訓練の一環だ、とエミリアは言っていた。任務は出来る限り敵に見つからず、接触せずに施設に侵入し、内部を見学させてもらうこと。しかしどちらにせよ、衛士は気を抜くつもりなどさらさら無かった。

「でもそれ以降。君が他の適正者と手を組み任務を行う場合、それではあまりにも不十分だわ……訓練ではないから。君が本気でやらなければ、結果は出ない。訓練みたいに、納得がいくまでやれるものじゃないから」

「お、オレはいつだって——」

本気だ。言おうとして、だが言葉にならなかった。

本当に本気で取り組んでいたか？ いや、確かに本気だった。気を抜いては居ない。頭だってフル回転だ。利用できる状況を存分に利用してやり、自分に出来ることはみなやってみせた。それで不十分だというのならば、それは単純に力不足という事ではないだろうか。

しかし腑に落ちない。足らなかったのはやる気か、熱意か。だがその程度で本気とみなされなかったなんて事は無いだろう。

ならばなぜ、そういった風に見られてしまったのか。

衛士がその答えを導き出すよりも早く、保健医は赤いルージユを塗るその唇で言葉を紡いだ。

「あまり、あたしを失望させないでくれる？」

「なっ……」

——どういう意味だ？

そう思うよりも早く、衛士は強いストレスを覚えた。

ムカつく。激しい苛立ち。殺意。衝動。

別に彼女の為に鍛えているわけではない。彼女の期待に応える為に強くなろうと思ったわけではない。

そもそも保健医の存在など今の今まですっかり忘れていたのだ。
何故お前に、そんな事を言われなければならないのか――。

「オレは」

その人を蔑む目が嫌いだ。

「アンタにそんな事を言われる筋合いは無いな」

瞳に怒りの炎が滾る。ペットボトルは押し付けられ、握り締められたクラブサンドは中身を潰してビニールに押し付けられていた。外見は残飯に近くなる。だが衛士はそれに意識を向ける余裕は無かった。

オレはこれほど短気な人間だったろうか。頭の隅で考えるも、昔のことなど思い出せなかった。

そんな彼をよそ目に、彼女は腕を組んで顔を逸らす。

恐怖に駆られたわけでも、バツが悪くなったからでも無い。その頬には笑みが宿り、軽い笑い声が耳に届いた。

「ふふっ、そうよ。君にはそれが必要。漫画とか小説みたいに、殺戮機械シグママシンが人の心を覚えて以前より強くなるなんてのはまやかしょ。自分だけを信じて、力だけを信じて、そのための道具となる。君はその立場になって、それを理解したとき、もっと強くなることができる……物覚えが悪くても、それだけは覚えていてちょうだい」
彼女の言葉に、力が抜けていくような気がして衛士は気付かれぬように細々と息を吐いた。

――結果的には、してやられたというわけだ。

彼女は衛士をわざと怒らせた。その時の反応、その感情の膨れ、爆発、思考。それを確認して、自身の考えと相違ないという事を再確認したのだ。

そしてブレていない事が分かった途端に、安心したように表情を綻ばせる。だが笑顔はそんな無邪気なモノではなく、どこか妖しさがあるようなものだった。そこだけをみれば無愛想なエミリアの方がよっぽど素直に見えるほどである。

「……人が悪いですね」

「あら、私は底無しにお人好しよ？　少なくとも君よりはよっぽどね」

彼女は身を翻して背を向ける。背中越しに片手を上げて別れを告げると、そのまま衛士の視界から消え去っていった。

彼はそれを、彼女が居なくなっただけのもその虚空を呆然と見つめてから、嘆息する。それから手の中で、ビニールが破けてクラブサンドに突き刺さる指を見て、どうにもやるせなくなって近くの席に腰を落とした。

今日はここで食べれば良いやと、慣れた孤独を味わいつつ、濃い味付けのソレに喉を焼かれて、お茶で飲み下した。

任務までまだ約半日もある。最後に総仕上げでもしておくかと彼は考えながら、簡単な昼食を終わらせた。

初任務？

眠りから覚めると、たまに自分が居る場所の認識が曖昧になる。

ココが何処なのか、自分が一体何者なのか――卓上の、液晶時計が示す時刻を見て漸く思い出すことが出来た。

息が詰まるほどの閉鎖空間。窓は無く、倉庫のような狭い部屋は彼の自室である。時計は今は午後の一一時であることを、アラームを鳴らして知らせていた。

衛士は気怠るそうにマットレスの硬い寝台から身体を起こし、降りて時計を止める。それから照明をつけると、時計の隣に鎮座する写真入れに、ふと目が行った。両親と姉、それと自分が以前通っていた高校の前で撮った写真だ。このとき彼はそれがとても恥ずかしくて、顔を赤らめてそっぽを向いていたのだが、今となってはしっかりと前を向いて置けばよかったと少しばかりの後悔が過ぎる。

――家具やらを支給してくれると聞いたが、結局彼が求めたのはその写真と、時計だけだった。写真はわざわざ写真立てに入れてくれたのは意外だったが、とてもありがたいことだった。

「さて、着替えて、アップすれば丁度時間かな」

ミーティングルームで装備が渡される。その集合時間は今から三〇分後だった。

彼はてきぱきと下着姿の身体にシャツを着込み、戦闘服を纏い、軽い筋トレを行う。だが二週間の過度の訓練のお陰で呼吸は上がらず、また大した疲労感も得られない。だが不満があるというわけではない。心地よい程度のソレである。

衛士は時刻を確認してから、僅かな緊張感を胸に自室を後にした。「――時間通りだ。いつもならば少しは遅れそうなものだが」

「何を根拠にそう言うんですか。いつも五分前には来るじゃないですか」

ウェットスーツのような耐時スーツにタクティカルベスト、そし

て備え付けのレッグホルスターに回転弾倉式の拳銃を突き刺して準備を終えているエミリアは、彼が装備の一つ一つを確認しながらタクトイカルベスト、ないしホルスターにそれらを収めて行くのを見守りながら口にする。衛士は顔も向けずに反論するが、彼女はソレに対して特に何かを言うわけではなかった。

機関拳銃。拳銃。予備弾倉、手榴弾、ナイフ。そしてポケットに入れっぱなしである携帯端末は無線なのだろうが、携帯電話と操作方法はそう変わらない。ただ着信、発信が出来る通話機能、そしていわゆる”電話帳機能”だけしか搭載されていないのは、ただの通信機器として使用されているが故なのだろう。

彼はベストを着て、腰のベルトにナイフの鞘をつけ、太腿に沿わせるように立たせる。また腰の位置に標準装備される砂時計はベストに固定されていて、激しい運動では微動だにせず、自力で捻ることで傾き、反転できるような構造となっていた。

見た目としてはホルスターに無理矢理突っ込んだような風ではあるも、頭と尻をしっかりとベルトのようなもので固定されているのを見るに、わざわざ砂時計の為に作られたのだろう。

準備は終えたか、と自身に問うて確認する。

彼はそこで足りないものに気がついた。

「スーツって、この戦闘服を脱いで着るんですか？」

そう、耐時スーツである。もしそうであればわざわざ着替えねばならぬ手間があるから、思い出した。

何を用意したのかは分からないが、少なくとも要望が要望であるために、船坂のような全身フルアーマー鎧は流石にありえないだろう。だからといって、アンナみたいなベルトを衣服代わりにする痴的な格好でもないはずだ。

ごく普遍的な、できれば彼女が着る旧・耐時スーツのようなデザインが好ましい。戦闘服とさして変わらぬ、脱げなくなる代わりに肉体を強化する新・耐時スーツの方がどちらかといえば良いだろうが、しかしそれだと機動性と重量がやや気になった。

衛士が尋ねると、彼女はめずらしく待ってましたと言わんばかりに口元に笑みを浮かべる。

やはり保健医とは違った、決して直情ではないものの、歪つなソレではないことに安堵を覚える。この訓練校での唯一の良心が彼女であるのは、ひどく残念な事だった。

「こいつだ」

彼女はそれがまるで誇らしく、あるいは宝物でも見せるかのような嬉しげな顔で教卓の裏側、その中の台に置いてあったソレを取り出して――。

時刻が来て、寮の前へ移動する。エミリアはいつの日かのように衛士の肩に手を添えるが、だが以前とは違い添い立つような距離でどうやら少なからずとも最低限の信頼は買われているらしいことを認識する。

まばたきを一つ。

次の瞬間には、全く異なった風景の場所に居た。

久しぶりの空気の流れ、冷たい風が緩やかに全身を拂る。寒さがすぐさま体の芯を冷やすように吹き、衛士は思わず身震いをした。が、上に羽織る外套が寒さを俄かに軽減させてくれているようだった。

しかし彼はそんな外套、四角い布の中心に穴が空き、そこに頭を突っ込んで着るポンチョには不満があった。分厚く、黒い生地は着ていれば暖かい。だがそもその使用目的はそうでなかった筈なのだ。

思いおもむくままに硬化し盾となり、考えるままに腕に纏いつき凶暴な武器となる。それはそういった装備なのだ。そもそもそうであるべき便利な道具なのだ。どう間違っても防寒具だけで使命を終えていい衣服ではなかったのだが……。

「これ、耐時スーツですよ」

幾度目かになる質問に、衛士は既視感を覚えていた。

「いわゆる外套型だがな。外部への反応速度を高める事に徹底している為に私やその他の、着込むタイプとは違い、身体能力の強化は望めない。最も貴様が常々ぼやいていた要望を叶えるべく作ったのだが、さすがに時間が足りなかったらしい」

彼女が既に似たような構想、そしてスーツが出来上がっている開発班にその要望を伝えたのは今から約十日ほど前。衛士がそれを、あるかなあと大した期待も抱かず口にしたその日であった。

そして開発班、技術班はそれぞれ手を組み、熱を出した。今まで着込む、いわゆるスーツタイプの耐時スーツの、試作型ではなく、発展型ばかりの量産を命令された彼等であった。つまりは着脱可能なのである。今では試作型などは好んで着るものは居らず、自身の死期をそこはかとなく知る適正者か、一般兵が無理に来て任務に挑むだけ。

それでもそれを着て未だにその命を永らえさせているのは僅か数名、あるいは一人だけとの噂だった。

試作型は首から下がスーツである。首にはクッションが詰められ接着し、隙間が無い。そして直ぐに肉体に依存し、切り裂かれればその下の肉体も同時に切り裂かれて骨を露出させる深手を負ってしまう。

故に、肉体の強化はそれこそ重装備の鎧型――船坂の装備するソレーの、攻撃力だけならば横並びになるかもしれないが、それでも補えない柔すぎる防御力が大きな弱点となってしまうのだ。

二度と脱げないのも不快だろう。生き残っても、もう自身の肉体を見る事が出来ぬストレスに精神をやられてしまう例もあった。

欠陥品だとなじられても仕方が無い品だった。

衛士が着るこれも試作品だった。しかも期限のせいでロクな試験テストも行われていない様子である。

不安が、それだけが募っていた。

――周囲は低いビルと平屋の商店が横並びになる。道路は二車線。街路樹は無く、植木も無く、ただちよつとした段差だけが歩道とを

隔っていた。

街灯が等間隔で周囲を照らす。その対面も、同様であるらしかった。

そこは商店街と言うほどではない、ちょっとした街中。人通りは多くは無いが、だが少なくも無い。二人が居るのはそんな未だ活動を続ける街の――ビルの屋上部分だった。

誰もこちらへ目を向ける者は居ない。いたとしてもこの暗闇だ。黒い衣服を身に着ける彼等を捉えるなどは至難の業だろう。

スーツのことはひとまず置いておこう。任務が最優先事項だ、と自分に言い聞かせて、傍らのエミリアへ向き直る。懐かしい夜の暗さに何かを思う暇も無く、同時に彼女は口を開いた。

「目標の組織はこの街の中にある。やや裏側の、ただの商店。この街での麻薬取引の主たる場所だ」

「……なんか、この調子でどんどん裏側知っていったら、日本に居るっていう感覚がなくなりますよね」

「私などはむしろ感心したほどだ。日本は平和だな、と」

彼女の母国がどうか、他国がどうかは知らないが、初任務が麻薬取引の組織、その施設の見学、捜査であり、舞台が日本である事に既にこの上ない驚愕を覚えているのに、それを平和だと言いつつ切られて衛士の笑みは引き攣った。

だがそうなのかもしれない。

日本はそこまで好戦的ではないのだろう。だから簡単に暴動は起きないし、あってもせいぜいデモ程度だ。それも、状況によつてはマスコミが誇張したり、または隠蔽したりする。島国であるから紛争だって起きないし、性質上、内乱だって無い。

衛士の認識の問題かもしれないが、その殆どは実際に当てはまっていた。

日本に居る以上その平和は、非日常を覚えるまで、その身にしみこんだままなのだ。

「行くぞ、ついて来い」

彼女は表通りから身を翻して明かりの無い裏へと移動する。彼は落ち着いた様子で、だが確かな、心地よい程度の緊張をそのままにエミリアの後を付いていった。

これも任務なのではないかと思うほど、彼女についていくのは過酷だった。

その要因の一つに、彼女が自身で口にしていた『外套型のスーツは身体能力を強化する機能が無い』という事を忘れてしまっていた事にある。お陰でビルとビルの間を飛び越えるだけで一分近く、決意を改めるのに時間を要してしまい、また音を頼りに方向を確認し、結局はビルを降りて彼女を追ったのだ。

結果的には迷い、泣き出しそうなところをエミリアが発見し、手を引いて目的地へ誘導してくれたのだが……。

初日からえらい目に合った。

彼は落胆しながら、照明で周囲、敷地内を照らす建物へと視線を投げた。

そこは居住区らしい場所だった。ブロック塀の向こうには民家が並び、近くにある商店と言えばコンビニが一、二軒ある程度。だが際立って目立つのは彼が見るその場所である。

個人店の事務所、というのが建前らしいが――二階建てのビルのような建造物。窓は極端に少なく、門はないものの正面の入り口には、まるで倉のようなゴツい南京錠で施錠されている。さらに照明の関係で表の入り口はあまり推奨されたものではなかった。

「開錠技術も道具も無いしな」

というのが一番の理由だった。

「そして恐らくこの中途半端な田舎だ。銃器は目立つが、無いわけではないだろう。そして道は裏に限られている。普通に考えれば、誘われているようなものだ」

「それじゃ、入るなら敢えて表、って事ですか？」

「いや、裏だ」

彼女は、まるで暴力団事務所のようなソレへと向きながら足を進める。その見は素早く、既に丁字路の半分あたりにまで差し掛かっていた。

周囲に建物は無い。仮に少しばかりの騒ぎがあってもすぐさま誰かが駆けつけることも無いだろう。

衛士はそれを考えながら素早く彼女の後を追った。

敷地内に入ると、黒塗りの車が二台駐車されているのが良く目立った。だが彼女は構わず素通りし、建物に回りこむ。と——数メートル先、おそらく裏口であろう位置の前に武装した人間を発見する。一人だ。姿は平和で閑静な住宅街に似つかわしくない兵装。ヘルメットに防弾チョッキ。そして肩から提げるのは汎用的なアサルトライフル。有名なロシアの、正確にはソ連の銃だったが、衛士にはそもそも見分けがつかないから分からなかった。

表の光源がやや届く建物の側面。彼女は手で拳銃を構えろと合図する。

衛士は言われるがままにすると、エミリアはベストのポケットから黒い筒状の何かを取り出したかと思うと、何かを要求するかのように手を差し出した。彼はどうせ銃だろうと思って差し渡すと、どうやら当たりだったらしく、素早く手元へ持って行き、その筒を銃口部分に装着した。

これがいわゆる減音器サプレッサーだという事に気付いたのは、彼女がその銃を構え、発砲したその瞬間に——まるで空気だけが入ったパッキンユースを踏み潰したような、空気の抜けるような音だけが響いたからだった。

彼女は建物の角から身を乗り出して銃を構えると、照準を定める間も無く発砲した。

それこそ、息を呑む暇も無く。

衛士はそれから直ぐに銃をつき返された。彼は減音器のせいでホルスターに収まらぬったソレを手に提げ、せっせと裏に回りこむエミリアの後を付いていく。

余裕のある裏手はその背後を背の高いブロック塀に囲まれている。だが、裏口の上には電灯が取り付けられていた。だから、警備の彼を前にすれば姿が露になるだろう。到着すると、彼は声も出せずに痛みに耐え、やがてずるずると壁に背中を押し付けて座り込んでいった。

瞳は二人を捉えているらしいが、確かな焦点は合わない。そうすると間も無くぐったりと首を垂らして、脱力した。

「傷は致命傷ではない。だが出血が続けば確実に命に関わるだろう」
もって三〇分か。彼女は呟きながら男の横腹の、防弾チョッキの縫い目からじわりと広がる血の染み、そして彼の尻を濡らす血を見下ろしながら、ポケットを探る。だが目的のものは無い。もう片方を探る。無い。防弾チョッキを強引に脱がし、上着のポケットへ手を突っ込む。

裏口のカギは果たしてそこにあった。

彼女は手間を掛けさせられたことに短く息を吐いて、裏口のドアノブ、その鍵穴へとカギを差込、捻る。が手ごたえは無い。もう片方へ捻り、ガチャリとした確かな音と手ごたえを覚えて、ドアノブを捻る。

しかし強い抵抗が開扉かいひを拒んでしまう。

彼女は強い舌打ちをした。

——人が今正に死のうとしている。素晴らしき減音器のお陰で誰にも気付かれていない。

衛士だけがそれを目の当たりにしている。

自分は何をすべきなのだろうか。彼は考え、少なくとも今考えていることはすべきではないという事くらいは理解できていた。

応急処置、救急へ連絡。助けを呼ぶ。全てはナンセンスだ。

そもそも彼はこれを目的に來ていると言っても過言ではないのだ。だが、だけど——。

「おい、早くしろ」

語気を荒げて彼女が招く。開錠された扉は開き、衛士は思考をや

めて扉の隙間へとその身を滑り込ませて侵入した。

「好きになれというわけではないが、慣れた方がいい。貴様の任務はこういったものが殆どになる」

——内部構造は思ったよりも民家的だった。

裏口は台所部分につながり、台所から伸びる通路は短く、光が漏れる居間へと繋がる。だれかの話し声がして、強い人の気配。そしてテレビを付けているのだろう音声聞こえる。

居間を突っ切れば表の出入り口、玄関部分に到達し、そこまでの通路にトイレや個室が二つあるらしい。彼女は台所に居るのにもかかわらずそこまですべて探って見せた。どうやったのか、衛士は聞くことが出来ぬまま、どうやって二階へ向かうのかを聞いた。例の麻薬は、恐らくこの二階で栽培されているのだろう。

「階段は玄関にある筈だ」

「そこへはどうやって？」

どう考えても相手は暴力団であろう。数は声を聞く限りでは十人近い。常に武装しているのならまだしも、素手であるはずの彼等には負けるつもりは無かったが、今回の任務はあくまで捜査のはずだった。

「このままではつまらんだろう」

「こ、殺すんですか……？」

無実ではないだろう彼等だが、そう簡単に命が失われて良いものだろうか。

だが任務だ。どんなものであれ、冷酷に遂行しろと告げるのは衛士の頭の冷静な部分だった。

「それが今回の仕事だ。まだ貴様には動機付けが必要か？」

ふふんと鼻を鳴らす彼女は、手を胸の位置まで上げて、口にする。「ここのボスらしき男の娘と恋仲になった男は”行方不明”になった」

エミリアは親指を折る。締め付けられるように、その生地は軋むような音を鳴らした。

「中学生二人は何も知らずにここへ連れて来られ、廃人のようにな
ってから自殺した」

人差し指が折られる。

「因縁をつけられた青年は殴り蹴られ、打ち所が悪かったのか半身
が麻痺する障害を得た」

中指を折る。

衛士は静かに、もういいと次を続けようとする彼女の言葉を遮つ
た。

「つまりはただの屑で、死んでも誰も困らないって事でしょう？」
何人もが被害にあっている。だというのに彼等は検挙されていな
い。違法薬物だって大量に所持しているのに。

だから裁けと、彼女は促す。どうせ手を汚さなければならぬの
なら正義の味方ぶったほうがいくらか気が軽いだろうからと。

——不意に扉が開く音がする。人の気配が強くなった。誰かが、
話し声が聞こえたのを確認しに來たのだらう。

衛士は素早く手にしたままの銃を構え、引き金を引く。発射炎が
瞬き、男からやや離れた右方向、食器棚のガラスを撃ち抜き砕ける
音がする。男は驚いたように身を固め、衛士は素早く照準を修正し
て再び発砲。

男の胸に血の華が咲く。

時衛士が、そしてエミリアが異変に気付いたのはほぼ同時だった。
彼が構える銃はやや下向きに、どうひいき目で見ても発砲すれば
足元の床に被弾するだけだった。そしてその通りに、発砲の直後に
男の足元で火花が散ったのだ。

だというのに、目の前の男は胸を手で押さえようとして、それも
叶わず崩れて倒れる。動かなくなり、床に鮮血が溜まり始めた。

「トキ、貴様はここで待機をしている」

「……わかりました」

異常事態が起こっているのは明らかだった。

エミリアは表情を引き締め、拳銃を片手に壁に駆け寄り、そこに

背を当ててゆつくりと身を隠しながら通路側へと足を向ける。ポケットから手榴弾、催涙ガスを噴出すそののピンを引き抜くと、素早く開いたままの扉に投げ込んで退避する。

外と中。新たな敵の潜伏先を一つずつ潰す作戦だった。

衛士はそれを見て慌てて身を翻し、裏口から脱出する。エミリアも同様に後続き——耳につんざく発砲音が背後から響いた。エミリアだ。

途端に、暗闇の中で動く影を捉える。

「動くな」

立て続けに二度、三度の銃撃。だがそれは相手に当たった様子は無く、やがて影は静止し両手を上げるような動作が見えた。

苦笑するような声が漏れる。まだ若い男のそれだった。

「手荒な歓迎だな、エミリア。俺はお前の仕事を手伝ったつもりなんだが……」

男は親しげな声を上げる。暗闇の中、声と影だけが頼りである衛士は単純な展開を複雑に捉え始め、混乱を開始してしまう。

何が起きているのか。はたしてオレに出来ることなどあるのか。目の前の男は敵か、否か？ しかし、リリースに居る人間が、外に居る他者に存在を認知されているなど——。

「ま、お前がどう捉えようと構わねえがな」

銃撃。男の位置、その顔の近くで発射炎が瞬いた。弾丸は虚空を切り裂き肉薄し——間も無く衛士の胸に直撃する。

強い衝撃が彼を襲った。まるでプロボクサーの全身全霊を込めた一撃が振るわれたかのような暴力。されど弾丸は彼に傷を付けることは無く、寸での所で銃弾を止めて見せたポンチョは、そこから弾をぽとりと地面に落とした。

軽い音が鳴る。彼は僅かに身体を前屈させた体勢で、喉の奥から漏れそうになる咳を必死に押さえ込んだ。

機動性はいい。反応も早い。だがやはりダメだ。ポンチョはとっさの動きに対応しづらい。

「どうしたエミリア。守らないのか？ 部下、なんだろう？」

わけがわからない。敵であることは確かだが、なぜ動きが察知されたのか。誰かからのリークのお陰だろうか。

だが、だとしたら少なくとも随分優秀な人間が居ることになる。

あの組織の裏をかくほどだ。今の衛士にはとても想像がつかないが、とにかく”すごいのだろう”としか表現が出来なかった。

「答えてやる義務は無い」

射撃。だが弾丸が男に傷を負わせることは出来なかった。

これが昼だとか、明るかったらまだ結果は違ったのだろうか。衛士は思うが、すぐさまそれは違うことを理解する。

彼女は以前、目隠しをしたままで正確に衛士の場所を見抜いていた。だから明るい暗いなどは問題ないのかもしれない。いや、ただ大まかな場所を当てていただけかもしれない。もしそうならば、銃撃戦となれば大きな問題となるのだ。この闇、というものは。

「え、エミリアさん……」

声を出すと、それが震えていた。情けなく、恥ずかしく思うと――

――正面の男は、噴出すように笑い始めた。

「たっはははは！　なんだ、ただのお守りだったのか！」

「どうでもいい。中の人間はどうした」

「あ？　お前が来るのを見越してよ……殺ちやいねえよ。ただもうすぐ死ぬだろうな。謎の爆発で」

「どういう……ッ！」

何かに気付き、エミリアは衛士に飛びつくようにして巻き込み地面に伏せる。

直後に、裏口のすぐ近く。先ほどの警備の男から眩い光が瞬いたかと思うと、強い衝撃波が二人に襲い掛かった。続いて激しい熱風が全身を襲り、吹き飛ばされる身体はすぐ近くのブロック塀に叩き付けられる。

爆発音が閑静な住宅街に鳴り響いた。

灼熱が建物を焼き、衛士はその熱を吸い込まないように目を閉じ

口をつぐむことしか出来なかったが——エミリアはすぐさま立ち上がり、衛士の手を引いて移動を開始する。

彼は為されるがままに足を動かして、すぐ後に背後からこもった破裂音を聞く。背にする建物の内部が爆発したようだった。吹き飛ぶガラス片が周囲に撒き散らされる。二人は構わず走り続け、やがて出口のブロック塀に身を隠した。

大きく口を開いた、門も無い出入り口。空き地を利用したような其処から放たれる赤い光源が禍々しく周囲を照らす。高熱が、やや離れた位置であるはずのそこにまで伝わり、衛士は額から流れる汗を拭った。

「派手になったな。だがかまわない。お前はそう言う人間だ。俺みたいにな」

丁字路の横道路はそう広くは無い。だから衛士はてっきり男は正面ではなく、その横、出入り口の向こう側の塀に居るのかと思っていた。だから、正面から響く声を聞いて、思わず身を強張らせる。

轟と唸り、広い空き地の中心で大規模なキャンプファイヤーと化する建物を背に、彼女は衛士を制して立ち上がる。彼に告げる言葉は、簡単な命令だった。

「少し面倒なことになったな。トキ、貴様には今回教えるべき事を教えられなかったが——まあいいだろう。先に戻っている」

およそエミリアらしくない妥協するような感想を一つ、携帯端末を出せと口にする。

「な、オレだって闘える……！」

「問題はそこじゃないんだよなあ少年、お前はの中じゃ部外者、つまり邪魔者っつーわけなの。分かる？」

「登録してある本部に発信しろ。五秒以内に位置を把握し、転送を開始する」

「だからオレは——」

「まあまあいいじゃねえか。まだ子供だ。独りは寂しいんだろ？」

——だめだ。頭が混乱する。

今まで想像していたのは冷酷無比な殺戮兵器だ。無条件で攻撃を開始するこちらに対するのはそうでなければならぬ。だが普通に考えて相手が人間であるのは必定だ。

衛士はそれを忘れていた。だからといって、対面する男のような気軽さをもつのも稀だった。敵を敵とも思わない、まるで友人に話をかけるような気さくさ。初めての任務で、初めての殺し合いで、こんな事になるなどとは夢にも思わなかった。

「……ここへは何をしにきた。我々の――」

言いかけて、彼女はやめる。何故行動が先読みできるのか。それを言ってしまうえば組織の能力を簡単に見抜かれてしまう。

「たかだか”逃走者”の跡さえも追う事が出来ない無能な組織だと。だがそれが杞憂であることも彼女は知っている。おそらく上層部は容易にそれを認識できている。彼の潜伏場所、彼の行動、朝何時におき、昼に何を食べたか、それを知ることが出来ているだろう。ただ伝えていないだけだ。その必要は無いと考えているのだろう。適正者の逃走などとは、組織が成立してから珍しいことである。だから観察でもしているのかもしれない。ただ、彼がそれを知っている、あるいは推測しているかは全くどうでも良かったし、関係ないことだった。

「目的、ねえ。気障ったらしく言えば君に会いに来たって所かな」
「相変わらずユーモアセンスは最低だ。ノウハウ本を読んで来たのか？」

「良くわからないなあ。俺はお前を誘いに来ただぜ？　そこに居ても腐るだけだ。力は生かせない」

「つまらんな。今の貴様を見ていれば十分に分かる。腐っているのはそちらだと」

衛士の一步前へ。男はその場より一步前へ。

彼女は殺気を滾らせ、男は肩をすくめて嘆息した。

「俺はまだ粘るぜ」

「私は貴様をここで始末する。首を置いていけ」

「はは、すっかりこの国に馴染ん——」

発砲。同時に彼女は男へ肉薄する。

男は飛びずさるように後退し、そのまま背後の壁に高く飛びあがったかと思うと——水泳のクイックターンの出来損ないのように壁を蹴り、一気に加速。瞬時にエミリアへと飛び込むが、彼女はその額を狙い、引き金を引く。

相手は空中だ。無論、避けられるはずなどあるわけないのだが——。

「いやはや、甘いねエミちゃんは」

鋭く突き出た手のひらは容易く彼女の顔面を掴み、彼が地面へ向かうのと一緒に押し倒され、硬い地面に後頭部を叩き付ける。鈍い打撃音。

銃弾は果たして男を貫かず、闇の中でその姿を消していた。

「ああ……っ！」

呻き声は厳格なイメージを払拭するような女性らしいものだった。男は立ち上がり、倒れたまま動かない彼女を見下ろしてから衛士へと目を向ける。衛士は既に立ち上がっており、その銃口を彼に向けた体勢で停止していた。

「本来なら正々堂々戦いを挑むような性格じゃない。だが突っ込んできた。なぜだか分かるか？」

喋るたびに印象が変わるような気がして、衛士は強く歯を噛み締めた。何か動揺でも誘われているような気がして、頑なに彼の言葉に反応しない。

男は嘆息して、底冷えするかのような低い声で囁くように口にする。

「お前が邪魔だっつってんだよ、ガキが」

「……ッ！」

思わず足が後ろに引ける。だが背中中は直ぐに壁にぶつかった。

動けない。両腕で銃を構えたまま、恐怖に駆られた肉体は行動を鈍くしていた。

男の眼光が炎を映すせいか酷く殺気めいたものが視認できた。

「逃げるなら待ってやるよ。だが独りで逃げな。戦うなら五秒だけ待ってやる。出来るならその間に殺して見せろ」

——自分だけが生きて、彼女を見殺しにするか。あるいは彼女もろとも死に急ぐか。

人としては後者を選ぶ。だが組織の人間となった今では前者が優先されるが……。

上の人間は何を考えているのか。エミリアが彼の存在を知っていたのだ。上層部が知らないはずも無いだろうし、であるならば予測できない事態でもなかったはずだ。そして現在、進行形で監視すら出来ていてもおかしくは無い。

ならばただ泳がされているのか？ 死んでも生き残っても関係ない。どちらかといえばこの目の前の男の動向こそが重要だということか？

衛士はまだ身を置いて浅い組織に不信感を抱く。そもそも、こういった事があるからこそ組織としてはまだ入りたての新人には生死を分かつ任務を執行させることはそうそうないのだ。

彼がこういったことをするのは、組織として、そしてリリースの中でも異例中の異例だった。

そして目の前の男が油断せずに衛士を見据えるのは、既にこの少年が訓練を終えた確かな適正者だと誤認しているからに過ぎない。

「決まったか？」

男が問う。衛士は黙ったまま答えない。

決められない。戦うべきだろうが、勝てないのは明らかだった。

「なら死ね」

男が銃を構え、引き金を引く。衛士が咄嗟に腰元に手を動かしたのはほぼ同時だったが——直後に、弾丸は頭蓋骨を貫き脳を吹き飛ばす。背後の壁に血のりがべっとり付着して、時衛士は痛みを感じる暇も無くその場に崩れて事切れた。

黒塗りの自動拳銃が炎の明かりに黒く照る。男の指が引き金を押し引こうとして、停止する。衛士はその瞬間を狙って射撃した。男は身を翻そうとして肩に被弾して、短い悲鳴を上げながら跪く。

衛士はここぞとばかりに肩の力を抜き、小さな反動を受け流す体勢で弾倉の中の銃弾を全て放出した。

だが弾丸はその全てを男から少し離れた、五〇センチ程度の空中で停止している。

何かが作用しているのだろうが、衛士には想像もつかなかった。

驚きも無い。ただ唯一見出せた機会が潰れてしまったと落胆するだけ。もう予備弾倉よびだんそうに入れ替える気も無い。ここで反撃されたらもうおしまいだ。

男は呼吸を乱してそこから少し離れ、立ち上がる。銃を持ち替えて右腕を垂らし、その指先から血を滴らせて衛士を睨んだ。

「は、冗談じゃねえぜ」

弾丸は封じ込められた速度を思い出し、瞬間的に男が居たその場所を貫き地面に突き刺さる。だが被害は無く、耳にやかましい音が響いただけだった。

「砂時計、だろ。お前の道具は」

男は衛士が答える暇も無く、面倒くさいと悪態づいた。

「あーあー、最悪だ。気分がな。しかし、勿体無えな、まだ若えのに……俺が言えるのは、もう二度と道具なんざ……いや、砂時計なんざ使うなってだけだ」

「アンタに不利だからか？」

「ばか野郎。俺はお前の心配をしてやってんだぜ。先輩としてな」

「裏切り者の癖にか」

「ケンケーないね。どちらにせよ人が来る、今日はここまでだ――達者でな」

男はまた、今度は随分と穏やかな口調で諭すように残すと――僅か一瞬にして姿を消した。

衛士はそれを見てから大きく息を吐き、ポケットから携帯端末を

取り出す。彼は倒れるエミリアに寄り添うように座り込んでからリリースへ向けてリリースへ向けて発信した。

衛士は抱きかかえたエミリアを寝台の上にゆっくりと寝かせてから、ポンチョを脱ぎ装備を外し、畳んで、整えて隣の寝台に置く。彼は其処で一つ息を吐いてから、何も聞かずただそこへ促した保健医へ事情を説明した。

「……君は”特異点”という言葉を知っているかしら」

赤い髪を掻き揚げ、素肌にベビードール、その上に白衣を羽織るだけの彼女は薬品棚から無造作に琥珀色の液体に満ちるビンを取り出し、自席へ腰を落とした。

足を組むといよいよ目のやり場に困ってエミリアを眺めるが、タクティカルベストを外した、そのスタイルが浮き出る耐時スーツは見慣れているのに、無防備である姿に奇妙な扇情を沸き立たされて、最終的に彼は俯くことしか出来ない。

「言葉だけなら」

基準があつて、その基準が適用されない位置の事だ。主に数学だか、物理学だかに使われるから詳しいところは分からなかった。

「ま、あくまで比喻のようなものなんだけどね」

「あの男の、能力の事ですか？」

「そう。道具を使わずに特殊な能力を施行できる事。これは適正者の中でも得られる人間は殆ど居ないわ。そもその才能か、特別な施術を受けてようやく身に着けるけれど、扱えるかはまた別の話なのよ」

「……やっぱり、例えばオレの砂時計みたいなのが影響するんですか？」

恐らく選ばれた時点で多くの人間が特殊な道具を得て適正を計られるのだろう。その時から多分今まで、その道具に愛着でも持つように使い続けるはずだ。だからこそ、耐時スーツもそうかもしれないが、副産物が肉体、精神に大きな影響を与えるのだろう。

故に目覚めるのが、その特異点だ。

「今のところはそうだと考えられてるわ。詳しいことは知らされないし、多分この組織の有する技術の根底が関係していると思う。にしても、道具を使って一撃くれてやったんだって？　すごいわね、誉めてあげちゃうわ」

やるせない力の抜けた言い方は眠気を堪えているせいだろう。髪型が乱れているのは恐らく先ほどまで眠っていたからだろう。

時刻は午前二時だ。ココに来てやることもなく生活習慣を正された彼は、いつもならば既に深い睡眠に堕ちている頃合だった。最も彼女の仕事の本当のところが分からないから、いつ眠っているのかは分からないが。

「それで、あの男は特異点なんて本当に珍しいのに、逃がしたんですか？」

「逃がした……正確には捕まえ損ねたんだけどね。数ヶ月は探したんだけど、全然、尻尾も掴めない。だから結局諦めたのよ。最も、上層部からの手助けがあれば別だったんだろうけど」

「ちょっと——待ってくださいよ。手助け？　任務ってその上層部から出されてるんじゃないんですか？」

「基本的にはね。だけど外に出た、逃げ切れた逃走者については別。責めて責められるわけじゃないし、捕まえて来いと言われるわけでもない。ま、無理矢理つれてきたけど、逃げ切れるなら逃げてもいいよ。外の世界で満足出来るならってワケ」

「外の世界で……、ここでも任務はあれども不自由はないからって事ですかね」

「いえ。基本的にはここに居る人間は外では”存在していない事”になっているから。適正者に限る話だけど、存在の時間を遡らせて誕生しなかったことにしているのよ」

並行世界パラレルワールドと言う言葉が頭の中に真っ先に浮かぶ。

無数に構成される可能性の世界。衛士が居る世界とない世界。性別が異なる世界。年齢が違う世界。取り巻く環境が違う世界。

この組織はそれを可能としている。それを作り出しているのだ。そもも時間を操作するという時点で常軌を逸している。まるでSF小説の世界なのだ。

「憲兵だとか技術者は皆失踪、あるいは死亡扱いされているはずよ」だがそんな世界があったとしても時衛士が居るこの状況は何も変わらない。

今まで経験したことは決して変わらないだろうし、この記憶が確かである限り、仮にそうでなくても気持ちや決意が変わることは無い。衛士はそう考えて、揺らぎそうになる気持ちを正した。

——男は逃げ切った逃走者だ。さらに特異点という、道具を使用せずして特殊能力を得る適正者。衛士はその情報を整えて彼女へ問うた。

「なぜ、エミリアさんの前へ来たんでしょうか？ 確かにオレが邪魔だったかもしれないけど、彼女だって十分あいつを捕まえることくらいは出来るはずでしたが」

「……っ、ふう」

彼女は口を含めたブランデーを味わい、鼻から抜けてゆく香りを心地よく感じてから一つ息を吐く。途端に吐息から酒の臭いが漂ってきた。口の端から垂れるソレを手の甲で拭い、半目で衛士を捉えて答えてみせる。

「彼とあの娘は、そうねえ、今の君と彼女のような関係だったのよ。言わば師弟関係、担当者と適正者みたいな」

「弟子であるエミリアさんを誘いに来たってワケですか？」

「本心は分からないけど、今はそう考えられているわ。最も彼の動向を気にしていたり、覚えてたりしているのなんて限られてるけどね。殆ど皆、関係ないことだから忘れてるわ」

「ちなみにあの男って幾つなんですか？」

「えーっと、あの娘の五つ上だから……二五歳前後かな」

——こいつは驚いた。どうやらエミリアはまだ二〇歳であるらしい。

てつきり二三歳くらいだと思って接してきた衛士は、ハッキリしたものではないが、なにやら途端に疎外感というものを感じてきた。歳が近い。三つくらいだ。だというのに実力はここまで離れていた。ショックだ。

保健医はソレに気付いたのか、立ち上がり、励ますように肩を叩いた。

「この娘がココに来たのは十五の時よ。確かに伸びしろがとんでもなくて物覚えが良くて無愛想だったけど、潜在能力的には君の方が強いから大丈夫」

しかしその潜在能力を引き出せるか否かが本人の実力なのだ。衛士はそれを知っていて、それでも保健医の精一杯の心遣いを受けて重い腰を上げる。

聞くことは聞いたし、自分勝手かも知れないがもうここで部屋に戻ろう。彼女とて疲れているはずだし、エミリアだって頭を打って気を失っているだけらしいし。

「ありがとうございます。部屋、戻りますね。おやすみなさい」
「ええ、おやすみなさい。良い夢を」

衛士は礼儀正しくお辞儀をして、静かに扉を開けて、静かに閉めていく。耳を済ませると素直に足音が小さくなっていくのが分かり、保健医はにやりと微笑んでからブランデーを口に含んだ。

エミリアが横たわる寝台に腰をかけて、穏やかな寝顔を見せるその顔に手をそっと添える。二〇歳とは言うがまだ少女の面影を残す可愛らしい女だ。今では担当を持つほどに強くなって、個人的にも喜ばしい。

透き通るような白髪に、妖しい艶を持つ褐色の肌。瞳はこのブランデーと同色の琥珀色だというのに、酒の一滴も飲めぬ下戸の女性。以前ワインを飲ませたらたかが一杯だけで気分を悪くしていたが、そもそも肝臓が悪いのではないだろうか。

だが検査をしても以上は無いし、数だって減っては居ない。もともとそういった体質なのだという結論に行き着いた。

親指で顎を引かせると、薄い唇はそつと離れ、小さな口を開ける。保健医はそのまま顔をエミリアの口元へと近づけて、自身の唇を彼女の口に挿入する。それと同時に口を開き、口内のブランデーを流し込むと、しっかりと注ぎ込めなかったのか零れた酒が彼女の口、そして胸元に滴って強い酒の臭いを放つ。

直後にエミリアは眉をしかめ、間もなく目を力強く開け放って――保健医の顔面を鷲掴み、引き剥がす。舌に絡みつく舌を引き離すと糸が引き、背筋がぞくぞくするような嫌悪を覚えて寝台から飛び降りた。

「殺すぞ、貴様……！」

先ほどまで自身が居た寝台に横たわって、翻る下着を着けない肢体が露になるのを隠さずに彼女はエミリアを顔だけを動かして追う。彼女は強い酒の臭いに頭をくらくらさせながらしつかりと床を踏みしめ、対峙した。

「わざわざアナタの為に起きたのよ？ この深夜に。これくらい許してくれたっていいじゃない」

「……トキか、奴がここへ？」

「ええ。素直でいい子に育ったわね」
アブノーマル

「変態行為なら奴の方が喜ぶだろう。あいつは生粋のマゾヒストだ」
根拠は無い。だが訓練中の走り、殴られている間に見せる僅かな笑みがそれを思わせていただけだった。なじられれば、へらへらと笑いながらただ受動的な反応を見せる。それもその要因だろう。

「あら、いいの？ 遠慮してただけだ」

「……初体験が貴様だというのも可哀想な話だな」

「失礼ね」

「どうでもいい。頭が痛い。部屋へ戻る」

ついには耐え切れなくなって、頭を押さえて薬品棚に背を預ける。まるで二日酔いでもしたかのような強い頭痛だ。恐らく、ワインでさえ無理なのにブランデーを飲まされたようだ。耐時スーツから放たれる香りが忌々しくなってくる。

そうしていると、いつの間にか席についていた保健医から何かが放られたのに気がついた。彼女はすばやく対応して手を振るい、それを掴む。どうやらそれはビンで、ジャラジャラと錠剤が音を立てるのを効く限りでは薬品らしい。

「効くわよ」

「何にだ」

強い口調で問うが保健医は飽くまで薄く笑うだけ。エミリアは無駄だと吐き捨てて、鈍重な足取りで出口へと向かう。その中で、先ほどまで自分が横たわっていた寝台の隣にしっかりと整えられた装備を見て、回収する。

「几帳面な奴だ」

だがこれを片付けるのは明日にしなければならぬ。ともかく酒の影響が強すぎたのだ。

「奴は、何か言っていたか？」

背中越しに問いかける。保健医は肩をすくめて、

「何かって？」

「戦闘報告だ」

ああ、と納得したように声を上げる。エミリアは閉じた扉に手を添え、身体を支えて静止した。

「右肩に一撃くれたらしいわね。砂時計を使って」

「……因果なモノだな」

「ふふ、そうね」

「世話になった。おやすみ」

「ええ。お大事に」

エミリアは重そうな身体を引きずって、両手に衛士の、そして自身の装備を抱くようにして医務室を後にする。

それを見送った保健医は大きな欠伸をしてから、白衣を椅子にかけ、照明を落とすとそのまま医療用の寝台に身体を沈めた。

時刻は間もなく、午前三時になろうとしていた。

眠れて二時間、いや粘って三時間だろうか。彼女は素早くうつろ

になっていく意識の中で考えて、無意識が想像する衛士との応答に笑みを漏らす。彼女はその表情のまま、ひどく穏やかに眠りについた。

束の間の……

四月に入る前に最後にもう一度だけ任務を行うとの指令があった。エミリアは頷き、衛士に伝える。彼は素直に返事をして任務までの一週間を必死に訓練に費やしているのだが……。

最近、妙に保健医との親密度が上がっているような気がする。それは以前の初任務からのことだった。

今まで、二週間のみっちり鍛え上げる訓練では一度も訪れなかった医務室に、このところ毎日のように彼は足を向けているのだ。無論、中の様子を伺ったり、会話を盗み聞きたりなどの無粋なこととはしないが、なにやら嫌な予感がする。

確かにエミリアは無愛想だし、相談事なら気さくで年上である保健医のほうがしやすいだろう。彼女の立場とてその要因を増幅させるものだった。

時衛士の精神は異常な落ち着きを見せている。恐らく試練での経験がそうさせているのだろうが、それでも本番、いわゆる命を左右する任務での不安を拭うことは出来ないだろう。彼女は心理カウンセラーじみた事が出来る。いつもはふざけてはいるが、それでも聞くことは上手だし、そこはかとなく自信を与えるのもお手の物だ。

だから衛士が医務室に通うのは別に悪いことではないし、そこで何をしていようと何を話していようと関係があるものではないのだ。

エミリアは不自然に医務室の前を何度も往復しながら、いい訳じみた事をブツブツと繰り返し、それから中で動きがあると、駆けて廊下の影に隠れて様子を伺った。

そこでふと気付く。

「私は一体何をやっているんだ」

これではまるで恋に煩う乙女ではないか。いや、確かに乙女だが、だからと言って衛士に恋愛感情を覚えているわけではない。どちらかといえば保護者の観念だ。

しかし、この歳になるまでまともな恋愛をした事が無いとなると将来に漠然とした不安を抱いてくる。

別に焦るわけではないが、老後、独りになって寂しくは無いだろうか。子供の頃、ここに来たばかりのときは良く世話になった祖母の死を思い出しては泣いていたが、ソレに似た物悲しさを感じていた。

そうしてから、彼女は首を振る。

どうにもあの男、師と仰いでいた彼と久しく出会い、一撃でのされてから調子が狂っている。衛士がそんな彼の右肩に銃弾を当てたという事もあるのだろうか、自分らしくない。

「つたく、腑抜けている」

もう一度訓練をやり直すべきだろう。気を引き締めなおさなければ、次の任務に支障をきたす。

最も、次の任務とは言ってもエミリアは参加しない。他の二名を加えた総勢三名でとある組織に潜入するのだ。隣国の、『あの男』と以前関係を持っていたらしい組織である。

そうであればより強力な適正者を送るべきだと考えたが、しかし任務内容は前回同様の潜入だ。衛士と行動を共にする人間を厳選すればそう難しいものではないだろう。最も、下手なちゃんにゆうしや闖入者さえなければ、だが。

背を向け、自室へ戻る。食事は相変わらずクラブサンドだが、それでも腹は膨れ、腹が膨れれば眠くなるのだ。

今日はなにやら特別疲れた。調子が狂うし、少しでも早く休みたい気分だった。

「あれ、エミリアさん？」

そんな時にふと背後から声が掛かる。油断していたせいか、足音にも気配にも気付かず、思わず大きく肩を弾ませた。しかし彼女は素知らぬ顔で振り向いて、何かようか？ と白々しく口にする。

「いや、別に用は無いです。ただそこに居たので」

「ならば早い内に休んでおけ。明日も訓練だ」

エミリアは鼻を鳴らし、足を進める。おやすみなさいとの声に軽く手を挙げ、その場を辞した。

——心臓が高鳴る。緊張でも興奮でもない。単純に驚いたものだ。しかし本当に、今日はダメだ。根本的にエミリアという人格が崩れているような気がする。

彼女は固い寝台に倒れ込むよう沈んで、布団も掛けずに天井を仰ぐ。右腕を額に乗せ、その漆黒をぼんやりと眺めていた。

鈍っているのか、頭がぼうつとする。目も沸騰するように熱い。食欲だってそうなかった。無理矢理クラブサンドを流し込んだが、それがいけなかった。

胃が痛い。

眠りたいが、柄にも無く呑んだコーヒーのせいで目が冴えてしまっていた。これはこの上ない苦行だった。衛士が眠いときは熱いブラックコーヒーを飲むとその苦さで目が冴えるといったが、時間差の効果も随分と強いものであるらしい。

「情けない。これで任務でハマしたら、だめだめだな……」

明日は起きられるだろうか。いや、起きなければならない。仮にも教官の位置に立っているのだ。この自分がそうしなければ、示がつかない。

だが、精神か、肉体か。本当に調子が悪い——。

午前七時。任務があるのはその日から三日後のことである。

今日の訓練はそれ故に総仕上げと言うものだった。任務での近接戦闘での銃撃の腕は一般的なレベルであると認められた。後は確実な格闘だ。

次はどうやら本当に施設内への潜入らしい。こういった、寮のよきな構造の中を歩き、敵と出くわせば殺すか気絶させるかをし、前へ進み構造を理解する。そういった任務だ。

だから気を引き締めなければならない。以前は恐怖やら不安やらに駆られたが、今回はそれにばかり気をとられてはいけないのだ。

衛士はそう気合を入れてきたのにも関わらず、集合場所のグラウンドには未だエミリアの姿は無かった。

既に一時間が経過している。直立不動の体勢にも、いい加減疲れてきた頃合だった。

こんなことは初めてのことで、衛士自体何をすればいいのかわからない。何か任務があつて今日は偶然居ないのか、それともわざと現れない事によって衛士の様子を伺っているのか。

この地下空間に居る上に施錠セキュリティの厳しい個室に居るのだから、襲われることはまずないだろうが、如何せん、不安になってくる。

何かがあつたのか、何かをされているのか。自分が何をすべきなのか、何をすべきではないのか分からない。だから一先ず、彼は医務室に向かつてみた。

――駆け足で、急いだ様子で駆け込むと、コーヒーカップを片手になにかの書類を眺める保健医が、驚いた顔で衛士へ向いていた。

「あら、どうしたの？ この時間に珍しいわね。怪我でもした？」

「いえ、あの……エミリアさん、知りませんか？」

口に運ぶコーヒーカップ。それは不意に彼女の口元で爆ぜたように内容物が霧となって周囲に飛び散る。保健医の顔もそのコーヒーにまみれて、近くのティッシュを手探りで探し、それで拭ってから大きく心を落ち着かせるように息を吐いた。

息を吸い込むとむせ込むを見て、忙しい人だなと思いつつも、やはり彼女がこういったことになるのは酷く珍しいことなのだと理解する。彼女の言葉を黙って待っていると、笑っているのか咳き込んでいるのかわからない状態で、目の前に立ち尽くす衛士の胸をぼんぼんと平手で叩いた。

「本来、任務に出るよりこういった『先生』してる方が時間が無いのよね。毎日仕事だし、休む時間もきっちりだから」

大きく息を吐いて足を組む。落ち着いた様子で彼女は始めた。

「では、体調でも崩したんですかね」

「仮に彼女なら風邪をおして出てくるわ。健康がとりえみたいなあ

の娘は、二年前だったかしら、任務でもそうだったから」

「でもそれって逆に、失礼な話ですけど……」

「ええ、なんとか説得されて休養してたけど、どんな時でも朝は起きて時間通りに行動するって事が言いたかったのよ」

「……つまり？」

眉をしかめて、衛士は問う。

確かに彼女の行動は立派で頑張るところを今まで隠して、そしてようやく今、実は頑張ってたんだな、と理解することが出来る。しかし実際、だからなんだというのだ、というところである。

「ここでの生活は安定してるって言う事よ。気が緩んでるのね」

衛士で言う以前の生活のような安らかさだと、彼女は例えて見せた。

この訓練校では今まであった生死のやり取りが無い。生きるか死ぬかの選択など無く、自身の実力がそれを分かつことなど考えられないほど、平和だった。最もその段階に向かうべく鍛える場所なのだが、少なくともそれが無いということは、大きかったのだ。

だからエミリアは穏やかになり、気が抜け、風邪を患ったのだろう。保健医は推測してから、部屋に向かってみようかと腰を上げた。

——訓練生の部屋がある通路からやや離れた位置に、彼女の部屋は果たしてあった。

同じように扉が等間隔で並ぶ通路。その一つがエミリアの自室であった。それを確認する事が出来たのは、部屋にネームプレートが張ってあったお陰である。

最も保健医は、無くても分かるけどね、と豪語していたが。

彼女はドアノブを捻るような自然さで液晶パネルに人差し指を添える。そうすると間も無く何かを認識したそれは、ピツと機械音を鳴らして——扉は少し奥に引っ込み、開き始める。

本来ならば開かぬはずのそれである。そしてここはエミリアの自室。

カギはその本来の役割を果たさずに来訪者を招き入れているのだ。

衛士はそんな事態に思わず目を白黒させてから、口にする。

「か、カギはどうなってるんですか？」

「ああ、この施設のセキュリティはね、あたし一人で解除できるのよ。^{マスターキー}万能鍵^{マスターキー}ってあるでしょ？ あたしはこの管理人みたいなものだから、その人間版よ」

「管理人？」

「知らなかった？」

「まったく」

それじゃ、よろしくと彼女は手を差し伸べる。衛士はぎこちなく返事をしてから握手を返すと、扉はようやく全てが開ききったところだった。

明かりが差し込み、見えるのは正面の壁に沿うように横向きになる寝台。その上に布団を掛けてぐったりと横たわる陰は、まるでマラソンの直後に布団の中にもぐりこんだような呼吸の乱し方で布団を上下させていた。

淀んだ空気を肌を感じる。保健医は表情を引き締めて中へと入る。同行してよいものかと入り口で手をこまねいていると、保健医はいから、と彼を促した。

衛士は自室の構造とそう変わらないことを理解して電気をつけようとしますが、既に淡い赤の電球が鈍く周囲を照らしていることに気がついて、手を止める。恐らく、下手に電気をつけてしまえば寝ているであろう彼女を起こすことになってしまうからだ。

「風邪気味だったから薬渡したのに、自覚症状が無かったのね」

保健医は彼女の額、頬、耳の後ろへそれぞれ手を添えてから、ポケットから冷却ジェルシートを取り出して、額に張ってやる。すると唸るような声が聞こえて、エミリアの目が薄く開かれた。

「エイジくん。君は、そうね。街に行ったことはある？」

「無いです」

「それじゃあ悪いけど、医務室にメモがあるから、ちょっと必要なモノを買ってきてくれないかしら」

彼女はそう言って白衣のポケットからがま口を取り出すと、それをそのまま衛士に投げる。彼はそれを受け取り、ポケットにしまこんだ。

それから口頭で必要なものを二、三伝えられて、それをしっかりと頭の中に刻み込む。これはある種の任務だと、彼はそう思い込んだ。

それから衛士は、未だ開け放してある扉から廊下へと出る。すると間もなく、まるでソレを待っていたかのように扉は閉まって、衛士と彼女等は分断される。声も聞こえないし、気配だって完全に断たれていた。

保健医は気配で彼が失せたのを感じながら、薄暗くなった部屋の中で、言葉にならないエミリアの声を聞く。

恐らく熱は随分と高いものだろう。汗もかいているし、布団の中はびっしょりだ。

「な、さけない事だ……」

掠れた声で彼女が告げる。随分と可愛げのある様子が弱っているときだけなのは勿体無いが、ただ愛想だけを振り撒いているよりはまだいいだろう。常日頃の彼女とて、随分魅力的なものだと彼女は思っている。最も、その魅力に気付く人間はそう居ないだろうが。

「いいから、休みなさい。そんな調子だとエイジくんだって訓練どころじゃないわよ」

「……ん」

短い返事。その後に彼女は黙り込んだ。

しかし、それほどまでにこの環境が心地よいのだろう。風邪を引くと言う事は、それほどまでに体調管理が出来ていないことだ。油断していると言う事なのだ。彼女はいつもならそんなへまさえしない、完璧主義者のような人間だった。

そんな彼女が風邪を引いたのだ。この訓練校の教官になって、否、時衛士の担当になって、油断し緩みきることができるようになったのだ。

まだその心情は素直ではないかもしれないが、良いことだった。任務で頭を一杯にして、たまに人の事を話すとしたら師をいかにして探し当てるか、という事だけだ。たまには、風邪で休養と言う形でも、ガスを抜くことが出来れば良いのだ。

保健医はそれから震えるエミリアの手を強く握って、幸せ者ね、と誰にとも無く呟いた。

時衛士が街の中を迷うのにはさほど時間は要らなかった。

寮を出て左右に広がるうち、左へ向かいひたすら走る。街まで距離は一〇キロほどあるという話なので、全力で走れば二、三〇分でつくと考えたのだ。

そうして走ることに十分。まだそう寮から離れていないであろうもののな、突如として人がぼつりと現れ、そして進むごとに周囲に人が満ちていく。

あたりは活気付き、私服姿の人間ばかりであった。街の外観は寮の近くと変わらないが、商店には人が居て、そして商店が陳列してあった。

衛士は人を避けて、それからようやく辺りの変化に適応しつつ、ドラッグストアを探し始める。戦闘服姿が目立つのか、すれ違うたびに視線で追われるような気がして不快だったが、それを気にしている場合ではないだろう。

だが、日本語で記載されるその商店の数々に見覚えは無く、おなじみの黄色い看板であるドラッグストアを見つけることは出来ない。いよいよ誰かに聞かなければならないのかと周囲を見渡しながら歩いていると、不意に肩に強い衝撃を覚えた。

誰かがぶつかってきたのだ。すれ違う男に一言謝罪をしてから、衛士は足を進める。だが、それは叶わず背後から指を食い込ませるようにして肩を掴まれ、止まらざるを得なかった。

「おい待てよ、すんません？ 舐めんなよコラ」

仕方無しに振り返ると、薄手の紺のロングコートを揃って着る二

人の男。肩に小銃を担ぐ所を見ると恐らく彼等はどこかの警備兵、あるいはいわゆる”憲兵”という奴だろう。

リスに所属する、適正者ではない戦闘要員。つまりは軍隊で言う兵隊と同じ扱いだ。

すると彼等も衛士の格好を見てそれに気付いたのだろう、目を大きく開いて驚くような所作を見せてから、共に顔をあわせてへらへらと表情を緩めた。

一時間寒い野外で待たされて、病気で寝込む教官の心配を胸に遣いに出されてみれば、柄の悪い二人に絡まれる有様。テレビがあれば朝の星座占いで十二位であったであろう運の悪さだ。

衛士は嘆息して、出来る限り穏便に済まそうと深く頭を下げた。

「申し訳御座いませんでした」

精神誠意を込めたつもりである。

だがそれがいけなかったのだろう。

不意に振りあがる膝が、途端に視界一杯に迫ってきて――苛烈な一撃。

衝撃が脳を揺さぶり、打撃を受けた鼻筋はじんとした鈍い痛みを覚え、つーつと鼻から熱い液体が流れるのを覚える。衛士はおぼつく足取りで数歩後退しながら、逃がさんとばかりに胸倉を掴む男に行動を支配された。

「テキセーシャ、だろ？ お前。ムカつくんだよなてめえらよ。ただ、便利な道具が使えるからって良い待遇受けてよ。便利な上に、その道具使えるだけだろ？ んなもん猿にだって出来る。モルモット如きが、なんで人を見下してんだよッ！」

拳が一閃。頬を歪めて拳が突き刺さり、そのまま首を折らんとする勢いで顔が右側へ捻られる。唇が切れて、血が男の拳を濡らす。強い痛みだ。覚悟はしていたが、痛いには変わりが無い。

オレは何故我慢をして居るのか。そう考えると、不意に激しいストレスが心の中に募る。

――気がつくと、もう一度振るわれようとしていた腕を、力強く

掴む自分に気がついた。

眉間に皺を寄せて、男が怒号を散らすよりも早く、衛士は制する
ように低い声で言葉を紡いだ。

「ここまでは許してやるよ。気前がいいだろ？　だが次は許さねえ。
オレがてめえに何をした？」

瞳孔が開くような感覚。迸った怒りが、この目の前の男の行動同
様に勢いづいて、一度爆ぜれば収まりどころがつかなくなるであろ
うが、構わず弾けさせたくなる衝動。

もう一人は肩に掛ける小銃に手を掛けていた。たかだかケンカで
これは無いだろうとは思うが、だが衛士はそれさえも凌げる自信が
あった。その気になれば、一撃で倒すことができる。そんな相手に
そう心から思わせるほどの自信が沸き出していた。

試しにこの男の顔面でも潰してやろうかと空いた手を彼へと近づ
けると、瞬間、短い悲鳴を上げて飛び退くように彼は衛士と距離を
取る。

「て、てめえ……！」

動物の、本能的に感じる危機。彼が感じるのはそれだった。

そんな相棒を尻目に、小銃を構える憲兵はそのまま即座に――前
の目めりになって地面に倒れ込む。受身も取れず、そのまま額を強
く叩き付ける光景は端から見ても痛々しい光景だった。

そしてそんな男の立っていた場所から現れるのは、漆黒の戦闘服
を身に着ける男の姿。清々しい短髪は清潔感を思わせるが、引き攣
った目や釣りあがるような笑みを見せる口元が印象を悪くする顔。

その男は目にも留まらぬ動きで背後から残る男の首を掴むと、そ
のまま容易に持ち上げてみせる。彼の足は爪先立ちから徐々に空中
に浮かび上がり、呻き声を漏らして、自分の首を掻き切る。

それから何の感慨も無く、倒れた男の上に重なるように放り投げ
られた。彼はそのまま怯えるようにぎこちなく立ち上がると、相棒
を放置して落ちた帽子も、小銃も捨てたまま、街の角に姿を消した。
果たして衛士の危機を救った男は、それでも彼には歓迎されたも

のでもなかった。

首元から股間まで伸びるジッパ―。つなぎのようで、だが何処と無くゴツイ力強さを見せる戦闘服。見た目は、戦闘機乗りが着る耐Gスーツそのものだった。

「カハハッ！ あんなのは殆どバカなんだからよ、わざわざ痛えの貫わなくなつたって良いんだよ、バカだな」

「やっぱり生きてたんだな、イワイ……！」

憎しみが湧く。怒りが湧く。力が湧く。殺意が湧く。衝動が堪えきれなくなる。

覚悟はもう嫌なくらいしてきた。生きていたことは分かつてたが、やはりこいつを目の前にすると我慢なら無くなる。視界が真赤に染まるようだった。

「生きてたぜ？ てめえサマ様になつてるようだが、相変わらずだな。俺への執念だけを餌に這い上がったのか？」

気軽に笑い、祝英雄は肩を叩く。いわいひでお先の騒ぎで周囲からは人が居なくなり、途端に静まり返ったその中で、衛士は構わず声を荒げた。

「テメエの事なんざつい先まで忘れてたよ！ だがな、許したわけじゃない」

肩に乘せられる手を振り払って一步引く。イワイはそれにあわせる様に大きく一步踏み込んだ。

「はは、まだ甘つたれのガキだもんな。ママとパパが恋しいんだろ？」

「てめえっ！」

歯を食いしばり、拳を強く握る。今にも飛び出しそうな感情なのに、襲い掛からない自分に衛士は驚いていた。

「ほら、殺してえのなら殺してみろよ。いつかの試練みてえにな」殺意が迸るのに、この男の一言一言が心臓を締め付けられるくらい憎いのに、勢いづけるための一步がひどく重かった。

身体が動かない。否、身体を動かせない。自分の意思で、衛士の理性がそうしていた。

ここでそうすべきではない。ただ挑発に乗って憎しみをぶつけるだけなら、今までこの苦しみを耐えてきた意味が無い。

だから衛士は、強張る体から力を抜いて姿勢を正すと、無理矢理に軽く笑って首を振った。

「デメエはあの時死んで罪を償った。仕方なくはねえけどよ、少なくともそういった形で清算したんだよな、お前は。だから俺の怒りは、憎しみは組織（こし）に向いたんだ。死にてえなら勝手に死んでろ。俺はここを最大限に利用して、ぶっ潰してやる」

「あ、おい！」

衛士は殺気に満ちた瞳で最後にイワイを貫いた後、背を向けて街の中心部へと向かった。

イワイはそんな後姿を見送りながら短く嘆息し、頭を掻き耑（は）ってから倒れる男と、捨てられた帽子、小銃を回収して近くの、恐らくこの憲兵が住んでいるであろう宿舎へと向かう。それからまた、一年近く昔の事を思い出してから、やるせなく溜息をついた。

「まだ、弱えな」

呟きは誰にとも無く紡がれ、空气中に溶けていく。

全てが組織の人間だというのに、表の世界同様に人が平和に街を歩いている。だからそもそも、目立つ行動さえしなければ適正者と見抜かれるはずも無いのだが。

イワイは面倒そうに大きな欠伸をしてから、これから帰って何をしようかと考える。だが、没頭してしまうことは無理だろう。

折角戻ってきたのに、三日後にはまた任務だ。内容はどうかや隣国のとある施設の視察らしいが、穏やかに行くわけも無い。その上二人が加わるという話だ。憂鬱なことこの上ない。

——しかしあの時衛士がここへ既に来ていることに驚いた。最も、あれほどの事をあれほど繰り返したのだ。一年近い養生で済んだだけでも良いほうだろう。

衛士がここへ来た事によって表の世界の運命は変動する。それが僅かな事でも、誰かの人生は大きく変わったはずだ。たとえば、脱

走するはずの精神異常者が脱走しなかったり、死ぬはずだった人間が死ななかったり。その変化は様々だ。

衛士がそれを知るのは、きっかけがない限り無いだろうと考えると、それが良いことなのか悪いことなのか分からなくなってくる。だが精々、その怒りを誰かに向けてるだけ良しとしよう。

イワイはまた大きく欠伸をしてから、重い足取りで宿舎へと向かった。

錯綜

音速を超える速度で虚空を駆ける弾丸は、頬の肉を削いで後方へ過ぎてゆく。燃えるような熱さを患部に覚えて衛士はその崩れかける体勢のまま後ろへ飛び退いた。

両手で機関拳銃を構え、その最中に引き金を絞る。強い反動が連続して腕に負荷し、衛士は両足で地面を抉るように踏ん張って勢いを殺しながら息をついた。

バースト射撃で正確に二発。それで目の前の敵は絶命する。撃ち抜かれた胸を押さえ、じんわりと感じる生温かい血液が絶えず抜けることに絶望を覚え、膝から崩れて前のめりに倒れた。

——広い空間。周囲は聳える木々に囲まれるものの、そこは開けた場所だった。端から向こうの端に相手が居れば、その表情を認識することが出来ないほどの遠さである。衛士はその広間の真ん中辺りに立つ残る一人を見定めて、射撃されるよりも早く発砲。発射炎が瞬き、弾丸が飛来する。

敵は構わず発砲し——弾丸は傍を掠めた。だというのにこちらの銃弾は当たる気配すら無い。

ざっとみて相手の距離は衛士から五〇メートル近く離れている。先ほど殺害した者よりもかなり背後であるところから見ると、どうやら後方支援であるが故に唯一生き残ったのだろう。

さらに相手は小銃、こちらは機関拳銃。有効射程から見ても不利だった。いや、正確には一方的な攻撃を受けるだけであり、決して不利ではない。まずそう思い込むことから初めて、衛士は嘆息してから機関拳銃をその場に投げ捨て、腰から大型のナイフ——ククリナイフ——を抜き、屈みこんだ。

脚力に、その筋肉に全エネルギーが集中するような感覚。イメージ大きく高鳴る鼓動が、全身に湧き上がる力を広げるような強さ。しかし最も、それとは関係無しに衛士が力を込めれば、脚力は相応に力を増

幅させてくれていた。

耐時スーツは力を込めればそれに連動するように力を付加させてくれる。だからこそ無茶な機動、無理な行動に融通が利いた。

前のめりになり、身体を起こす。その勢いを利用して力強く大地を蹴飛ばし――跳躍。

強い突風が全身を颪り、視界は瞬く間に景色を縮尺化させている。風を切る音だけが耳に届き、眼下では衛士に銃口を向けて火花を散らす影だけが見えていた。衛士は流れに身を任せ、ただ頭を両手で庇うような体勢で身体を捻り、落下に供える。

間も無く身体が一瞬だけ重力から解き放たれて、地面に引っ張られるような落下感を覚える。腹の臓腑が浮かび上がるかのような不快感。全身の血液が冷めるような恐怖が広がる。

大地で空を見上げる男の顔は辛うじて判別がつく程度の高さだ。

衛士は強くナイフの柄を握り、体勢を立て直そうとする。直後に耳に届く発砲音を聞いて暫くはこのままでいようかと考えるが、地面との距離は先ほど確認した時の半分以下になっていることに気付いて、考えを改める。

衛士の位置は既に男を飛び越えている。敵はそれに気付いて衛士目掛ける乱射をやめずに引き金を絞り続けるが、その射線は悉く衛士と交わることが無い。やがて敵の真上までに衛士は肉薄すると――突き立てたククリナイフで頭頂部を貫き、砕く。

衛士はそのまま強い衝撃を逃がすように、再び跳躍直前の姿勢に戻すように屈みこみ、顔を左右に割らせる敵が崩れたのを確認して、大きく息を吐いた。

ゴーグルを外し、血のりなど一切付着していないククリナイフを腰の鞆に戻してから、急ぎ足で機関拳銃を回収する。周囲のむき出しの地面にはペイント弾が弾けた、赤い液体が飛び散る跡だけを残し、死体などは勿論無い。

それを見ながら、林の奥から現れやがてその開けた空間にやって

くるエミリアの元へと急いだ。

特殊な装備を使用する事によって視界内に敵の幻影と戦うことが出来る。ゴーグル内には敵が現れ、全身に着る強化装備は視界内の反応によって強い衝撃や、抵抗を与えてくれる。つまりは簡易な模擬戦闘をさせてくれるのだ。

最もこれは以前も数度行った事がある。されど今回は随分と違った結果になることだろう。

——終えた後にエミリアが評価するのだが、今までは『堅実』の一言で始まり、その後の改善点や大まかな良い点などを教えてくれる。だから衛士は彼女の言葉を楽しみにしていた。

今日は積極的に戦闘へ赴いたのだ。

潜伏する敵を即座に発見し発砲。また発見されても囲まれる前に特攻し殺害。

この行動のお陰で四人一組の四チームは二〇分と持たずに全滅した。これを衛士は誇らしく思っていた。

「まず一言——無鉄砲だ」

だというのに、目の前の彼女はもはや何も気にすることがなくなつたかのようにタンクトップ、チノパン姿で、拳を腰にあて、眉間に皺を寄せて言い放つ。

「その戦い方は貴様には合わない。それは実力が在る者がして然るべきものだ。最も、調子に乗らぬ限り実行はしないがな」

彼女は重ねる。衛士はそんな台詞にむっと口角を下げ、ポケットに両手を突っ込んだ。

「堅実じゃあ何も進歩しません」

「無鉄砲で命を散らせたいのならば何も言わん。何に影響されたか分からんが、止しておけ。貴様の強みは苦肉しても必ず敵の隙を見極める所にある」

「そんなの、先に敵を殺せばいいでしょう？」

「言っている意味がからんのか間抜け。貴様にはそれが出来る実力を有していないと言っているんだ」

「はは、エミリアさん。見てなかったんですか？ オレは、一撃も貰わずに敵を殲滅したんですよ」

衛士のそんな一言に、彼女は心底嫌悪した眼を向けて嘆息する。それから鋭い視線で衛士を射抜き、静かな怒りを灯すような声で、諭すような口調で言った。

「成長したと思ったのだから……。一人で？ 殲滅？ 貴様が何を勘違いしているか知らんがな、主な掃討戦での出番は我々には無い。最も危険である単独潜入を行い、敵の弱点たる箇所を発見することが任務の殆どだ。貴様が持つ副産物は人を殺す為の道具ではない。身を守る為の道具だ。これだけは決して違えるなよ。適正者としてではなく、人として、だ」

「出くわした敵を全滅させれば気付かれないでしょう。こういった戦い方は実戦でも有効なはずですが」

「私は別に貴様の戦い方が気に喰わないからやめろと言っている訳ではない。その傲慢さが仲間を危機に晒すと言っているのだ。敵の一人に発見されるだけで任務の成功率が八割下がるって言われている。そして今の貴様を任務に加えれば成功率は確実に○を下回るだろうよ」

「何故です？ 発見されたのなら周囲に知らされる前に殺す。ならばオレのような特攻要因が重要じゃないですか」

彼の口調は敬語から崩れはしないが、その表情や態度のせいで意味を成していない。ただ上下関係を表すだけのものと変異し、また互いに怒りや苛つきを隠せず、交わした瞳を一向に揺らがさず、離しもしない。

主張は確かな平行線にもつれ込んで、いよいよ衛士の頑固さに頭痛を覚えたエミリアは頭を抱えて強く髪を掻き揚げ、衛士の胸倉を掴む。彼はそんな行動に眼を見開いて驚きを表し、だがすぐに憎しみとも取れる表情で彼女を挑発した。

「それで気が済むなら――」

言い終える前に鋭い一閃が、衛士の頬に平手が襲い掛かる。甲高

い破裂音が周囲に響き渡り、衛士はそっぽを向くように顔を傾け、左の頬を徐々に朱色に染めていった。

「動物は痛みを覚えて学ぶ。だが貴様はそれ以下だろうな」

衛士はこの上ない怒りを覚えて、今にも理性のたがが外れそうになる。顔は無表情に戻るも、垂れる両腕には全身全霊の力が集中し始めていた。

「ダメだと言っても分からね、理由を教えても首を振る。馬鹿か貴様は？ 任務は貴様が気持ちよく活躍する場所ではない。言われた事をやって見せた者が活躍したと誉められるのだ」

——時衛士は焦りを抱いている。エミリアにもその程度の事は察することが出来た。

何が原因かは分からないが、大まかな推測は出来る。恐らくは風邪で寝込んだ時に街で何かがあったのだろう。そしてイワイ・ヒデオと接触したのだ。そこで力の差や迷いを見たのか、あるいは他の要因か。

もしくは単純にイワイの戦闘態勢に憧れを抱いて真似をしているのかもしれない。少なくともそれらが今の衛士を作っているのだ。

だがそれはいけない学習だった。彼にはそれは合わない。絶対的な力で一点突破するのではなく、隙を縫うようにして滑るように前へ進む。どちらにせよ彼には突破できる強引さは無く、単純な力も無い。

そもそも後者のような逸材はそうそう居ないものだ。自身を見習ってくれたと考えるのは都合が良い話かもしれないが、少なくとも参考にしたのだろう。だからこそ、突如としてのこの路線変更は余りにも無謀すぎるのが、彼女には痛いほど良く分かった。

任務は明日。もしこのまま行けば、いくら危険度が低い仕事でも最悪の場合を常に想定しなければなくなる。

衛士はまだ子供だ。そう考えてから、ここに居る時点でそんな言い訳が通用するわけが無い事を思い出して、思わず溜息が漏れた。

「最後にもう一度だけ言ってやる。その戦い方は貴様には合わない。

生きて残り、強くなりたいのならば本来の貴様としての戦い方に戻せ」

「ここでわかりましたと言えるようなガキじゃない。オレは——」
「ああ、わかった。だがな……死にたいのならば人に迷惑を掛けずに一人で死ねよ、クソ虫が」

彼女は力強く彼を突き放すと、そのまま踵を返して林の奥、出口へと向かう。衛士はそうされても両腕に込めた力を振るう事が出来ず、ただその場に立ち呆然としていた。

——彼女の言っていることは分かる。だが同時にそれではいけないという考えが浮かんだのだ。

これではダメだ。強くなれない。強くならなければならないのだ。ならば、積極性と即効性をもって敵にかからねばならない。

そうすれば強くなれるのか？ 自身のそういった問いには素直に首を振ることは出来ない。だが少なくとも、ちまちまと隠れて隙を狙い、仕留めていくよりは確実な気がした。

そう説明すれば彼女も納得してくれると思っていたのだ。

だというのに、そんな事を言う暇も無く頭から非難され、潰される。最終的には嫌悪されて突き飛ばされてしまった。

確かに彼女の言い分が最もだろう。だが決してこのやり方も悪くは無いだろうし——頭にきたのは、彼女のそんな取り付く島も無いような態度だった。

エミリアに対して無意識に姉の影を見るからこそ、衛士は必要以上の反発を見せてしまう。だからこればかりは仕方ないと言える問題だったが——口論の内容が内容だけに、それを樂觀して、時間が解決してくれるだろうと言う事が出来るものではなかった。

特に時間が無いのだ。明日の任務は午前二時に開始する。そして残りの時間は既に八時間を切っていた——。

「くそっ……あの小僧め、よりにもよってこんな時に反抗期を迎えた」

甘い果実酒をあおり、真赤な顔でエミリアが嘆く。彼女はその時点で強い頭痛を覚えていたが、構わずグラスのそれを全て飲み干し、次を急かす。保健医は複雑な笑みを浮かべながらそれに注ぎ、溜息混じりに口を開いた。

「何度も聞いたわよ」

「馬鹿が。身体鍛えて脳筋になったつもりでいやがる。奴は自分で言ったことを忘れたんだ。あのー、アレだ、ふざけている」

思い出すように頭を抱えるも、思い出せずに掻き爪って顔を覆う。手から零れ落ちそうになるグラスを受け取る保健医は、そっと机の上に移動してやった。

「あの子は私と貴女に家族を重ねてみているのよ。彼なりに頑張った結果でしょう？ 注意は分かるけど、さすがに頭ごなしはいけないわね」

「何を言っている間抜け。命が関わるんだぞ？ 奴の行動で失敗して、奴だけが責任を負うのなら良い。だがな、それだけでは済まないんだ。それをわかつちやいない。しかも家族だ？ 私は教官だが、奴の保護者ではない。甘ったれるな」

「貴女は人の心情を察する事は出来るけど、本心を見るのは下手ね。本当に、昔の貴女とあの人みたい」

「はっ。仲間が目の前で死んだからって戦場から逃げ出した腰抜けと一緒にするな」

「死んだのは彼の親友だったわ。しかも、ただ死んだだけじゃない」

「……そんな話は聞きたくない」

「そうね。ならもっと楽しい話でもしましょうか？」

いつもならば振り回されるのは保健医の筈だった。だから今日はそんな違和感を抱きながら、こんな彼女でも酒を飲みたくなるときもあるんだな、と微笑ましくエミリアを見守った。

口調は崩れ、だが言葉はしっかりと紡いでいるのだが、その目は殆ど閉じられていて周りが見えていない。手探りでグラスを探す彼女の手にしっかりとそれを握らせると、彼女は内容物が半分以下だ

というのに、まるで溢れんばかりに注がれているのかと言わんばかりに静かな動作で口元へと運んだ。

十数秒かけて一口を飲み下すと、彼女は大きく息を吐いてうな垂れる。

「……もつと違う言い方ならば、奴は考えを改めたか？」

ぼろくそに言っておきながらも、彼女の頭には未だ衛士が居る。

それを聞いて保健医は思わずくすりと笑ってから、優しく同意を口にした。

「そうね。彼は聞き分けは良い方だと思うから」

「だが人に言われてはいはいと頷くだけじゃ……」

——エミリアはそこで思わず口をつぐんだ。

だから衛士は自分で戦い方を無理に変えた。エミリアの戦闘方法を模倣するだけでは成長しないと踏んだのだ。精一杯自分なりに考えて、それで実力を認めてもらおうと考えた。

しかしそれは失敗だった。どちらにせよあの戦い方ではあまりにも雑すぎて通用しない。相手はただの組織ではない。民間の警備会社が警棒を片手にうろついているわけではないのだ。

だから注意をした。そもそも何故以前の戦い方を誉めていたのに、それは真実心から思ったことを口にしていたのにも関わらず、なぜ成長しないと思ひ込んだのか彼女には分からなかった。

「彼は自分で考えたもので誉めて欲しかったのかもしれないわね。強くなると思った、なんてのは無意識が乗せた言い訳よ」

「甘ったれの小僧だな。ここをどこだか、自分の目的をなんだか、すっかり忘れている」

「でも強くなっているでしょう？」

「どうだかな」

衛士の戦闘能力は正直微妙と言うのが実に正しい。

今回の模擬戦闘のように特攻すればある程度の実力を保ったまま行動出来るが、おざなり過ぎて敵には通用しないだろう。堅実な方法で行けば安全だが、彼の本気、瞬間的に見える煌めきのようなも

のは、本当に一瞬だけしか垣間見えない。

だが、どちらかを選べというのなら迷い無く後者だ。それが彼の本質に似ているし、そもそも他は考えられなかった。

エミリアは、さてと、と嘆息してから立ち上がる。グラスを机において、彼女は思ったよりも確かな足取りで背を向け、扉へ向かった。

「あら、もう行くの？」

「ああ。頭も痛いし気分も悪い。邪魔したな」

「いえ。今日は意外な一面が見れて楽しかったわよ」

「……明日になれば後悔をしそうだ」

彼女はその横顔に微笑を携えて、そのまま静かに医務室を辞した。時刻は既に午後一〇時。いくらなんでも酒に飲まれすぎたという所だろう。

酔いが回る頭には、やや冷たすぎる空気はかえって心地が良かった。

泥酔手前だった調子はほろ酔い程度に回復し、夜の無い世界の明るさは眠たくなる頭を覚ましてくれる。思考は冴え、緊張はなく、筋肉は程よくほぐれ、全てに対して非常に丁度良い体調と言えた。

人工林には特別な出入り口は無い。だからどこかへ真っ直ぐ歩けばすぐに外に出ることが出来るし、それほど大きな規模でないから迷うことも無い。場所は訓練校のアスレチックのフィールドの後方である。

彼女はその中に足を踏み入れ、先に進むにつれて奇妙なほどに胃に痛みを覚えて、幾度か足を止めようとしてしまう。だがそんなストレスよりも強い意志が、彼女を強く前へ進ませた。

——今回の任務が終われば残る一週間は休養にあてられる。そしてエミリアは晴れて一時的な教官せんせいという立場から解放されるのだ。担当であるのは変わらないが、全ての世話は訓練校が行うので彼女の出番は殆ど無くなる。

そして訓練校を卒業すれば、^{キャリア}年季以外には階級も無い彼等は肩を並べることになり、モノを教えることは出来なくなる。

だから今日が最後の訓練となったのだ。数日前までは感慨深くなるのかと思っては居たが、こんな終わり方だとは想像もしていなかった。だがどうせ最後になるのならば、彼に教えておかなければならないものがある。

彼女はそれを胸に、やがて薄暗い林の中から前方に開ける明るい空間が迫るのを見て――。

瞬間、その前方から肉薄する強い気配を覚えて彼女は思わず横に跳ぶ。直後に脇を通り抜ける弾丸を知覚して、着地すると同時に近場の木に身を隠し、首を振って嘆息した。

「随分な歓迎だな」

だが今の場面を狙ったのは良い事だ。位置も頭ではなく心臓と言うのは、的確に殺しにきたと言う事だろう。最も、弱装カートリッジを使用したペイント弾であるために、当たれば痛い程度で済むのだが。

自然に太腿のホルスターに刺さる拳銃に伸びる手を制して、代わりに盾にする木の枝をへし折って適当な長さにして装備する。飛び道具がない事は非常に痛かったが、どちらにせよこの時間まで彼がぶっ通しで訓練を続けていれば、弾薬とて残り少ないだろう。

問題ない。

彼女は心の中で一つ呟いて、その瞳にささやかな殺意を瞬かせた。土で固められた大地からいくつか小石を拾って、投擲。だが反応は無く、身を乗り出して開けた空間をうかがってみると、衛士の姿は無かった。

彼女はそれから素早く横転して木の側面に身を隠す。その直後に、彼女が居た場所を弾丸が掠めて過ぎていく。そして丁度その先にある幹に紅色が散る――かと思いきや、表面が砕け、木片が周囲に飛び散った。

エミリアは思わず息を呑み、素早く身を翻して林の中を進む。開

けた円形の空間に添うように、衛士に背を向ける形で距離を取った。

——現在の衛士が実弾を入手することはない。そもそも実弾なんでものは支給品だし、商店では販売していない。そして勿論訓練校には置いては居ない。ならば一体どうやって？ エミリアは考えるが、背後からの発砲がその暇を与えなかった。

だがその強い気配や、背後から迫るに当たって鳴らす足音が隠し切れず、というか隠す様子もないが故に容易に察知することが出来る。だが、いくら疲弊していると考えても、エミリアに一泡吹かせるためだとしたら、その行動は余りにも大雑把過ぎた。

違和感。彼女が感じたものはそれである。

「一か八か、なんて大嫌いなんだがな……」

——血の臭いを覚えて、彼女は迷わず開けた空間へと飛び込んだ。彼女の後を追うように、射線が延びる。エミリアは足を止めずにやがて空間の中央辺りまでに到達すると、不意に視界の端に、赤黒い何かを発見する。木々に寄り添うように座り込む人の影。顔をそちらへ向けて、彼女はその身を硬直させてしまう。

「……ッ！」

木を背に座り込む時衛士は、迷彩服の腹部をどす黒い赤に染めて脱力していた。血の染みる大地は延びる膝あたりまで溜まり、まだ僅かな新鮮さを残している。注意深く見れば肩が僅かに上下しているのが分かるが——そう長くは無いだろう。

そこまですべてを理解して、彼女は折れた枝を投げ捨て、銃を抜く。回^ル転弾倉式のそれは気がつくとき長い間使っていた愛銃である。

彼女がそれを構えようとする間に、林の中から出てくるのは黒いロングコートの腹部、胸、腰のやや高い位置や両足、両腕に血のりのような汚れをつける帽子を被った男だった。

小銃を構え、彼はにこやかな笑顔でエミリアに対峙する。

「へ、へへ、俺はテキセーシャ様に手をあげたんだ。どの道終わしさ。ならせめてぶっ殺してやろうと思ったんだがな、逃げ回って、ちまちまと殺せもしねえペイント弾ぶっ放してよ、時間がかかった

まっただぜ」

「説明ご苦労。ただのケンカなら無罪放免で済んだのに、可哀想なのはどうかやらのオツムだったようだな。酷く哀れだ」

憲兵姿の彼は自己喪失でもしているかのようにへらへらと笑って肩を小刻みに震わせる。

——こんな事を理由に人に襲い掛かり死んで行く人間は少ない。最も多くは未遂で済むのだが、今回のように実際に犠牲が出るのはごく稀だった。

衛士の体力や技術を考えれば、ただの憲兵である彼には勝ち目は無い。だが発砲の隙や連続した訓練による体力消耗が勝敗を分けたのだろう。エミリアは考え、それから目の前の男の言葉を聞いて場面を想像し、ふっと一息分の笑みを零す。

「特攻していれば一瞬で済んだのにな。ったく——可愛げのある奴だ」

——数時間前の口論をすべて帳消しにしてやろうと思う私は、随分と甘くなってしまったと、自分でも良く思う。

今の彼ならば、その柔軟性も相まって十分任務で通用するだろう。最も、基本的な戦闘能力や状況対応能力が身についただけで、これ以降は単純な本人の才能や、潜在能力の開花が成長の問題となるのだが——大丈夫だろう。手放しでそう思えるようになっていた。

やはり幾らか情が移ってしまったのだろうか。

だがどの道、今の彼に応急処置でもしてやらねば、何もせぬ内に彼は戦えぬ身体になってしまう。それでは何も救われないのだ。

彼女は膨らむ怒りと、哀れみとを携えて男を見据える。彼は怯えた様子一つ見せず、慣れた様子で引き金を引いた。

彼女は身を翻して銃弾が飛来するであろう位置から離れ、応射。短い発砲音の直後、男の右肩に血しぶきが舞う。

「ああ——ああっ！」

「こいつは同情点だ。貴様の残念な頭に対するな」

エミリアは嘆息してから、銃をしまって男へと肉薄する。そうし

て跪いた彼の顔面を蹴飛ばして、大きく身体を反らした際に小銃を奪い、自力で解体できる部品までを全て解体しその場に捨てる。

それから彼女はポケットから携帯端末を取り出して、本部に連絡を入れた。

「こちらエミリアー」

本人確認の全てを告げた後、状況を説明し、処刑人を手配する。そうした後でようやく出る反応は、機械音声での『了解』の一言だった。

彼女は自身がその状況でやるべき事をすべてやり終えてから、膝を折り曲げたまま倒れて空を仰ぐ男の横っ腹を強く蹴飛ばした後、素早く駆け、衛士の元へと急ぐ。

彼の傍らに跪き何かを口にしようとする、その気配を察したのか、衛士の目は薄っすらと開いて、周囲を見渡すように瞳を動かして、彼女を発見した。

「この、世界に来て、あいつは狂っちゃったん、ですかねえ……」

エミリアは衛士の言葉を聴きながら応急処置に移る。

迷彩服のジッパーを引いて上着を脱がせ、その下に着る、既に機能しなくなっている模擬戦闘用の強化装備を脱がす。これは頬までを覆うタイツのようなものである為に、随分と苦労が必要だった。

まず傷口に負担にならないように前屈体勢にさせて、首筋からのジッパーを外して腰までを露出させる。すると引き締まった身体に、赤黒く変色する箇所が見えた。どうやら弾丸は彼の肉体を貫いているらしく、ひとまずは止血が必要なのらしい。

「オレ、明日の任務、出られますかね」

「この傷では無理だな。出血も尋常ではない。回復はするだろうが、とても送り出せるものではない」

上半身裸になる衛士に脱がした上着を巻き、縛り付ける。強い圧迫に激痛が走る衛士は小さく呻き、両それを耐えるようにズボン握る。苦痛に満ちる表情は最後に見た、あの全てを憎むものは一切無く、ただ弱る少年のものだった。

腰のククリナイフは鞘に納まったままであるのを見るに、恐らく彼はあの男を殺そうとしなかったのだろう。その理由は多分、身内を殺したくは無いというところだ。彼女は推測して、浅い呼吸を繰り返す衛士の頭へ手を伸ばした。

「いくら貴様でもあの程度の男に一発貫うとはな。残念な弟子だ」

「へ、自分で、堅実に行けつつたのに、ひでえや。それと、オレは弟子になった覚えは、ないです」

「臨機応変に……まあ良い。先は……その、アレだ。済まなかったな」

彼女は気恥ずかしそうに、ごによごによと言葉を濁しながら口にする。その頃になると酔いはすっかりと醒めていて、自分の言葉一つ一つ、彼への行動の一つ一つに、奇妙な恥ずかしさを覚えてしまう。この、彼の頭に乗せた手が一番の恥辱じみたものだった。

「貴様も未熟ながら考えたもののなのだろう。だが自分の命が危険な場合は、時としてああいった行動が必要な場合もある。だから、そうだな——」

そこでエミリアは気付く。

衛士の呼吸音が既に失せていることに。そして全身から力が抜け、傾く身体はそのままエミリアへと寄り添うようにして倒れる。彼女は驚いたように眼を見開いてから、静かに彼を受け止め、それからゆっくり寝かせると立ち上がった。

——背後には既に仕事を終えた処刑人が、正体を明かさぬ格好で控えている。

彼女はそれへと振り返り、淡々と告げた。

「彼を医務室まで運んでやれ。そして保健医に伝えてくれ。三時間で完治させろ、と」

「はは、随分と気が立ってますね。でもわかりますよ、あいつら、自分でやることもやらずに不満たらたらずすもんね。こんな奴等は、副産物使えても結局は変わりませんよ」

耐時スーツの発展型。肉体強化が安定し、途轍もない力、という

のが失われた代わりに9mmの拳銃弾程度なら防げる防御力を持つ、一般的なそれを装備している。目の前のそれは加えてフルフェイスのヘルメットをかぶり、武器も持たぬ身軽な格好で立っていた。

「処理は私で……、既に済ませたのか」

「え？ ああ、本部に転送させました。多分今回の事がきっかけで心理検査が入るでしょうね。心が脆いやつとか、悪い意味で壊れかけてるのとかは——」

「無駄口を叩くな。貴様はやるべきことをやればいい」

「はは、すみません。でもそいつには優しいのに酷いっすね」

「貴様は随分と優秀そうだから、湧く情も湧かぬ」

「ああ、なるほど」

男か女か分からぬ声で、軽い口調でそれだけを残すと地面に崩れて心臓を停止している衛士を抱え上げ、それは素早く駆け——林の中に姿を消していった。

エミリアは死体も何も無いその空間をざっと見渡した後、眼を瞑って、それから頭を強く掻き耑りながら座り込む。

強い責任感。激しい無力感。それらが彼女の精神を蝕んだ。

——なぜこんな事になってしまったのか。自分があんな事を言うてやらなければ彼はここに残りはしなかっただろう。そしてなにやら恨みを抱いた憲兵と出くわさず、このような大怪我をすることも無かった。

一方的に殺意だけを抱かれて、殺したくも、傷つけたくも無かった筈の衛士だけが死に掛けている。不条理だ。

だが、この世界ではその理不尽さが殆どを支配している。

数多ある死の一つだ。変わらない、全てにおいて唯一等しい終わりの一つ。

最も、まだ終わらない。終わらせるつもりなど無い。

エミリアはこの三週間で、随分とあの少年の事が良く分かったつもりだった。だが、想いを込めていたわけではなかったつもりだった。いつも通りに誰とも変わらず接していたはずだった。

別に愛しくなったとか言うわけではない。言うなれば、今まで決して失われないと何故か自信をもってそう考えていたものが、あっけなく散ったときの喪失感のようなモノが襲い掛かっていたのだ。祖母が――肉親が死したような、あの絶望感。世界の終わりかと思うほどの喪失感。

「たかが、三週間だ……」

だが、なぜだろう。この悲しみは。この胸の苦しみは。

衛士の顔が頭の中に浮かんでは消える。目頭が熱くなる理由が、彼女には分からなかった。

苦痛。任務で初めて仲間が死ぬのを見た時の苦しみ。見捨てなければならぬ状況でその選択をしてしまった時の、どうしようもない後悔。それらが脳裏に浮かんで、彼女の胸に突き刺さる。

だが、今彼女に出来ることは何一つとしてなかった。

仮にここで衛士に対する恋愛感情に気付いても、全てを凌駕する母性に目覚めても、彼を愛しい弟に見えてきても、世界は何も変わらず、衛士の命がどちらかに傾くわけでもない。彼女はそれを十分に知っていた。理解はしていたが――。

「慣れないな、これ、ばかりは」

衛士は生き残る。漠然とそう考えてはいるが根拠は無い。

あれほど血が失われていれば生き残ったところで障害が残る可能性が高いだろう。そして腰の位置に被弾したせいで、身体の機能がいくつかわれてもおかしくはない。

そもそも、生存確率とて非常に低いものである筈だった。

しかし彼女はただ信じた。それしか出来なかった。

首元がゆるいタンクトップは下着をつけぬ胸元を露にし、それ故に冬の強烈な寒さの大打撃を与える。しかしエミリアはそれを気にした様子も無く、ただ屈みこみ、頭を抱えて後悔し、衛士の生存を祈って、自身の責任に精神を蝕まれて、後悔し――を繰り返していた。

強い筈だった精神は衛士という隙を作り出してしまったせいで脆

く崩れる。そう考えると、とことんしてやられた、と彼女はくつくつと笑って――。

「ああ、そうだ。私は未だ甘ったれの大馬鹿野郎だな。こんな所でこんな事をしてなんになる？ 私らしくは無い」

――冗談ではない。たかだか十七、八の少年にここまで心を乱されて良いのだろうか。

無論、否である。彼女は心の中で声を大にして言ってみせた。

表情は、心無しか晴れやかで、なにか吹っ切れたかのような心持だった。が――。

不意に、携帯端末が着信を告げるように小刻みにポケットの中で震える。相手は誰か、おおまかな想像が出来た彼女は何かと思いいながら通話を受け入れる状態に持ち込み、耳に当てる。

電話の先の声の主は、動揺したような声色で疑問を呈していた。

『エミリア、彼の治療は――栄養剤でも与えれば良いのかしら？』

はじめてのおしごと

時衛士は組織からの寵愛を受けていた。別にそれは悪いことではないし、特別嫉妬される対象になるという訳ではない。そもそもそれを知りえる手段は無く、故に誰かが知り得る情報ではなかった。

エミリアがそれを知るきっかけとなったのは、つい数時間前の出来事が原因である。

致命傷を受け、その生命活動を停止した時衛士は治療を受ける前に傷を完治させていた。保健医がエミリアからの言伝を受けて彼の様子を見ると、傷跡も無く、ただ気を失っているだけであった。念のために身体検査をしてみるも、彼の身体は到って健康、強いてあげるならば疲労している程度であり、なんの問題は見られない。

勿論、時衛士が生命の危機に瀕したが故に『特異点』に目覚め治療能力が抜群に高まったというわけではない。あるいは任意のタイミングで任意の時間、任意の箇所の時間を巻き戻せる能力に目覚めたのかもしれない、という可能性も極めて低かった。

なぜならば、現在の時衛士は特異点に目覚めて然るべき機会ではなかったからだ。仮にその高みへ上れる才能があろうとも、それを左右する副産物せうさんぶつが無ければ何も始まらない。特異点はソレを肉体の一部とさせる事によって初めて到達できる位置なのだ。

だからこそ、エミリアは残る可能性をにらむ事が出来た。こんな事が出来るのはリリス以外には居ないし、他者、他の適正者が出来たとして、それをする理由が分からない。

この組織は何かを隠している。時衛士に対する何かを。そして彼に関わる者もまるで計ったかのように癖がある。その中で、前任の報告書レポートから見る試練内容で最も気になるのは祝英雄イワイヒデオだった。

彼はわざわざ罪を被った。その気になれば状況を、理由を説明して衛士と和解する方法とてあったのに、ソレをせずに一生彼に怨まれる人生を歩もうとしている。

理解不能だ、が——今回の任務で、より彼の、そして衛士の事が分かるだろう。

彼女はそう考えて、そっぽを向いて頼杖をつく衛士を、そして机に足を乗せ、組み、仰け反るイワイをそれぞれ流し見てから任務の説明を再開した。

「目標組織はネットワーク状に無数の”頭”を置き、一つが何らかの影響で使い物にならなくなっても大丈夫であるような構造だと思われるが、トカゲの尻尾切り、電源の冗長化のように、ある種の囷に過ぎなかった」

最も、その囷自体でも活動内容や重要性は変わらないために、万が一の手段を施行したと考えれば良いだろう。つまり敵の組織にはもう後は無く、残った一つの施設を破壊することが出来れば彼等にはもう打つ手が無くなり、抑圧組織にちよつかいを出したり、歯向かったりすることは二度と出来なくなる。

彼等の今回の任務はその組織の弱点や、構造の細部、警備の動きや装備などを図ってくることだった。が、”必要”であれば施設を破壊することが許可されていた。

「ちよつと待て、既に壊滅された施設があんのか？」

腕を組み、イワイが問う。上下関係の無い其処ではそれ故にエミリアが何かを指摘することも無く、静かに頷き説明する。

「単独潜入で任務自体は成功したのだがな、脱出口の選択ミスで囲まれ、その道中で消息を断った。生存の可能性は望めないだろうが、貴様等には奪われている副産物の回収も任務に加わる」

「いつの話だよ」

「つい二三時間前だ」

「じゃあダメだな。メンバーは大分前に決まっていたみたいだが、任務は後からか……適当だな」

イワイは嘆息し、それから退屈そうにたるんでも無い衣服の布を引っ張って正す。衛士はただ気まずそうに声だけを聞いて、窓も無い真っ白な壁を見つめていた。

「残る一人は貴様等の端末から随時送られる情報を受け、後方支援
バックアップとして動く。影の存在だ。いないと思っていたほうが良い。貴様等
がヘマをして死したとしても、そいつは即座に逃走を判断する」

「構わねえがそいつの装備は？ 火器ばっかだったらおっかなくて
仕方がねえからよ」

臆病者^{チキン}め、と彼女は冗談めかしく吐き捨てると、イワイはつられ
る様にくすりと笑う。衛士は着込む耐時スーツがポンチョからボレ
ロ型に進化していることに殺意を覚えることしか出来なかった。

——いや、確かにポンチョだと咄嗟の行動が取りづらいと文句を
言った覚えはある。だが、だからといってボレロなどと言う丈の短
い衣服を選択するのはいったいどこからの許可を得たのだろうか。

動き辛さは解消されたものの、これではかえってスーツがスーツ
として機能しない可能性が出てくる。ポンチョのように肉体を覆う
のではなく、着込む、というかこれは最早羽織るに近いものでは、
いつの日かのように弾丸を受け止めることは出来ないだろう。

ポンチョは肉体とソレとの間に隙間があった。だからこそ強い防
弾性能でも殺しきれない衝撃を彼が受けることは無かった。だが同
時に攻撃に転じ難いという弱点もあり、だからこそ彼は銃撃戦に持
ち込んだのだ。

そう考えれば、このボレロ型は攻撃に特化しているのだろう。柔
軟性、適応性が高くなり意思のままに変異するスーツ。これはその
傾向がより強いものだとは彼は判断した。

そんな彼を他所にエミリアは淡々と説明を続けた。

「耐時スーツを重ねて装備している」

「あ？ どういう事だ」

「近、中距離の人程度の大きさのものならば確実に捕縛できる、帯
状の耐時スーツ。これは肉体強化を及ぼし、また外套型の耐時スー
ツはある一定以上の衝撃を受けた瞬間に硬化する、防弾、防刃の効
果を持つ。ソレは加えて手甲^{てっぺんかぎ}鉤を装備する、完全近距離戦闘型だ」

「はっ、んな奴が後方支援^{バックアップ}ウ？ 面白え冗談だな」

「ソレには貴様のように、危機を力任せに脱する突破力は無い。その代わりに、貴様よりは十分に柔軟な作戦、選択肢を得ることが出来る。今回はそれでバランスは良いと思うがな」

「んならせめて拳銃でも持たせとけよ。三八口径でも、五〇口径でも良いからよ」

「火器は現場のものを再利用するように伝えてある」

「火器管制装置が効いてたらどうする。登録されてる利用者の情報と合致しなければ引き金すらも引けないシステムが向こうで完成してたらどうする？」

変わらぬ調子でイワイが咆えると、それを涼しげな顔でエミリアは受け流す。そのままやがてそういった質問を投げるようになる、それでも彼女はそれがどうしたと言わんばかりの表情で、腕を組み、言葉を続ける。

「どうした、怖気づいたか？ そんなもの問題の内に入らないだろう。使わなければいい。その上で最善の行動を取れば良い。一つの手段に拘ることは愚かなことだ、貴様もそう思うだろう？ イワイ」
嫌味たらしく紡がれる言葉に彼は短く舌打ちをしてから黙り込む。
エミリアはなにやら微笑を浮かべたまま腕を組んで、他に質問は？と告げた。

しかし何も無いらしく、二人は黙り込んでいる。エミリアはならば、と簡単なミーティングを終わりにしようかと思うと、イワイは横を向いて、なにやら衛士に話しかけていた。

「おいエイジ、何か無えのか？ まともなのは今回が初めてなんだろう？」

横を向いていた彼はそれで初めて我に返ったように前を向き、それからイワイへと顔を向ける。それから素直に首を振り否定を表すと、彼はつまらなそうに、そうか、と嘆息した。

「あ、そうだ」

その直ぐ後に衛士は思いついたように声をあげ、再びイワイへ向く。彼は何気なくそちらを見ると、強い眼差しで見られていること

に気付き、眉を潜めて目を薄めた。

「んだよ」

「気安く名前で呼んでんじゃねーよ。殺すぞ」

「わーったよ。これからヒデオって呼んで良いから」

「違う！ 平等性の問題じゃない」

「っせーな。なんて呼べばいいんだ？ ずっとてめえサマじゃ面倒なんだよ」

やかましそうに頭を掻くイワイはそれでも表情にどこことなく楽しげなものを潜ませていた。衛士がそれほど真剣に言っているわけではなく、黙り込んでいた気まずさを解消するためのきっかけである事を理解しているからである。

イワイの言葉を受けて真剣に考える衛士を、エミリアは滑稽だとくすりと笑って、手を叩き場を鎮める。リラックスは程よいもので良い。あまり気を緩めすぎてもいけないのだ。

「さっさと外へ出ろ。後方支援は既に向こうについている」
バックアップ

フルフェイスのヘルメットに、耐Gスーツのような強化装備。そして後ろの腰のウエストバッグのようになるホルスターにソードオフショットガンを収め、備え付けのレッグホルスターに自動拳銃を突っ込む。イワイの装備はそれに加えて手榴弾、ナイフ……それらは衛士と変わらぬものだった。

そして衛士は白い下着という薄着の上にタクティカルベストを着込み、ボレロ型の耐時スーツを羽織り、肩から機関拳銃を提げる。わざわざ取り付けたレッグホルスターに拳銃を備え、タクティカルベストのポケットに予備弾倉、ホルスターに手榴弾などを備える。

彼の荷物はそれだけでは終わらず、背負うバッグは救急医療セツト、そしてC4が持てる限り持たされている。身軽そうなイワイとは違い、一見するだけでは衛士はただの荷物もちに見えてしまうのだが、作戦上、イワイが道を切り開く為にそれは仕方が無いことだった。

二人は転送された先の街並みをビルの上から見下ろして、短い、あるいは大きな溜息をそれぞれつけた。眩いばかりの夜景、ネオンが目痛いその街並みは、既に深夜だというのに人の流れが絶えることを知らないようだった。

屋台に寄る複数の中年男性、酔っ払ったのか肩を抱いて心許ない足取りで往来を通る若者たち。仕事帰りなのか足早にそこを通り抜けようとするサラリーマン風の男。嫌がる女性二人に話を掛けるまだ若い男二人。

海を渡り大陸へと到達する。ついて直ぐの国は、そういった平和なものだった。

最もそれが一番良いのだろう。衛士はそう考えてから、傍らのイワイへと顔を向けた。彼は確かに未だに憎い。だが任務にまでそれを持ち越すつもりは、彼には無かった。

それを察する彼は満足そうに頷いてから、ポケットから携帯端末を取り出し、施設の位置、ここからの距離や方向を確認してから背を向け、衛士を誘った。

『ああ、お前、肉体強化の作用無いんだっけ』

耳に装着する骨伝導型イヤホンの無線越しにイワイの声が聞こえる。衛士はそれを片手で側頭部に押し付けて「悪かったな」と言うのと、軽い笑い声が聞こえた。

ちなみにそのイヤホンは簡単な無線機となる上に、携帯端末と無線接続することで設定した言語を自動的に翻訳して使用者に声を届けることが出来る。無論、これは受信機であるために、こちらの声を翻訳して相手に届けることは出来ないのだが。

言いながら衛士が首から提げる暗視装置ナイトビジョンかけようとするのと、どこからその動作を見ていたのか、イワイはすかさずそれを声で制した。『バーカ。まだ下が眩しいだろ。んなモンつけたら閃光手榴弾フラッシュバン喰らったみてえになんぞ』

「ああ、そうか。つかお前はヘルメットなんか被って、どうやってつけんだ？」

衛士と肩を組んでイワイが高く跳躍する。衛士は言った後に舌を噛まぬように口をつぐむ。が、まるで乗り物に乗っているかのような安定感で彼の身体は宙へと浮かび上がり、容易に目先のビルの屋上へと到達する事が出来た。着地音を出来る限り殺するように着地と同時に屈みこむのだが、衛士はそんな意外さに僅かな感動を覚えていた。

イワイはそうしてから安堵するように息を吐いて衛士の問いに答えてやった。

『メットだけだと本当にただのメットだが、やっぱ携帯端末デバイスのお陰で、お前のつけてるイヤホンとか、暗視装置ゴーグルと同じ効果が出る。ま、この携帯端末だって全部組織からのデータ転送があつてこそ機能してんだろがな』

——衛士が彼とこうして気易く会話が出来るのは、一度絡まれているところを助けられ、また再会したというワンクッションがあつた事が大きかった。それがイワイの計算なのか、ただの偶然なのかは誰にも分からないが、少なくともそれは今回の任務を行うに当たって非常に幸運なことであると言えた。

それから幾度かビルを飛び越えようと、ようやく暗視装置の出番がやってくる。肉眼では無限と思うほどの闇が衛士達を飲み込んでいた。故にイワイはヘルメットの中で眩き音声で命令を認識させ、衛士はゴーグルを装着することで、白熱灯で周囲を照らすような視界を得ることが出来る。

ゲームや漫画などでよく見る緑色の視界を想像していた衛士は、コレは良いと歓喜しながらイワイに担がれて大地へと降り立つ。まるでちょっとした段差から降りるかのような僅かな衝撃の後、衛士は自身の足で狭い路地に立ち、そっと周囲を見渡した。

『今の内に便所は済ませて置けよ』

「舐めんな。来る前に済ませておいた」

『いい心がけだ。この近くに隠し通路がある。そこから侵入して地図マップの細部を埋めるぞ』

「んで？」

『主要施設をぶっ飛ばす。表向きは新エネルギー研究・開発所だからな。コンピュータを統合してる部屋を破壊すれば使い物にはならなくなる』

「表向きって、裏じゃ何してんのよ」

狭い路地は民家に挟まれている場所である。故に深夜だから人気もせずに、安心して行動する事が出来た。しかし最もイワイが携帯端末と周囲とを確認しながら、それぞれ壁に存在する扉を吟味しているところを見るに、この民家のどれか、あるいは全てがただ建っているだけなのかもしれない。

人造石の壁。比較的新しいものだ。最も街に近い部分だからそうなのかもしれないが、だからといってここは問題ないと素通りする場所ではなかった。

やがてイワイは一つの扉の前で立ち止まって指を鳴らす。だが布素材に包まれる指はあの甲高い音を鳴らすことは無かった。

『銃の密造、密輸。それが何処に流れるか分かるか？』

「暴力団とか？」

『正直知らん。だがそんなところだろうな。リリースもこういった施設を執拗に潰したがるしな』

「……なんか、お前らしくなくて気持ち悪い」

『知的だろ？ てめえサマは最初っからは人を馬鹿にしすぎなんだよ』

イワイは携帯端末をポケットにしまってドアノブに手を掛け――思い出したように振り返る。衛士は驚いたように肩を弾ませてから、なんだよ、とぶっきらぼうに問うた。

『携帯端末、落とすなよ？ そいつがなけりゃ、いくらリリースだつててめえサマの場所すらつかめねえんだからな。地下に戻れば別に良いがな』

「落とさねえよ。つか、地下でもそうなのか？」

『詳しいところは知らんが、そうらしい。俺あそーゆー所がムカつくから地下に戻ったらずぐ部屋に投げ捨ててる』

「……オレも実際、任務以外じゃ持ち歩かねえな。使うところねーし」

『それがいい。ま、注意はここまでだ。後は状況に応じて理解しろ
としか言いようがねーからな。行くぞ』

おう、と衛士は短く返事をする。イワイはちらりと背後をうかが
ってそれに頷いてから、ドアノブを捻り、押し開く。が――強い抵
抗が、そもそもの開扉を拒んでしまう。そこでイワイは初めて鍵の
存在に気がついた。

衛士はそんな彼を哀れな目で見ると、イワイはヘルメットの下で
引き攣った笑みを浮かべて、

『ま、こんな事もある』

それだけを口にして、ポケットから携帯端末を取り出した。

――幸い、侵入した付近には人の気配は感じられなかった。

鉄板で囲まれた、人一人がようやく通れるような四角い通路は迷
路のように所々で枝分かれをしていて、一人出来ていけば高確率で
迷子になってしまいそうな場所である。これでは前回潜入した人間
がわざわざ何キロもある地下通路を通りたがったのも仕方が無い話
に思えた。

サブレッサー

衛士は減音器を装備した拳銃を、イワイはその強度面ゆえに信頼
性の高いレミントンM1100スロットクの銃底を省略しグリップを木製に付
け換えるなど、独自のアレンジを施したソードオフを、それぞれ手
にして前へ進む。

衛士はイワイから数メートル背後から、イワイはまるで自宅の廊
下を歩くような気軽さでその前を、周囲を伺いながら進む。そうす
るとやがて狭い迷路は終わりを告げて、ややある段差を降りると広
い廊下に到達した。

左右に広がる通路は眩い照明が周囲を照らすが故に、衛士は暗視
装置を外している。イワイも既にそうしているのだろうが、やはり
表面では何が変わったのか良く分からなかった。

硬い廊下はどうやら人造石で固められているらしい。この下にさらなる空間があるのか気になったのでイワイに尋ねると、彼は静かに首を振った。どうやら存在しないらしい。

『一応注意するが、お前は喋るなよ？ 声が響くからな』

イワイが言うとおり、彼は何もつけていないが為にその静寂が支配する空間に、僅かなものでも良く響く。ヘルメットをするイワイにはその心配は無く、衛士はそれ故になにやら”ずるい”と感じていた。

だが彼の言葉は至極正論であり、衛士には反論が出来ない。だから素直に頷いて、変わらぬ距離を保って後を追って行った。

足音を殺す為に移動速度はきわめて遅い。衛士は持たされる荷物が多い為に、歩くだけでも必要以上の精神力をすり減らさねばならなかった。だが仕方が無いのだ。行動の一つ一つが命に関わり、自身気がつけば良い事なのだから――。

『あー、面倒くせえな。敵が近づいてきた。進路変えるぞ』

考える中でイワイの声が頭に響く。それはまるで頭の中から沸くような声音であり、彼は言葉と同時に足を止め、少し奥の曲がり角を睨んでから、引き返すか否かと迷うように重心を前後に揺らしてから、不動の姿勢をとった。

――殺すか。

僅かな間の逡巡の結果、そういった答えが導き出される。

衛士の拳銃を使えば限り無く無音での殺害は可能だ。しかしそうすれば近いうちに潜入は確実に発覚^{ばれ}る。死体の処理をする場所は無く、ならば進路を変更するしかないのだろうが、ここまでは迷路を出てから一本道だ。引き返すにしても時間が無い。また迷路に戻ったとしても、この警備のタイミングでは何度もこれを繰り返す必要があるだろう。下手をすれば入り口を選択しなおさなければならなくなるほどである。

ならば殺害し、迅速な行動で任務を完遂すべきだ。

遠まわしな施設破壊の任務は比較的簡単だし、ヘルメットのシー

ルド部分に表示されるマップには副産物に埋め込まれる発信機が内部に潜入してようやく反応したので、位置も簡単に分かる。

ならばもう面倒な思考は止めた。

『減音器、勿体無えから外しとけ』

イワイはそれだけ残り軽い足取りで曲がり角の手前へと移動して深く屈み込むと、散弾銃を腰のホルスターにしまい、代わりに黒塗りのコンバットナイフを取り出した。

一度、衛士の拳銃を借りようかと考えたが、どうせなら完全な無音の方が良いと考えたが所以である。

息を潜め、相手の距離を測る。生体反応は既に数メートル手前まで迫っていた。地図とその位置とを重ね合わせたが故に理解でき、この上なく便利なこの技術には感謝するしかないだろう。最も、こんなものが無くともやるべきことは出来るだろうが――現実での任務の難易度などは極力低い方が良いのだ。

道具は便利なほうが良い。仕事は簡単なほうが良い。

便利なモノに慣れたら、それが失せたときに苦労をするだろうと誰もが言う。だがそんな物は過去に、自身が活躍できたあの日に依存しているだけに過ぎない。イワイはそう考えていた。

――曲がり角から銃口が覗く。イワイは息を呑み、僅か一瞬の、狙うべき隙を待つ。敵が彼を知覚するよりも早く、かつ、知覚せぬ間に見せた急所を。

銃身が現れる。同時に、相手の靴先が角から出る。足音が響き、だがイワイは焦ることも、緊張を覚える事も無い。ただの競技のようスポーツに、最初の一点を入れて士気を湧かせる為に尽力するリーダーのような心持で、彼はただその一瞬を狙っていた。

一秒は一秒として、二秒は二秒として流れる。決して引き伸ばされない時間は、それ故に敵の横顔を曲がり角から露出させ――僅かに腰を浮かせるだけの動作で、イワイは行動を終了させた。

警備のために徘徊していた彼は小銃を手から零れ落とし、激痛の為に悲鳴すら出せずに瞬く間に意識を遠のかせる。脇腹よりやや下

の腰の辺り――その腎臓を一刺しされたが故に数秒の内に膝を崩し、いつの間にか目の前に立つイワイに、何も出来ずに身体を預けた。彼は落ちた小銃をそつと床に置き、さらに倒れる男を引っ張って曲がり角の影に寝かせる。尋常ではない出血の為に血痕が引きずった跡を残すが、今はそれを気にする必要も、処理する時間も無かった。

『やいエイジ。俺の経験則上、ざっと見て侵入が発覚するのが今から五分後ツツ所だろうな。先に必要な場所にC4仕掛けて、副産物回収してから逃げる。こんな流れでどうよ』

「ったく、こんなことになるだろうとは思ってたけどよ……」

暗い色の迷彩服に、同色系の迷彩柄のヘルメットを被る男を見下ろしてから、小さく溜息を吐いた。

悲壮な死に顔だ。苦しみに満ちたその表情を見ると陰鬱な気分になるが、自分がこうならない為にはこうしていかなければならない。死んだことは深くお悔やみするが、だからといって同情するわけでも怒りするわけでもない。

正確に心情を申すのならば「至極どうでもいい」のである。

『どうやら軍が関係してるみてーだしよ、さっさと行くぞ』

イワイは血を拭い、ナイフを鞘にしまってからさっさと先に行く。衛士はそんな初めて聞く情報に驚き、

「ちょ、どういふ……ああ、もう」

大声を出せぬ状況ゆえに、ただ黙って後を追っていった。

まず目指すはココから先にある機械室だが――その扉の前には三人の警備兵、あるいは兵隊が居る。

イワイはその口元に楽しげな笑みを浮かべながら、腰のショットガンに手を掛けた。

はじめてのおしごと。

「……ったく」

何度目かになる溜息は、絶えることなくこれからこぼれ出るだろうと思われた。

鋭い三発分の銃声は数秒経過した現在でも未だ耳の奥に余韻として残り、さらに血と硝煙の強い悪臭が鼻腔に突き刺さって、鼻の機能が早くも麻痺しそうだった。

胸が、心臓が異常なほどにバクバク落ち着く事無く跳ね続ける。まるで短距離を全力疾走でもした直後のような鼓動の高鳴りは、それ故に衛士の呼吸を乱し、彼はそれを必死に隠そうと握る拳銃のグリップに力を込めて、出来るだけ視界に床を入れないようにする。

だが、まるで雨上がりの道を歩くように弾ける水の音が、必然的にその――頭部が弾け跳んだ三分分の死体を想像させる。真赤に染まる味気ない灰色の床。グロテスクに垂らす脳みそがぐちゃぐちゃに乱れて吹き飛び壁に張り付き、故に原形が分からないから気味も悪くないだろうと気軽に考えていた衛士の油断を吹き飛ばした。

――これでは血の足跡が道しるべとなってしまう。迷子にならないようにパンくずを落として歩くようなものだ。

目の前の、短いショットガンに散弾を再装填するイワイに悪態の一つでも付きたくなるが、その余裕は失せていた。彼の気分は、僅か数秒の惨劇でこの上なく悪いものと移り変わったのだ。

イワイは血を全身が汚れぬ、そのヘルメットの頭頂部から足裏まで浴びぬ綺麗な姿のまま、両開きの大きな扉を睨み、ショットガンを構える。だが無意味だろうと腰のホルスターに仕舞いこんでから、呆然と虚空を見つめる衛士へと声を掛けた。

『構造から考えて機械室はここじゃないだろうな。だが三人も警備についていたんだ、下手な場所じゃないことも確かだと考えて間違いは無い』

だが思考する時間がそうあるわけでもない。イワイは端的に考えを告げ、それからようやくその瞳に生気を宿して自身を見る衛士に手を伸ばし、催促する。

『ここからは別行動だ。お前はここを確認しろ。重要施設なら吹っ飛ばせ。だが多分……まあいい。単独行動中は指示を仰がずテーマで考えるんだ、いいな?』

衛士は彼の行動を察して震える首で小刻みに頷きを返してから、救急医療セットの入るバッグに機器が巻きついているC4を幾つか突っ込み、残ったソレが入るバッグを彼へと投げ渡す。ナップサックを受け取るイワイはそのまま肩に掛け、最後に、と軽い笑いを漏らしながら衛士に聞いた。

『この時限信管は五分で作動する。その、そもそもの制限時間を作動させる方法は?』

「た、単純に……爆薬、この爆弾の安全装置を外す。それだけだ」

『ああ、それでいい。作動させるとしたら今から五分後だ。これ以降、何が起ころうと俺と連絡を取るのは多分無理になる』

「な、なんでだよ……?」

瞬間——不意に、首筋に奇妙な緊張を覚える。嫌な予感がして振り返るが、そこには何も無く、ただの曲がり角があるだけだった。暫くそちらに銃口を向けてみるが物音一つせず、その影には誰も居ない事をあらわすようにイワイが、何をしている? と問うた。

衛士は首を振り、気のせいだと返すと、イワイはただ頷き、続ける。

『こいつは半分罠だ。ま、昨日の今日だから……話はこれでお終いだ』

イワイは背を向け片手を上げると、まるでチーターか何かのような俊敏な跳躍で瞬く間に廊下の奥へと姿を小さくし、そして衛士の視界から消え去った。

残された彼は鍵穴の無い、それぞれのドアノブに鎖を巻きつけて南京錠で施錠するだけの扉を前にして、その濁った空気で大きく深

呼吸をしてから、拳銃を構え、その鎖へ向けて発砲した。

鉄扉に一つの弾痕が作り出され、鎖の一部が弾け飛ぶ。銃弾は跳ねて衛士の脇に転がり、自身の重量に引っ張られる鎖はジャラジャラと金属の擦れる音を鳴らしながら落ちて、やがて足元でとぐろを巻いた。

ドアノブを捻り、押し開ける。扉の重さだけで何の抵抗も加わらぬそれは容易に開き、衛士を迎えた。

目の前に広がるのは漆黒の闇。それに被さるのは背後の廊下から漂う血の臭いとは異なる腐臭。鼻にまとりつくような、濃厚なソレだった。

——ここが何の部屋なのか、何に使用されていたのか、そして何故嚴重に警備されていたのか、ただそれだけの情報で大まかな想像がついてしまった。だが、それ故にここに入らないという選択を望めるわけではない。イヤだからしたくないなんてのは子供の言い訳だ。

彼は首を振り、大きく一步を踏み出した。

ブーツの硬い底が高い音を一つ鳴らす。同時に付着する血が周囲に飛び散り、水玉模様を作り出した。

衛士は拳銃から機関拳銃に装備を持ち直し、それから暗視装置ナイトビジョンに顔を掛ける。途端に暗闇は消え失せ、部屋の端にある黒いゴミ袋がまず眼に入った。

これが異臭の原因だろうか。考えてすぐさま否と首を振った。

たしかにこれもそうだろうが、これだけが原因ではない。このようなものが複数あると考えていいだろう。

彼はもう一步踏み込んだ。そこでようやく身体は完全に室内に入り込み、廊下からの照明を背に受ける形となる。

——広い空間だった。打ちっ放しのコンクリートは殺風景であるものの、床や壁、それらに黒くこびり付いた汚れがそれ故によく目立った。少し歩けば人造石の太い円柱が立ち、横を向けば、そして少し奥を見れば同様にそれが床から天井へと伸びる。

見上げた顔を下に向ければさび付いたナイフや、ゴミ袋。それから零れる黒い液体や、空の葉莢などが目に入った。

なるほど、と既に落ち着きを取り戻し始める心で口にとすると、不意に背中越しの光が絞られるように狭く、少なくなっていくて——ばたんと、扉が閉じる音と同時に室内は完全な闇に包まれる。だが暗視装置を装備する衛士にとって闇は然程問題ではなく、重要なのは、その直後にかちりと何かが閉まる音がしたことであった。

鍵は——無いはずだった。少なくともこの扉には。だからこそ鎖で施錠していたのだが、なら何故今この音が響いたのか？

衛士は自問し、それに答える。

それは何かに反応して機械が作動させたからなのかもしれない。扉が閉まったのも、何かがきつかけになったのだろう。

ではその何か、とは何なのか。

それは分からないし、考えても無駄だと衛士は悟る。途端にイワイが言った「これは半分罠だ」という言葉が、今になってようやく理解できた。

進めば視界に入り込む、黒いゴミ袋から飛び出る尖った白い棒状の何か。だがそれは完全に白いわけではなく、ドス黒く変色した肉がこびり付いていた。

前に進めばまた、腐臭や血の臭いが強くなる。

嫌な予感がした。落ち着いたはずの胸は、また一度大きく高鳴り、緊張を促す。衛士は機関拳銃を強く握りながら周囲をうかがい、躊躇う事無く足を進ませ続け、やがてその最奥——扉に対して正面の壁へとたどり着いた。

強い人の気配。そして壁を背にして座り込む、まだ新しい——死体。否、と衛士は目を見張り、大きく心臓が跳ねるのを感じた。

「やっと来たか……」

目の前のソレの呟きは、静寂故に良く響く。

焦りか、緊張か、それとも何かの感情に動かされているのか、呼吸が乱れ、衛士は苦しくなる胸の痛みに耐えるように胸を鷲掴んで

歯を食いしばった。

——衣服を纏わぬ寒々しい裸姿。しかし彼の格好はそれだけには終わらない。

白い肌には赤黒く細胞が壊死しているような鋭い傷跡が無数に散り、内出血の箇所も多々見られる。だが一番目立つのは、その左腕が肘先から存在していないことだった。

全身にこびりつく血は既に乾いているらしかった。だが止血の為に巻かれる、その左腕の包帯は未だ湿り気を持ち、また目隠しでもするかのように包帯を巻かれ、短く刈られた金髪だけが頑健そうに生えていた。

「あんたが、昨日の……？」

声が震える。そんな自分に、心の底から嫌気が差した。

——覚悟をしたはずだ。もう大丈夫だと思ったはずだ。そもそもこんなことは、容易に想像できたはずだ。なのに、何故これほど怯えているのだろうか。何故何も考えが浮かばないのだろうか。

「ああ、スミスだ。よろしくな」

下半身の衣服はそのままでした。靴は履かされていたが、縄でぐるぐるに巻かれて行動は出来なさそうであり、またその太い首に付けられる首輪から伸びる鎖は、彼よりやや高い位置に杭を壁に叩きこんで固定されていた。

満身創痍という言葉が丁度似合う彼はそう言って、いや、と首を振る。

「どっちにしろもう、さよならをするがな」

衛士は何も言う事が出来ない。こんなときに、何を言えば正しいのか分からなかった。

そんな彼を他所に、スミスと名乗った男は抑揚の無い声で問うた。
「すまないが状況を教えてくれないか？」

「ん、ああ。オレが知る限りでは——」

衛士は聞かれるがままに彼へと説明する。まず彼が捕まった後の話と、衛士らが潜入してからの展開。そして現状と、自身らが課せ

られた任務の内容を。

スミスは頷き、相槌を打ちながら、やがて説明が終えると短い礼を後に、なるほどと呟いた。

「リリスの調査不足……いや、俺を捨て駒にしたのか。真実は、まあ、知らねえが俺のミスじゃないんだな」

「あんた、こんな所でこんな事になって、怒らないのか。リリスがあんたを捨てたようなもんじゃないのか？」

「関係ねーよ。逃げ切れなかったのは、俺の技量の問題だ。あんな所にケツ拭く世話までされてたまるかよ」

「でも、任務の成功確率だとか、そう言うのを計算した人選——」
「グチグチ言うなよ面倒臭い。ここには何も無いぜ？ あるとしたら、柱に貼り付けられた死体と、俺ぐらいだ」

スミスは嫌気が差したように言葉を遮ると、それから唯一自由になっている右手で頭を掻き、手を払うようにして衛士にどっかいけと合図した。

「俺の右手側の隅に人が通れそうな通気口ダクトがある。お前はそこから出て行け」

「あんたは、どうするんだよ」

「はっ、まさかこんな怪我人に手伝って欲しいのか？」

眉尻を下げ、同情じみた表情で彼を見る衛士は、スミスが自身の姿が見れないのを分かっているのにも関わらず、つい反射的に首を振ってしまう。そんなんじゃない、と荒げる声は、純にスミスを思っているものだった。

「まだ生きてるじゃないかよ。なんでそんなに、諦めたがるんだよ！」

「んじゃ何か？ お前は俺を助けた上で任務を達成できる自信があるのか？ それとも仲間に全部任せっきりにして、お前は横道に逸れて自慰に耽るってか？」

「違う……だけど！」

「まだ動ける。だがな、完全に足手まといだ。傷は大したこと無い

が、腕が酷い。目が見えないのは……ま、案外大丈夫だがな」

口元に笑みを浮かべる彼は、何故か自信満々にそう言い切る。衛士はなぜこの状況で、生すらを諦めたのにそれを口に出来るのか、不思議でならなかった。

スミスはそれも構わずに、衛士が疑問符を浮かべているのが分かって、理由を口にした。

「俺は耳がいいんだ。ま、あいつ程じゃないがな……」

「あいつ？」

「いや、忘れてくれ」

首を振って、齒を噛み締める。そうして何かを思い出したように強く頭を掻き毟って、畜生と吐き捨てるように呟いた。それから小さい声で悪態を付き続け、怒りするように強く握った拳を、背にする壁に叩き付ける。

鈍い音が響き、厳しくしかめた表情で、スミスは衛士へと顔を上げていた。

「お前は未熟だ。自分で考え、行動する必要がある。だから聞くが、仮に俺が生きていた場合の事を、任務の中に加えられていたか？」

辛辣な声で、先ほどの軽い口調とは裏腹な真剣な口調で彼は問う。だから衛士はしっかりとした眼差しで、見えても居ないのが分かるのに首を振り、否定を口にした。

「いや、これはただの感情だ。その上、今分かったことだが――オレはどうやらあんたにここで死なれると、オレが見捨てたみたいになって寝覚めが悪い。それだけの理由で、あんたを生かそうとしているらしい」

「は、なら遺言は受け付けてるか？」

「残念ながら、今は自分の最後の言葉を考えるのに精一杯だね。遺言は、あんたが自分で伝えることだ」

「そりゃ遺言になりやしねえよ」

にかつと口元に笑みを浮かべたかと思うと、壁に手を沿え、力を込めて腰を浮かす。スミスは腰を壁に押し付け、膝を曲げ、ずり上

がるように立ち上がる。彼はそのまま足元の鎖を指差して、外せと衛士へ促した。

衛士はそれがなんだかどうしようもなく嬉しくなって仄かな笑みに頬を上ずらせ、頷き、拳銃を抜いて鎖へと銃口を向け、発砲。続け様に首もとの鎖をも吹き飛ばした。

甲高い発砲音が抑揚をつけるように空間に響き渡り、スミスはうるさいと悪態を付きながら、そのまま屈伸運動をして大きな溜息をついた。

「お前のせいで、生きなくなっちゃった」

立ち上がると彼の背丈は衛士より頭一つ分抜けている。目と左腕を失い頼りないと思っていた姿が、ただ立っただけでこれほどまで頼もしくなるのかと思うと、なにやら強い興奮を覚えてしまう。

それから衛士は銃をしまい、ボレロを脱ぐ。どちらにせよ今回の任務では不要であるし、どうせ使うのならば試験的な情報^{データ}が必要だ。どうせなら、と思いスミスに渡してその旨を伝えると、彼はしぶしぶと言った風に頷いて、四苦八苦しながらそれを着込んだ。

右腕を通し、左腕を中途半端に通すと、その先は力なく垂れる。

丈は彼の腹辺りまでしかなく、どうみてもこれが耐時スーツだとは思えなかった。いわば子供用の衣服を無理に着込む大人だ。

「これはイメージで形を作る”アクティブ”な耐時スーツなんだよ」

「は、なんだそりゃ」

「いいから何か考えて」

「ああ、んじゃ——身体にまわりついて、右腕を作れ」

彼は仲間内で冗談でも言うかのように軽く言う。だが同時にそれを確かに考えているらしく、ボレロの裾が風になびくようにゆらりと揺れると、瞬間。

その裾はうねる様に腰まで延びてスミスの綺麗な形で割れる腹筋を包み隠し、どう引っ張っても前が閉まらなかった筈のそれは、ジッパーでも締めるかのように容易に体の前面をその漆黒の布で包んでいく。

さらに腕部分は同様に伸びて指先までを包む。また左腕も、まるで中身でも入っているかのように動き、その指、爪の食い込みさえも完全に再現して形作っていた。

最後にタートルネックのように首輪の下を通して首を包み隠し頬骨まで伸ばして動きは停止して――上半身だけのタイツを着込んだようなスミスの格好は、先ほどのボレロ姿とは大いに異なっていた。完全な耐時スーツ。衛士はそれを目の当たりにして、想像以上の活発さに感嘆の息を吐いた。

「おお……こいつは、なんとも。すげえとしか言い様が無いな」

「んで、ついでにホラ。愛銃になる予定だから丁寧に使えよ」

ぎこちない動作で両手で拳をつくり、開きを繰り返して感覚を理解する。間も無くその動きからはぎこちなさは一蹴されて、左腕さえも滑らかに動くようになる。

どちらにせよ衛士であればこれほどまで早く使いこなす事は出来なかったであろう。これが出来るのはスミスが何度も死線を潜り抜けたが故であり、さらに確かな適正者としての資質、実力があるためだった。

ようは慣れと経験であり、その為に衛士の選択はさほど間違ったものではないといえた。

「いや、ナイフの方をくれ。銃は苦手なんでね」

スミスは首を振って銃を手の甲で除けると、ナイフを催促する。

衛士は頷いて鞘ごと彼に手渡すと、嬉しそうに頷いて、彼に背を向けた。ニヤけた表情は途端に引き締まり、冷徹な男の顔へと移り変わる。

「スミス……まずはどこへ？」

「敵陣中の土手っ腹をぶっ飛ばしに」

「なっちゃいねえな」

イワイはショットガンホルスターに差し込んで、大きく身体を伸ばして筋肉を解す。

彼がそうリラックスする部屋の中は無数の肉塊が散乱していた。頭部を、あるいは腹部を、ないし肩などを激しく欠損する死体の数々は、どれもが原形を留めず床に倒れ、あるいは椅子、机に突っ伏していた。

そこはどうやら制御室であるらしく、入って左側には巨大なモニターが壁の前面に広がり、そこから机が段になって後背へと連なる。机には一定の間隔をあけてコンピュータが並んでいて、だがそこには人は居ない。そこに居たであろう人間は皆、イワイに手をかけられて絶命しているのだ。

彼は設置し終えたC4爆薬の、まきつけられる機械を操作すると簡単に制限時間が表示され、五分と言う数字が点滅する。彼はさらに二つ三つ置いてやろうかと思ったが、長細いプラスチックケースに入るそれは一つだけでも絶大な爆発力を持つ。

故にそれだけで、ここら一体は爆ぜて失せるのだ。被害はそれだけに終わらずに周囲に甚大な壊滅を成し遂げて見せるだろう。ならば、さらに加えるのは単なる爆薬の無駄というわけである。

「どのみち、ここさえ破壊できりゃとりあえずは任務達成、か」

制御室さえ破壊できればこの施設のどこかにある工場は当分稼動できない。ならば後日に来る憲兵たちに掃討^{すべて}を任せば問題ないのだ。

だから次は副産物^{へつり}の回収となるのだが……。

ヘルメットのシールドに表示される地図^{マップ}では、どうやらこの近くにソレがあるはずなのだが、カバンの中も、机の中も、ロッカーの中にも、またパソコンの本体の中も探したけれど見つからない。

地図を拡大しても、この部屋の中にあるという漠然とした情報しか得られない。

ならばどこにあるのだろう。イワイは考え、やっぱりな、と嘆息した。

――振り返れば、机の上に立つ一つの影。物音もなくそう出来るのは、ただそれだけで一定以上の実力があるように思えた。

ソレはつなぎのような戦闘服を着込み、柄から並行して刃が二枚

生える、二枚刃の特殊なナイフを一本装備してイワイを睨んでいた。殺気を漲らせ、正気を失っているのが一目で分かるその瞳は、本当にイワイを捉えているのかさえ不確かである。が、彼へ飛び出して来るであろう事は確実であった。

イワイが考えたのは、誰かが試験的に副産物を装備していると言
う事。

嘆息を一つ。そしてそれがどうやら真実であるらしいことを、彼は目の当たりにして納得した。

「次元刀そいつも試用中なんだがなア……」
スプリット

スミスの装備は耐時スーツに次元刀。そしてその次元刀は現在開発中であり、支給品のひとつに加えられる一步手前の状態であった。それを実戦でも確かに扱え、また不具合が出ないかを確かめる為には試験が必要となる。

つまり、次元刀の使用も彼の任務の一つであった。

だが見る限りでは、次元刀は血のりなど一度も付着していなかったような鋭さをもっている。恐らくそれはスミスが一度もソレを使用しなかったということであろうか。あるいは、刃自体が敵に触れずとも敵を切り裂けるからだろうか。彼は使い勝手が悪かったから使わなかったのだろうという可能性に希望を添えた。

イワイにはそんな開発中の次元刀の効果は大まかに理解できているものの、実際にどのようなモノなのかを認識できてはいない。そもそも、適正者では無い人間が副産物を装備した際にどのような事が起こるかさえもわからなかった。

故に彼は、今この状況に緊張をしていた。

目の前の敵は、明らかに自我を喪失しているからだ。

だからもう一度、深い溜息を一つ。

似合わねえなど呟いて、しまったばかりのショットガンを抜いて構えた。

散弾銃の反動は大きい。だが彼の耐時スーツがあれば片腕で発砲を行ってもその衝撃が、一ミリたりとも銃を後退させる事は出来な

い。またそれ故に銃自体に強い衝撃が襲い掛かっても大丈夫であるように、彼はその強度に信頼を置かれるものを選んでいた。

つまり彼にとってその装備が何をもたらすのか。簡単に言えば、散弾銃の速射が可能となるわけである。

最も、セミオートショットシェルの散弾銃と言えども次の散弾が薬室に送り込まれるまで約〇・五秒が必要である。一対一でのこの戦闘では、その瞬間、さらに再装填リロードの隙が大きな問題点だったが――イワイは特にソレを気にした様子もなく、さらにレッグホルスターから拳銃を抜いて、左右にそれぞれを構えた。

「テメエの可哀想な頭をふっ飛ばしてやるぜ」

はじめてのおしごと？

「なあエイジ、煙草持ってねえのか？」

「まだ未成年なんでね」

「……なんつーか、生真面目だなあ。日本人だろおまえー」

「あんた、今まで日本語話してるじゃないか」

いいや、とスミスは否定する。衛士はくだらない冗談だと吐き捨ててから、彼の言う事が嘘であるとは一概に言いきれないことに気がついた。

もし副産物ぶつぽんの全てが組織からの情報提供や操作によって稼動していたら？ その情報の転送やらを介するのがこの携帯端末デバイスとしたら？ さらに衛士がスミスに渡したのはこの上なく使い勝手が良い物を、と彼自身が望んだ耐時スーツだ。他の、単純な機器や道具と同調、ないし効果、機能を共有することなどは簡単であるはずだ。

もし、もし仮にそうであるならば彼がその耐時スーツを着た時点で、衛士が耳に付ける簡易無線機と同様の機能を持っていたもおかしくは無い。つまり、彼の、そして衛士の言語はそれぞれ自動的に翻訳されているのだ。

そう考えればスミスの言葉におかしいものは何一つなく、さらにまた新たな情報、耐時スーツの機能が知れたわけだ。

衛士は感心したように声を上げると、先行するスミスが疑問を呈した。気にするなと一蹴ダクトすると、彼は軽く笑って前進を続ける。

酷く狭いと思われた通気口はステンレス鋼の板で繋げてあるような造りだった。人一人がそこを通ればボコボコと歪んで音を鳴らすのが、然程大きいものでもないので気にはならない。直ぐ下には、この板を隔てて廊下があると思われるのだが、人の気配が一切しないのを見るに、どうやらそうでもないらしい。

あるいは単に、イワイが全ての歩兵を殺害せしめたが故だとも考えられた。

「なあ、エイジ」

そんな事を考えていると、不意に尻を左右に揺らしてほふく全身を続けるスミスが声を掛けた。衛士が返事をする、彼はまるで雑談でもするかのような気軽な疑問を投げつける。

「お前、これが初めての任務だったよな」

「ん？ まあ、そうだな。前はなんか台無しにされたし」

「は、そりゃめでてえな」

口元にやにやと笑みを浮かべてくつくつと笑う。衛士はなにやら馬鹿にされているような気がして靴裏に拳を当てると、短い謝罪の後、

「んじゃあよ、帰ったらうまい飯でも奢ってやるよ。日本人の口に合うかどうかはわかんねえけどよ」

「いや、でもオレまだ訓練兵なんだよ。勝手な外出は、何も言われて無いけど多分許可は――」

「訓練兵？ 地下に来て何ヶ月よ」

「さ、三週間……」

「は、へへへ……はっはっは！ マジか、お前。三週間？ 表では何かやってたか？」

「ただの平凡な高校生だった」

「ハイスクールの学生か！ こいつぁ面白え！ 俺はまさか、こんな尻の青いガキに目え覚まさせられたのかよ。将来有望だな、少なくとも俺が地下に居た頃はこんな事なかったぜ！？」

スミスはご機嫌に笑って床を叩くと、激しい打撃音が耳につんざき鼓膜が破れそうになる。衛士は静止を促すように靴裏を二度三度打撃すると、スミスはようやく笑うのをやめて、肩で息をしながら呼吸を落ち着かせる。

それから暫くして左右に分かれる道に到達すると、スミスは動きを止める。衛士はその顔面を靴裏に押し付けてからようやく停止したことに気付いて前進をやめるとすぐに指示を仰ぐ声が響いてきた。「どっちに進む？」

衛士はポケットから携帯端末を取り出して、簡単な操作で地図を表示させる。複雑な構造の中に赤いマーカーが四つ表示され、その内二つが自身の位置を、そして遠く離れた位置にある一つが恐らくイワイなのだろう。そしてもう一つが、同様にイワイの位置で動き回っている。

この一つが恐らく後方支援^{バックアップ}なのだろうと衛士は理解して、それから地図を見る。このまま右方向に進めばボイラー室や発電施設が、左に進めば倉庫があるらしい。破壊が目的である現在では、前者を選ぶのが好ましかった。

「右だ」

地図を消そうとする瞬間、不意に衛士の遥か後方に新たなマーカーが出現したのを垣間見たが――勘違いだ、と衛士は自分に言い聞かせた。

この状況で新たなモノが出てくるはずが無い。仮に出てきたとしてそれは副産物^{副産物}の反応だ。敵であるはずも無いのだ。

スミスは言われた通りの方向に進み、衛士はその後に続く。やがて肘や膝が鈍い痛みを覚え始めるが、大したものではないので気にはしない。

「なあ大将、廊下が見える通気口を発見したんだが」

いつのまにか二人称を変えるスミスはご機嫌に口を開く。衛士はそれに違和感を覚えながらも、まだ上半身しか通路に入り込めていないスミスに、其処から出ようと提案する。

彼は間も無く頷いて、手探りでそこに覆いかぶさる蓋のようなアミのネジを探し、ナイフの切先を突き刺してネジを回転させる。すると思惑通りにそれは緩み始め、簡単に一つがはずれ、彼はまた次に取り掛かって――。

「大将、ここは存外に雑な造りだ。まずこの通気口がそうだし、ここだって蓋をしてるだけだ。」物量”の問題さえなければ、任務は簡単だ」

「物量？」

「ああ、殺しても殺しても湧いてくる。装備も段々変わって俺たちを相手するのに適応してくるしな。ま、それでも相手にゃならんがな」

スミスはそのまま気にせず穴に頭を突っ込んで滑らかに廊下へと落ちていく。左腕で廊下を受け止め、それから跳ね上がるように床を弾いて空中で反転し、二本の足で立ち上がる。衛士はその後に続いて足から落ち、スマートに通気口から脱出した。

スミスは既に壁を背にして待機をして、衛士は倣うように対面の壁に背をつけて周囲をうかがう。拳銃を片手に、あるいはナイフを片手に刃りを伺い、衛士は先導するために前に付いてスミスを誘った。

廊下は侵入した際に出た場所と、外観の違いは無い。打ちっ放しの人造石は冷たい印象を覚えさせ、その殺風景な道には血痕、空薬莢の一つも存在しない。その代わりに――その突き当たりにある曲がり角から、ガスマスクを装備する三人の兵士が現れた。

「化学兵器……？ いや、んな物使うはずが無い」

化学兵器は毒物だ。自分の家にそんなモノを撒き散らす馬鹿は居ないはずだ。

「だが、もしココを捨てるつもりだったら？」

スミスが答える。それは疑問系だったが、半ば答えが導き出されたものだった。

「既に他の、新たな施設が出来上がってるって事か？ それじゃあ、またこの任務は無駄足になったって事なのか？」

「かもしれない。だがそうじゃないかもしれない。単純に、毒物を振り撒いても問題が無い場所っつーだけかもしれないな」

衛士は腰の専用のホルスターに突っ込まれている砂時計を反転させて銃を構え、即座に一発。鋭い反動が腕に伝わり、下着姿のむき出しになる腕から滴る汗が弾けて舞った。

響く発砲音――だが直線上に居るガスマスクの男たちは微動だにしない。衛士はさらに発砲。だが反応は見られなかった。

普通に考えれば防弾チョッキか何かを装備していると考えていいだろう。相手が持つのはライフル――の下に、ポンプアクションのように筒が装着している銃。恐らく見たとおりに、ライフルに加えて投擲発射器の機能を持つ銃火器だろう。

衛士はさらに一発、今度はその顔を狙って銃撃してみるが――彼等は微動だにせず、さらにその銃弾が直撃した気配は無かった。外れたかと考えるのが最もだろうが、彼等とは二〇メートル以内の距離だ。

数千発分の弾薬を無駄にして得た技術はこの程度で外れるはずが無い。衛士はその自信をにじられたような気分に陥るが、その感情をそのままに表現するよりも早く、先の発砲で何かを覚えたスミスがその身を弾くように飛び出していた。

姿勢を低くして素早く駆ける。その速度は一秒、否、その一步を踏み出すごとに加速される。そうして瞬く間にスミスの一閃が横並びになる一番端の男へと襲い掛かるが――刹那。彼の肉体はまるで強い突風でも受けたかのようにくの字にへし折れたかと思うと、足を掬われたように浮かび上がり、そのまま天井を仰いで背中を地面に叩き付けた。

距離は最後に到達した位置よりもやや後退した場所で、彼は痛みで喘ぎながらも立ち上がって、前方を向く。衛士はそんな彼に続いて後を追う、やがて傍らにたどり着くと、ガスマスク姿の三人は何かを確認したかのように、揃った動作で銃口を衛士らに向ける。

直後に、全く同時のタイミングで引き金を絞り――その寸前に振り上げて撃ち放つ弾丸は、真ん中の男の脇腹を掠めて過ぎた。が、やはりその程度では彼等の足止めする事は出来ない。

故に、すぐさま降り注ぐ弾丸の嵐は間も無く全身を襲い散らして――。

「――っがあ！」

正面の壁に背をつけ静止するスミスが、止めていた息を吐き出すように呼吸を乱して、肩を上下させる。それから少しして、何があ

った、と訝しげな顔で問うと、衛士は慣れた様子で答えてやった。壁を背にして冷静な態度を見せているが、心臓は激しく高鳴っている。やはりこういう事は、いつになっても慣れはしないのだろう。

「俺の副産物だ。あんたには分かるだろうが、相手は今の出来事を知覚できていない」

「何をやったんだってーの」

「ある地点から五分間の時を戻した。つまり、俺が砂時計を使用した瞬間から五分間を体験し、その五分が経過した瞬間に、砂時計を使用する直前に時間が巻き戻るって事」

だから先ほどは一体何が起こってすっ転んだのか。衛士はそれを彼に尋ねると、スミスは顎に手をやり、空いた手で握るナイフを逆手に持ち直してから口を開いた。

「わけがわかんねえっつーのが正直なところだ」

感覚的には走っている最中に突然、拳大の鉄球が腹部目掛けて高速で投げ込まれ、衝突したというものだ。だが勿論鉄球なんてものは其処にはなかったし、そもそも質量を持つ何かが襲い掛かってきたわけでもない。だからといって空気を圧縮して放つような大掛かりな装置は見る限りでは存在していない。

ならば一体何が起こったのだ？ その疑問は再びスミスの答えへと巻き戻る。

衛士はその返答に頷いて、思考を始める。

——鉄球と表現したと言う事は、その程度の硬質を持っていたというわけだ。ただの風をこれほどまでの威力に引き上げるのは大分難しく、仮にここでそれが出来たとしても、機械の稼動音を隠しきれはしない。

ならば一体どうやって？ 衛士はそうに疑問を浮かべてから、この施設は何なのか、さらに何が関連しているのかを考える。

ここは新エネルギーの開発・研究所だ。だが裏では銃の密造、密輸を主立って行っている。

ならばスミスが受けたのは強烈なゴム弾かと思われたが、彼が受けた衝撃の直後、さらに数秒後にもゴム弾はおろか何かが放たれた様子はなかった。

では何に関わっているのか。衛士が聞いた話では、かつて組織を裏切ったエミリアの師の息が掛かっているらしかった。だがそれも今では過去形で――だがその間にこの組織が何を理解し研究して得たのかはわからない。

ただの適正者ならばこれほどまで問題視は出来ないだろう。だが彼は『特異点』と呼ばれる特殊な能力を副産物無しで作動させる異能力者なのだ。そんな事が出来る人間なのだから、その”特殊な能力”が一体どうやって起こされているのか、大まかにでも理解できていてもおかしくは無い。

「なら、その線で行くか」

衛士は一先ず、能力研究が行われていたという体で、さらにある程度の特異能力を使用できる人間が居るという前提で、行動を起こすことにした。

前例によれば空気の弾丸を作り出す、或いは衝撃を瞬間移動させる、ないし空気を固めてその空間に固定させる能力だ。

慎重に行って見よう。衛士は腰の砂時計に手を掛けて、拳を握り、スミスに合図した。

「反撃開始だ。適正者の技を見せてやろうぜ……！」

すかさず発砲。今度は弾丸から目を離さずに経過を確認する――と、銃弾はガスマスクの男から数メートルほど手前で突如失速して、そのまま殺虫剤でも吹き付けられた蜂のように力なく落ちる。耳を澄ませば、弾丸が床を鳴らす小さな音がかすかに聞こえた。

これである程度の能力の種類の幅を狭められた。失速したということは衝撃を受けたと言う事ではないだろう。強い摩擦か何かによっての作用としか考えられない。だとすれば能力は――持っていることとすれば――空気を操作するものだ。それも大量のモノを操ることは出来ぬ未熟者。侮ることなかれ、であるが、慎重に行き過ぎるの

もまたやりすぎだ。

適度に慎重に。そして行ける時に行くのだ。訓練で学んだ大切なことはそれである。

衛士は砂時計を反転させようとした手を垂らして、それからタンクトップから伸びる腕を眺めてから、防御力に些かの心配があると考ええるも、どうにもならない事だからと諦めた。

しかし——この、障害物も無いただ真っ直ぐな空間で、一方的な銃撃を受けるこの場所でこういった攻勢が取れるのだろうか。衛士の未だ未熟な脳では、ただ一つの方法しか思い浮かばなかった。

タクティカルベストのポケットに手をつ突っ込めば存在する、棒状の手榴弾。名前は『焼夷手榴弾』で——。

「こいつを使う。投げたら思いっきり逆走しろよ？」

強行突破、という言葉が最も適切であろう。相手は未だ能力の有無性を見極めようとしている最中だ。衛士らが既にその能力を見切っているなどは夢にも思わないだろう。

だからソレを逆手にとって無理矢理通り抜ける。作戦としては、作戦と言って良いものかも知れぬ思い付きの、雑なモノだった。

スミスは手元の手榴弾と、そして衛士から伝えられた敵のおよその能力とを交互に頭の中で想像してからなるほど、と手を打ち、間もなく冗談めかしい罵声が飛んだ。

「少しは人の身になれってんだよ」

相手に怪しまれぬように拳銃の弾倉を空にするほど射撃を続けて、やがて空発が二度続く。衛士はわざとらしい舌打ちの後に間髪置かず、手榴弾の安全装置を引き抜き、投擲する。

「この姿で突っ込むんだ。あんたも我慢してくれ！」

スミスが背後の方向に一目散に駆けるのを横目に見ながら、彼自身も敵に背を向けてうづくまる。

——網膜に焼き付く閃光。宙に舞う手のひら大のそれを中心に凄まじい光が廊下全てを覆い尽くして、爆発。施設を揺らがす凄まじい衝撃が大地を振動させて、間もなく爆炎が周囲に飛び散る。轟炎

が、まるで液体のように廊下に流れて広がり、手榴弾があった位置を中心にして凄まじい炎に包まれる。

身体が吹き飛びそうになる衝撃に翻られて、息が出来なくなるほどの熱が肉体にまわりついた。目を開ければ粘膜が全て吹き飛び眼球が乾くだろう。このまま炎に突っ込めば、全身が焼け爛れて重度の火傷になりそうだ。

衛士は溜息をつきながら拳銃の弾倉を入れ替え、また機関拳銃に持ち直してから立ち上がり、振り向き様に走り出した。

——そういえば合図を決めていない事を思い出したが、まあ、大丈夫だろう。彼なら絶妙なタイミングで加勢してくれるはずだ。

目の前に炎が迫る。衛士は構える機関拳銃の引き金を絞りながら、歯を噛み締めて飛び込むようにして前進した。

火に肌が触れる。強い熱が瞬く間に皮膚を溶かしてしまいそうな灼熱を覚えるが、どうという事は無い。予想以上に予想通りだっただけである。

激しい振動が肩を叩き続けて鈍い痛みが走り続ける。発砲音が絶えることなく響き、手榴弾の爆発の余韻も相まって頭がおかしくなりそうだった。

——応射が来る。

それは煙の中で発射炎を見せるが、天井を、あるいは壁を向くものであり、衛士を狙ったものは一切無い。強い動揺の表れだった。さらにこの爆炎の中では、その微弱な能力も役立たずだろう。

重くなる足を必死に前へとせかすと、やがて前方に影が現れる。

衛士は壁に背を付け、身を屈めて、いつの間にか離していた引き金を指の腹で撫ぜ、絞る。途端に飛来する銃弾は瞬く間に影から血液を吹き立たせていた。

まず一人。

何かが割れた音の直後に影は倒れる。衛士はさらに移動してその倒れた影の横に移動して、煙の中で喚き散らす影へと発砲。横腹から首筋まで銃弾はそういった撫ぜるような射線を描いてその肉体に

突き刺さり、間もなくそれは大きな音を立てて、周囲の煙を吹き飛ばしながら倒れていった。

さらに二人。

衛士は息をつく暇もなく最後の一人を探すが、位置から考えているべき場所にそれは居なかった。

煙の中に現れる影は存在せず、周囲を探す衛士の背後に、それは現れて――刹那。太い腕は素早くその首に絡みつき、間髪おかずに首筋に突き刺さる鋭利な刃物は一瞬にして彼の生体活動を強制的に終了せしめた。

最後の三人。

鈍く揺らぎ、緩慢な動作で前のめりに倒れる。傍らに倒れたソレに衛士は肩を弾ませて驚いてから振り向くと、鼻筋までを耐時スーツで覆って簡易マスクを作るスミスは、ご機嫌に手に持つナイフを振ってみせた。

「ったく、こんな事で動揺する奴等に殺されたって考えると泣きなくなるぜ」

「ああ、助かったよ。ありがとう」

「何、安いもんさ。どの道お前ならどうにか切り抜けただろ？」

スミスが居なければいけないなりに他の手段を選ぶか、彼が居ない分の事を考えてもう少し行動を変えただろう。だから彼の言うとおりに言えばそうなのかもしれないが、少なくとも無傷で終えたとは到底思えなかった。

故に、衛士はそんなことはないさ、と首を振り、先へ促す。

「次の爆発はこんなもんじゃないからな」

「はは、おっかねえな」

イワイの瞳は正確に敵を捉えていた。さらにその動きを予測し、銃口を向け、発砲した。

だというのに――敵の動きは散弾を上回る速度でそれを避けて見せて、攻撃は当たる気配を見せない。

彼は咄嗟に机の影に身を隠すと、その直後に頭の近くにあるパソコンの液晶ディスプレイが三分割されて吹き飛び、細かな残骸を頭に被せる。イワイは素早く立ち上がり、机を乗り越えてそこから跳躍するように机の並ばぬ通路へと飛び込む。その最中に散弾ショットシェルを装填し、着地と同時に振り向いて発砲。

上方に伸びる影は敵が跳躍したことを意味していた。イワイは再び散弾が無意味に虚空を貫いた事に舌を打ち、そのまま出入り口へと駆け出した。

——敵は、素早いという言葉が甘く聞こえるほど速かった。イワイは彼が行動を開始してから一度たりとも正確なその姿を視認することは出来ていない。攻撃も一度も当たらず、だが相手の斬撃もイワイに触れることすらない。

状況的に考えれば、相手が使った次元刀スプリットの能力が知れたイワイの方が幾らか有利に見えたが、実際のところはそうでもない。

敵の動きは避けるイワイについてきている。それは相手が成長しているというわけではない。イワイが疲弊してきているという事だ。疲れれば観察眼にもミスが生まれ、引き金を絞る力さえも弱まってくる。銃の反動を抑えることすら難しくなるが故に、彼の銃撃はその精度をさらに引き下げてしまうだろう。

つまり、これ以上戦闘を長引かせるのは得策ではないのだ。

この状況で幸いといえるのは、他の兵隊が加勢に來ないことであるが、そんな事でさえイワイにとってはほんの些細なモノと思えるほど、彼は困窮していた。

肉を切らせて骨を断つという言葉がある。イワイは一度それを覚悟したものの、実際にそれが出来ずにいた。理由としては、単に臆しただとか、死ぬのはイヤだからだとか言う情けないものではない。斬撃が”時間差”でやってくるからである。

ナイフを振るうとする。そうすれば斬撃はその瞬間に肉体を切り裂くだろう。だがあの次元刀は違う。瞬間的に斬撃は肉体を切り裂き、相手はその三秒後にその肉体があった場所、切り裂いた箇所に

次元刀を振るう。あるいはそこを切り裂いたのにも関わらず、直ぐには傷が出来ない。鋭い生傷が現れるのは、それから三秒後の事だった。

つまりは時間差だ。こんなもの、予測できるはずが無い。

だが勝算が無いわけでもなかった。大きな隙が現れるのだ。

まずは切り裂かれた後に、実際にその場所にナイフを振るわなければならぬと言う事。これは必ずその位置に移動するということがかつていたために非常に有利だし、また切り裂かれて三秒後に傷が現れるのも、致命傷を貰う直前に相手に牙をむくことが出来る。考えよう、あるいは状況次第では倒せないことも無いだろうが――やはり、何よりもあの速度が問題だった。

肉体は無意識にリミッターをかけられているというが、それが外れた状態が今の敵なのだろう。

酷く厄介だった。

だが、いつまでもこうしているわけには行かない。イワイは腹を決めて、大きな溜息を後に、一向に部屋から出てくる気配の無い敵に痺れを切らして再び中に突入する。

――どちらにせよこの状況では情報など無駄なのだ。結局は極シンプルで単純な戦法が勝利に最も近い位置にある。

脇目もふらずにただ前だけを睨んで、跳躍。瞬く間に正面の壁に肉薄するその身体を反転させて、壁に足をついて着地する。身体は屈むように縮まりこんで、そこを弾くように彼は入ってきたばかりの扉目掛けて跳ぶ。身体は軽く反って宙を舞い、壁へと特攻する黒い影を、彼は認識した。

それを見て思わず頬が綻びそうになる。

――これほどまで、思い通りに事が進むのが嬉しいと思うのは生涯で初めてのことだった。

口が無意識に、『ばかめ』と言葉をつむぎ出す。構える散弾銃は、既にその影へと狙いを定めていた。

「馬鹿が、適正者を舐めんな」

引き金を絞る。強い衝撃が腕に伝わり、肩を殴られたかのような強い痛みが襲い掛かった。既に、耐時スーツを使用しているのにも関わらず肉体は多くの疲労や衝撃を蓄積しているらしい。

だがこれで終わりである筈だった。どちらにせよ、終わるのだ。イワイの腹は既に決まっていた。

影は散弾を視認し、避けるように高く跳び上がる。そして敵の行動に追いつけぬ無数の鉄球らは無様に避けられ壁へと迫撃して、その一つが、近くに設置されている機材が巻きつき二つのプラスチックケースに詰め込まれたC4の一つを貫いた。

瞬間、イワイの肉体が未だ宙を飛んでいる最中に、膨張する爆炎が瞬く間に部屋の中を満たし始め、間もなくそれに彼も巻き込まれて――。

凄まじい衝撃が施設を揺さぶり、壁に亀裂をいれ、叩き割るかのように崩壊させる。建物は無残にその身を崩して跡形もなく崩れ落ち、崩壊はとめどなく行われ、僅か一瞬の爆発は周囲の半径約五〇メートルの建物を余す事無く瓦礫へと変貌させた。

はじめてのおしごと

棚のような巨大な箱の外装はスチールで出来ているらしい。そしてどうやら、それこそがいわゆる変電機らしかった。故にこの部屋は変電設備が整う場所であり、ここを破壊できればこの組織の電気系統は使い物にならなくなるわけである。

衛士はそこに二つほど、部屋の端と端に爆薬を仕掛けて時限信管を作動させる。

次いで、その部屋から連なるように存在する扉を開けると、下へと降りる階段があった。だがそれは地下に通ずると言うわけではなく、半階分を降りるような場所だった。そこにはさらに廊下があり、突き当たりに鉄扉が通路を塞ぐように現れる。照明はなく、故に暗く暗かった。ボイラー室とプレートを掲げる其処から漏れる湿気が、周囲の人造石を黒く濡らしていた。

スミスはそのドアノブに手を掛け、衛士は銃を構えて警戒する。イワイのように生体反応を察知する機能を携帯端末は持っていないのがやや不便だったが、スミスが居ると言う事はそれ以上に心強いものだった。

彼は合図し、頷くスミスはノブを捻り、引っ張った――瞬間。

凄まじい振動が施設を揺るがした。身体が上下に激しく揺れ、視界がぶれる。

まともに立っていることさえも困難になる揺れに衛士は壁に張り付く形で何とか耐えた。地響きが腹の其処に響いてきて、緊張や興奮により呼吸は乱れ、現状を把握し得ない。

天井からばらばらと落ちてくる砂を払って、やがて落ち着き始めるのを確認した。凄まじい地震だと思われたが、この揺れ方は違いうだろう。衛士は直感的にそう感じた。

「こいつは爆破の衝撃だ」

中途半端に開いた扉は先の地震のせいで押しても引いても動かな

くなる。スミスは諦めて嘆息して周囲を窺ってから、ナイトヴァイジョン暗視装置を装備する衛士を促した。

「爆破……C4しか無いが」

「そいつが原因だろう」

「なるほど、ならさっさと脱出しないとな」

長く見積もっても、イワイと分かれてから未だ十分程度しか経過していない。だが制限時間は五分であり、さらにその行動時間も加え、多く見積もって十分。だから、ここを出なければならぬのはイワイから分かれてから十五分程度が経過した頃合だろう。

衛士が扉の影から中を伺うと、やはり思ったとおり人は居らず、衛士は先行して中へと身体を滑り込ませた。スミスは後に続き、背後を警戒しつつ扉の手前で待機する。

衛士は壁に張り付くようにしてある巨大な箱型の装置を発見し、薄ら寒い空気に身を震わせながらも、爆薬を手にしてソレに近づく。天井から地面に伸びるパイプは近場にあるタンクのような機材に突き刺さり、あるいは縦横無尽に床に迷路を作り出している。

衛士はそれを避けながらも、制御装置であるだろうそれへと近づき、バッグの中からC4を取り出して先ほどと同様に設置をし、ものの数秒で完了する。

これで仕事は大まかな終わりを見せた。

副産物の回収はイワイが行ってくれただろう。先ほどの爆破から見るに、既に脱出をしていると考えて間違いは無いはずだ。

幸い階段上の扉は開いたままである。道は地図に従って引き返せば戻れるだろう。衛士は携帯端末を取り出しながら、扉の前で待機するスミスの肩を叩いて道を戻り階段を駆け上って変電室へと到着し、変電機に取り付けた機材を簡単に操作して、制限時間を作動させる。

これで地下のボイラー室が爆発した数秒後に、ここも同様に爆発するはずだった。最もその数秒と言う概念は無く、ただ誘発するよ

うに発破されるかもしれないが、最早それはどうでも良い事だった。

携帯端末から地図を表示させて確認する。どこまでも一本道である通路は珍しく近くの道の途中から左右に分かれていたが、それは頭上の通気口ダクトで選択した通路であった。故に、まっすぐ進めば倉庫へ、左に曲がれば道のりは長いが出口へ繋がる丁字路だ。

素早く変電室からも脱出して、スミスを誘導しながら先へ進もうとするが、そんな彼の考えなどを見透かしたかのように口元に笑みを作る彼は、既に衛士の半歩後を正確な足取りでついてきていた。「どのくらいで脱出できる？」

「脱出口を通らないから、オレが入ってきたまともな出入り口に向かつて五分以内には行けると思う」

しかも、それは長く見積もってであった。もう敵に気を遣わなくても構わない状況であり、先手必勝が定石となる現状だ。ならば瞬発力では衛士らが圧倒的に有利であるし、不利であるのも地の利くらいであろうが、今では然程問題にはならない。

道を曲がり、走り曲がり角で床を蹴飛ばすように身体の向きを変えて更に駆ける。その直後に、待ち伏せでもしていたかのような五人の、ヘルメットに迷彩服姿の男たちの後姿が視界に飛び込んだ。

音に気付き、彼等は一様に衛士らへと顔を向けるが――それよりも早く、衛士の機関拳銃を火を吹いた。

素早い発砲。一度の発射炎で敵の胸に赤い華が散り、次の一撃でもう一人の左肩が大きく弾けるように揺れる。さらに一発放つと、それは踊るように身体を揺らして膝を崩した。

足は止めず、更に肉薄する。動揺する彼等の応射は全て脇を通り抜けて当たる気配を見せない。

スミスの一閃が煌めいて男の首を搔っ捌く。その間に衛士は続様さまに二人の顎を銃弾で吹き飛ばしていた。

血飛沫が霧となって空間を覆い、鉄の味が口一杯に広がるのを覚えて、彼等はそれぞれ唾を吐き捨てた。床に倒れる、瞬く間に誕生した五体分の死骸にそれらがふりかかり、ぴちゃぴちゃと血だまりを靴裏で弾きながら、素早くその場を後にする。

彼等が足を止めたのは、その直後のことであつた。

「なっ……?!」

少し低い天井の照明は小刻みに明滅していた。埃が空気中にこれでもかと散布して、衛士は思わず咳き込み、それから手のひらで口元を覆いながらソレを、この状況を理解しようとする。

右手側の壁が崩れて道を塞ぎ、さらにそれより奥の天井が崩落していた。巨大なコンクリートが瓦礫となって一本しかない通路を封鎖せしめているのだ。崩れた壁は、だがしかしそこすらも瓦礫で埋もれているらしく外気が漏れ出すことは無い。照明が辛うじてついているのは幸いかもしいないが、些細なことに過ぎなかった。

「おい大将、何があつた」

距離や地図とを見比べれば、この先にスミスが閉じ込められていた部屋があるはずだった。そうすればどちらにせよ、最低限の逃げ道は確保出来るのだ。だが今はそれすらも出来ない。思考はそれに囚われて、徐々に空白に染まりつつあつた。

スミスは答えぬ衛士に痺れを切らしたように慎重に前進し、それから足元の大きめの瓦礫に躓いて転ぶ。そのまま身体を山となるそれらに衝突させて、突き出る鉄筋で左腕を貫くが、そこは空洞であるが故に、彼自身が傷を負う事は無い。

それから手探りで瓦礫をなで、なるほどと彼は理解した。

――衛士はそこでふと、無線機能を使用していないことに気がつく。半径十メートル以内ならば自動的に周波数を合わせて送受信をしてくれる優れものであるこの簡易無線機は、離れすぎると携帯^{デバイス}端末で簡単な設定をしなければ発信してくれないのだ。

衛士はそれから手早く端末を操作してイワイを呼び出し、耳にかける無線機を側頭部に押し付ける。

しかし反応は無く、耳にはただのノイズだけが響いていた。

おかしい。無線機の故障だろうか、衛士は眉間に皺を寄せながら、再び地図を呼び出した。

衛士からやや離れた壁の向こう側に二つのマーカー。最後に見た

動き回るような気配は無く――。

「いや、待てよ。おいおい、マジか……っ！」

ここから距離にして五〇メートル程離れた、崩壊した壁の向こう側。廊下を塞ぐようにして崩れた壁は明かに外側からの衝撃によってこの惨状が起きたと言う事を示している。さらにこの地点でこれほどの壊滅を受けているのだ。これより先、恐らくイワイが居る場所から爆発が巻き起こったと考えて間違いは無だろう。

この推測がもたらす結果は、衛士がそれを言語化して理解するよりも早く、その抽象的な想像が彼に絶望を与えていた。

「大将、どうした」

「道が塞がっている上に、爆発の中心に仲間が居たらしい」

「反応は」

「まだ生きてるけど……」

ただの布切れ一枚の防御力を数値に換算するとすれば、一である。だが彼の耐時スーツはマイナス二、三〇程に到達してしまうだろう。単純な打撃などによる耐衝撃はどうであるか分からぬが、刃などによる斬撃には滅法弱い。ただ耐時スーツが切れるだけならまだしも、ただ皮一枚分決れるだけで、その下の肉体までもを切り裂き骨までを露出させる、深い傷を作り出すのだ。

攻勢の肉体強化の効果だけを見れば数ある耐時スーツの中でも一、二を争う出来だろう。だが装備すれば完全に肉体と一体化する上に、その脆弱と言う言葉を幾つ重ねても足りぬ防御力だ。

故に、まだ生きているかもしれない。だが後に死ぬだろう。間も無く。そもそも今の時点でさえも死しているのかもしれない。この情報は飽くまで副産物の反応だ。彼の生き死にをどうとかいうわけではないはずだ。

「なら一足先におさらばするか？ 転送は？」

「出来ないのを知ってるだろ。あんたでも」

転送は空の下で要請しなければ実際に行われない。それを体験したわけではないが、幾度とも無く教官から教えてこられたのだ。

敵の巢で来ない助けを求めることなぞ見苦しいこと極まりない、と。

ならばどうすればいい。引き返すことは論外だし、だからといってココに留まるわけにも行かない。しかし前に進むことは出来ず、状況は酷く窮鼠している。時間も無いし、思考する余裕も無い。考えたことが、思いついた端から零れ落ちていくのを感じていた。

「ならココを爆破して前に進むか？」

無論、論外だ。

「ここはより脆い場所だ。下手すりゃ崩落に巻き込まれて死ぬ」

——この施設に上階は無いのは確かだ。だから、選ぶとすれば、唯一の道が存在する。

故に迷うことすら、その必要すらなく、彼は短い舌打ちの後、スミスに伝えた。

「右側の壁だった瓦礫を取り除けば外に出られる筈だ。そうすれば道はもう関係ない。イワイを回収して、さっさとずらからう」

短機関銃のストラップを肩に掛けて、衛士は警戒に瓦礫に飛び乗って、まず初めの小さい軽い塊から手にして、放る。だがそれだけでも十分すぎる重量であり、体力が尽きるか、あるいは仕掛けた爆薬の爆発によってここがさらに崩壊するかは時間の問題だった。が――。

スミスが衛士の肩を叩く。振り返ると、彼はばかだなあとしたり顔でさらに頭を叩いて、衛士を制するようにして前に出た。

背後で無数の足音が迫る。スミスはそれを尻目に左腕を形作る耐時スーツを鋭い錐状に変異させたかと思うと、そのまま素早く瓦礫の隙間に突き刺した。スミスは衛士に背を向けたまま、信頼の籠った声で告げる。

「背中には任せたぜ、大将オ！」

スミスの考えは大よそ想像がついた。だから、なるほど効率が良いたと考えて、俄かに見えた希望に縋るように9mm機関拳銃を手に、残り少ない弾倉を入れ替えて瓦礫の山から飛び降りる。敵の影は既

に曲がり角から姿を現していたが――それよりも素早い銃撃が敵の行動を牽制する。

もう何も迷う事など無い。

衛士は腰の専用ホルスターから林檎のような形の手榴弾を取り出し、安全ピンを抜く。それを転がすように素早く投擲して、その上で牽制射撃を続けた。

間も無く爆発。鋭い炸裂音に脆くなった建物が僅かに揺れ、その直後に男たちの悪態や悲鳴が耳に届く。鋭い破片が距離が十分に離れていない衛士にまで届くが、大怪我をするレベルでもなく、細かな破片が肌を叩く程度だった。

衛士は壁につける背を引き剥がして敵へと肉薄。巻き起こる砂煙に突き刺すように銃弾を注ぎ込むと、その硝煙は間も無く血の色に染まって、悲鳴も、声も、騒ぎもその一切が失せてしまった。

辺りは爆発の余韻を残すだけで、再び静まり返る。だがその直後に激しい崩落音が背後で掻き鳴って――驚いて振り向くと、突き刺さるような冷気が全身を鰐った。

”てこの原理”で瓦礫を外側へと崩したスミスは、それから身を抱くようにして寒さを表現すると、またご機嫌そうに笑って衛士を腕を振るう大きな動作で招いた。

「お待ちかねの――ッ！ エイジ！」

スミスは不意にその言葉を遮って叫ぶ。それと同時に衛士へと飛び込むように低い体勢で跳躍すると、彼はそのまま素早く衛士を突き飛ばした。彼は為されるがままに地面に倒れて、スミスは――その直後に空間に劈く銃声によって、その胸、腹、腰から濃厚な出血で耐時スーツを赤黒く染めていた。

まともな着地態勢も取れぬスミスはそのまま腹ばいになって床に叩きつけられ、反射的に行う衛士の応射は、的確に、生き残っていた膝立ちの敵の胸に数発の弾丸を喰らわせた。

悲鳴も無く敵は倒れる。衛士は首筋に強い痛みを覚えながら、潜入直後に感じた嫌な予感を理解してからスミスへと駆け寄った。辛

うじて浅い呼吸を繰り返す彼は、吐血して汚れる顔のまま、それを拭うことも出来ずに衛士へと顔を向ける。

「は、はは……最後の、最期に……ヘマっちまったなァ。大将よう」先ほどまで楽しそうに、嬉しそうに見せていた笑顔は其処には無い。精悍な顔立ちはやつれ、血に塗れて悲壮感が増しているだけだった。

声は弱弱しく、小刻みに震える。動く腕は既に耐時スーツを半分ほど身体から引き剥がしていた。

——オレのミスだ。

「やっぱよ、人間……いっかい、ケチが付くと、ダメ、なんだよな」
「何言ってるんだよ、上がったじゃねえか。あんたは間違いなく、ケチを払拭する活躍をしたじゃねえか！」

——驕らずに、受けた信頼にのぼせずに丁寧に仕事をしていればこんな事にはならなかった。

調子に乗って、一度成功したからといって手榴弾を使用しなければ良かったのだ。的確な射撃を行えばまず間違いなく殺害の漏れが出ることなどはありえなかった。煙が敵の存在を曖昧にして、上がる血煙が敵の全滅の確信を際立たせてしまった。

「オレのミスだ」

口をつけてそれが出た。

スミスはソレを聞いて、ぷっと吹き出すように一息分で笑うと、口元から笑みを消失させて陽気さを無くした。

「んな事、言わなくても分かってたんだよ。問題は、ここでお前が、学べるかどうか、だ。ここで成長しなければ、俺の死は無駄になる。ま、拾った命だ。そう重荷にゃ、ならねえだろうが、な」

言葉にならない感情のせめぎ合いが胸の奥底から湧いて出る。どうしようもない苦しみ、スミスの言葉でより強まった気がした。

だがここで答えねばいけない気がした。今後どうなるかより、少なくともまだ彼の息がある内に言葉を返さなければならぬ気がした。強い使命感、ないし彼への思いが衛士の喉から言葉を搾り出さ

せていた。

「気にするなよスミス。オレはよ、あんたのお陰でなれる。組織の中で、世界の中で一等強い男になってやるよ。絶対だ。あんたに誓う」

「は、そいつあ良かった……。なあ大将、遺言は、受け付けてるか……？」

跪く足元には生温い液体で濡れ始める。スミスはようやく耐時スーツを脱ぎ終えると、それを手渡せずにその場に落とす。衛士はその手ごとスーツを強く握ると、頷き、彼はそれを知覚して静かに続けた。

「伝えてくれ、あいつ……イリスに。ちゃんと友達作れ、ってな」

「他には？」

「は、喋んのって、結構しんどいのに、厳しいなあ……。他は、そう、だな……」

衛士が握る手からは徐々に力が抜けていく。呼吸はその数自体を減らして、やがて広がる血溜まりは彼の顔を濡らし始めた。

「最後に、ありったけの爆薬、供えてくれよ。……それとな、エイジ……貸しが一つ、だ」

彼は最期に口の端を吊り上げてにかつと明るい笑みを見せると――そのまま全身を脱力させて、頬の筋肉は弛緩して薄い笑みを作り、スーツを握る手は緩んで開く。

――スミスが死んだ。

衛士はその瞬間に、途端に目頭が熱くなるのを感じた。

もう一生涙腺は緩むことは無いと思っていた。あの惨劇から、涙なんてこれからずっと流れる事は無いと思っていた。それなのに、自然に垂れる熱い液体が頬に一筋流れて落ちる。

感動的な物語なら、時衛士が彼を想う少女ならばこれだけでスミスの鼓動は一度大きく高鳴って蘇るだろう。だがこれは、この世界はそれほど人に優しいものではなかった。

視界がぼやけ、鼻水が垂れる。先の一筋がきっかけでとめどなく

溢れ始める涙は顔を濡らして、どうしようもなく表情を整える事が出来なくなった。

嗚咽が漏れる。強くなる孤独感がその背を押したが――スミスから、早くもボレロに戻るソレを引き剥がし、血生臭く、生温かいソレに袖を通した。

「死んじまったら、もう借りが返せねえじゃねーかよ」

背負うナップサックから、残ったプラスチックケース三つを取り出してスミスの背に乗せる。衛士はさらにそれに付随する機材を操作すると、すぐさま五分の制限時間が明滅して、さらに作動させると、五分が四分五九秒へと移り変わる。

直後に――凄まじい爆発が施設を振動させる。耳に劈く爆発音が地響きと共にやってきて、彼は後ろ髪引かれる思いを胸に抱きながら、だが強い意志で背を向け、振り向く事無く、スミスが開けてくれた一人分の穴から外へと脱出する。

そうすると彼を迎えたのは何よりも深い漆黒だった。

彼は短い溜息の後に手の甲で涙を拭い、暗視装置を装備する。

その最中にさらなる強い衝撃が大地を揺らし、衛士は思わず跪くと――前方の、起伏の激しい瓦礫の中に無数の光沢を発見した。

山の陰に隠れる銃身。衛士が見たのはそれだった。恐らくは、先ほどの騒ぎを駆けつけて出てくるのを待ち伏せている兵隊だろう。ココから見て、数はざっと七、八人。

普通に考えて一人で相手をするには少しばかり多すぎる人数だ。弾薬も予備弾倉がそれぞれ残り二つであるし、手榴弾でさえ残り一つ。隠れる場所も無く、また先ほどと同様の戦法に出れば同じ過ちを犯すだろう。

だが。衛士はそれに否と首を振る。

できるわけが無い？ 否、出来ないわけが無い。

衛士は心の中で呟いた。

そして間髪おわずに腰に伸ばした手で手榴弾を掴むと、先と同じ手早さで安全ピンを抜いて、丁度彼等の頭上に落ちるように投擲す

る。

それから流れるように短機関銃を手にして、手榴弾に追いつく速さで走り出す。するとその足音に敵が気付き、山から身を乗り出した。

手榴弾が爆発する。

逃げ出せぬ兵隊はその爆発で初めて手榴弾の存在に気付いて、弾き出る破片で全身を蹴られ、あるいは単純な爆発で肉体の一部を喪失する。衛士はそれに応じるように右腕を身体の前面に突き出して、念じる。すると間もなく耐時スーツは大きな盾となって体の前に展開して――飛散が終えた直後に、それは再び身体にまわり付く。

――うねる波のような地形。身を隠す場所が限定されている為に、先の手榴弾の爆発を逃れたものの煙りだされた三人が衛士の前へと躍り出る。が、身を屈めて近くの男へと肉薄する衛士は、既に彼の懷にもぐりこんで銃口を顎に突き付けていた。

発砲。

頭上で血煙が舞う。衛士は口の中に流れる血を吐き出して、次の得物を狡猾に狙い、背後へ回ろうとする一人を発見した。

移動を開始しようとする最中に、牽制するような射撃が衛士を狙う。彼は頭部を吹き飛ばした敵の身体を背負うようにして肉の盾にしてから、応射。逃げようとした敵が右足の太腿に銃弾を喰らって、悲鳴を上げながら転ぶ。

衛士は盾を投げ捨ててから立ち上がり、倒れた男へと追撃。間もなく彼は両手を広げ大地を抱擁するような形で力尽きた。

だが息を付く暇もなく背後で発砲音がつんざく。衛士は横に転がるようにして回避行動を取り、衛士が居た大地に弾丸が弾けるのを見る。

素早く振り返り、短機関銃を構える頃になると敵は既に姿を消していた。が――直後に、短い悲鳴が耳に届く。

それと共に衛士の視界に現れたのは、一つの影だった。

無論それは先ほどの逃げた男ではなく、マントをなびかせる、誰

かの姿だった。

彼は其処でようやく『後方支援^{バックアップ}』の存在を思い出した。

確か――耐時スーツを重ねて使用する完全近距離格闘タイプ。そんな彼、あるいは彼女がいつどこから現れたのか不思議に思うも、分からない。どうせ通気口^{ダクト}で見た”見間違い”が、実はそうではなかったというところであろうか。

どちらにせよ、姿を見せたのにも関わらず何も言わないソレに、衛士は用は無い。生きていても、死んでいても、イワイを回収しなければならぬのだ。

しかし、後方支援が出てきたと言う事は、この任務も終わりだと言う事だろうか。そう考えると、なんだか胸が重くなるような気がした。

「手伝うなら手伝ってくれ。イワイは瓦礫の下敷きだ」

携帯端末を片手に、反応を探す。小山を越え、瓦礫で慣らされた平坦な道を歩き、間も無く真下にその反応を覚えると、彼は端末をポケットに突っ込んで銃をしまった。

屈みこみ、瓦礫の隙間に手を掛けて体重をかけて力一杯引き上げる。そう大きくは無い瓦礫はそれだけで起き上がり、反転する。その下に、身の丈ほどあろうかというコンクリートの板を発見して諦めたくなったが、首を振って、同様に隙間に手を突っ込んだ。

腕に力を込め、踏ん張って板を持ち上げる――が、びくともしない。呼吸は簡単に乱れて、未だに乾かぬ瞳は垂れる鼻水と同様に鬱陶しかった。

だが諦めず、大きく息を吸い込むと、不意に真横に強い人の気配を覚えた。見ると、それは先ほどのマント姿の後方支援^{バックアップ}だった。

臀部まで伸びる長い髪は、屈む事によって地に渦を巻く。細い腕には革のベルトが巻かれているようで――どこかで見たことあるその姿を、一体いつ見た姿かを思い出す前に、ソレは瓦礫をどかすために力を込めた。

衛士は腹に力を込めて同様に全身全霊を込めると、板は、思った

よりも簡単に持ち上がったって向こう側へと倒れた。鈍い衝撃で地響きが起こる。傍らのそれは立ち上がったって自身の腕を叩くと、それから一人で瓦礫を除き始めた。

「ああ、肉体強化ね」

”彼女”の革ベルトは肉体強化の効果を持つ。さらに使いようによつては捕縛も可能であり、さらにマントは防弾、防刃使用の耐時スーツだ。ただ思考すればその通りに変異するだけの耐時スーツを着る衛士とは違い、酷く実戦用のものなのだ。

地鳴りが続き、やがて穴が空き始める。彼女はそれでも腕を止めずに大きなもの、さらに小さなものを投げて近くに小さい山を作り出して、やがてその穴から出てくると、衛士の傍らに並んだ。疲れた様子は無く、目隠しでもするかのように、包帯を巻いたスミスのように顔に巻く革ベルトはそれ故に前が見えていないはずなのに、視認できているように穴の中を見ていた。

衛士の暗視装置はその暗い穴の中も容易に見通すことが出来て――その中で、蠢く何かを認識した。

彼がそれが一体何なのかと白々しく理解しようとするよりも早く、彼は立ち上がり、ボロボロになるスーツとナイフを手にして大きく息を吐いた。

「イワイ、生きてたのか」

一見無傷で、縦に割れたヘルメットに荷物を乗せる彼は、軽い跳躍で衛士の前に飛び上がると、軽く笑って相も変わらぬ鋭い目つきで衛士を見据えた。

「だから、言ってるんだろお？ このスーツは肉体強化に特化してるんだ。身体能力じゃねえ。反射神経も、腕力も、聴力も、視力も、自然治癒力さえもが超人以上に強化されてんだよ。一撃で殺せねえ奴に、俺は殺されねえんだよ」

――だが、今回生き残れた要因は、やはり敵が思い通りに動いてくれたことにある。

仮にあの敵が転がるように回避行動をとっていれば、爆発が直撃

してイワイは死んでいただろう。彼が耐え切れたのは、敵が爆風によってイワイに衝突し、盾となってくれたからだった。

「なんかお前、不死者みてえ」

「心強えだろ」

「まあ。だが頼りにはならなさそうだ」

「どおでもいいが、さっさと転送してくれ。俺の端末は壊れちまつてんだ」

短い坊主を搔いて嘆息する。衛士もそれにつられる様に大きく息を吐いてから、携帯端末を取り出し、簡易な操作で本部へと転送の要請を出した。

その直後に、衛士らからそう遠くない場所で凄まじい爆発が巻き起こって――。

――衛士は気にせず空を見上げると、どこでも変わらず、その夜空には星々が鮮やかに煌めいていた。いつでも、何度でも飽きるほど見ていたはずの空なのに、久しぶりに見るそれは酷く懐かしく感じられた。

様々な思いが、走馬灯のように過ぎる。だがそれに浸る暇も無く、一瞬にしてその景色は移り変わってしまう。

そうして彼等はその被害を被るよりも早く、その施設を後にした。

後日談

抑圧組織リリスからの任務は、日本の隣国に存在する銃の密造・密輸を行う組織の調査だった。しかし前任の担当者の不手際により副産物を奪われ、また組織が冗長性を持つ形態をとっていることが判明。その後二四時間以内に適正者三名を、同組織の新たな施設に送り込むことに成功した。

必要であれば施設を破壊せよ、と命じた任務を達成した彼等三名はその組織内に存在する重要な情報を余す事無く体感した上で、帰還する。その結果を全て纏めたのが、以下の報告書^{レポート}であった。

——今回調査にあたった組織には、建前で形作られる『新エネルギー開発・研究所』と行った施設にしては大掛かりな研究施設も機材も存在せず、言わば処理装置の様な施設であった。

職員の武装から推測するに軍の介入があったのは明らかなことだったが、それ故に加えられたであろう”研究費用”の行方は依然として不明。しかしその成果は、時衛士^{ときえいじ}、ジョン・スミスら二名が体感した相手の『異能力』をもたらしたと推測される。

生還した時衛士の説明では『空気を操作する能力』だと解説されたが、その正式な能力は不明。しかしリリスが有する副産物には及ばず、任務を遂行するにあたって早急に対処をしなければならぬレベルでも無く、ごく低レベルのものだと思われた。

しかし現状では異能力が組織外で現れたという事実が危惧され、現在ではその出所として、二年前に逃走者として組織を辞した『ホロウ・ナガレ』の関連がある組織であった為に、早急な処置としてナガレを追う提案が上げられる。

また今回の施設が行っていたであろう銃の部品の製造工場は、施設の所在地から南方に二キロほど離れた位置に存在し、巧妙な隠蔽工作が行われていたが、任務の破壊作業により電気の供給、機械の

制御が完全に不能となったために機能していないというのが現状となっていた。

任務による報告は以上であるが、以降の敵の異能力に対する個人的な観点からの推測は是非目を通してもらいたい所存である。

能力を使用したと思われる敵の装備はガスマスク型のヘルメットに袋を着るような戦闘服。一見すれば化学防護服の様でもあるが、能力を強制的に制御する装置だと思われる。リリスのように道具に全ての負担を強いるのではなく、既に個人が特異点としての件の組織では、矯正が必要なのだと思われる。

今回の任務から得られた情報は、その状況と、相手の組織としても特異点が希少であるために余りにも限定的であるが、それでも十分脅威だと言える。またこれ以降に更に他国の数多ある組織にも、今回と同様にホロウ・ナガレが関与しているものがあると考えられ、今回以上の特異点が存在するとも考えられる。

最も注意すべきはその存在による任務の妨害であるが、その点についても今後とも長く思惟し対策を練らなければならないだろう。組織へ招いて僅か三週間の未熟な訓練兵を実戦に投与した件についてであるが、今回の敵接触からの殺害衝動ないし殺傷行動は良くも悪くも訓練された通りの無難なものであった。精神的甘えさえ取り除けば十分に戦場でも活躍できると思われるが、やはり今回の任務で得た仲間の死によって絶大なる精神的負担を抱いたと考えられた。

仮にこれからも時衛士を役立たせると考えるのならば、慎重な検討が望まれる。

エミリアは息を吐いて、なるほど頷いた。

重なる紙をめくると、今度は標準的な丁寧さで綴られる、先ほどとは違って短く纏められる報告書が現れる。

今回に限っては、任務に参加した全員に報告書を書かせると命ぜられていた為であった。

彼女は真剣な目つきで、綴られた文章へと視線を落とした。

——今回の任務で確かに判明したものは限られているが、結果的に壊滅に追い込んだ敵組織について有用性がある情報は殆ど無いのが現状だ。全てが実験的で未熟すぎるこの任務では、時衛士が発見した特殊な力と、敵に副産物を奪われても作動するソレの効果である。

他者でも同様かは定かではないが、適性の無い使用者は正気を失うものの、自律行動をして副産物を使用することが出来る。その身体能力は攻勢に特化した試作型の耐時スーツでも対応し切れぬものであり、応戦には困難を極めた。

結果的には敵を誘い、爆薬を強引に爆発させることによって相打ちを試みて打倒することが叶ったが、今回の事を参考に、容易に副産物の使用を許さぬ仕様にしなければならぬと考えられる。これは個人的な観念でもあるが、他の適正者が敵陣中で副産物を奪われることはそう少なくは無い事象だと聞いている。

それ故に、今回の、敵に特異点に近い能力者が出現したことに繋がるとなれば、非常に嘆かわしいことだ。

以上で報告は終わりだが、他の報告について言及するのならば後方支援役の報告書を拝見していただきたい所存だ。

以後、考えを改めてもらえれば一適正者として光栄である。

手書きの上にこの内容では、と思うが彼の場合は彼が体験した事とそれから考えるものしか書かれていない。自身しか知りえぬであろう事の細部だけを綴るのは、確かに全ての報告書レポートを読む上で冗長にならず、良いことだといえた。

さらにある程度の監視がモニターあった事を知るように大まかな部分を省くのは、彼らしさであろう。戦線に立って僅か一年未満であるものの確かな成績を残す彼が何を考えているのか分からないが、組織の上層部を上層部とも思わぬ意見については頭痛の種になりそうだが、

上役も衛士関連であるためにそう気にはかけてくれないだろう。

エミリアはそう願いながら、最後の一枚をめくってから、大きく息を吐いた。

——人は割りと死にやすいです。

ただの一行はそうした一言で終える。

もはや報告書としての意味を持たぬそれであるが、今回は彼の学習、成長、反応までが任務の一つだ。これを提出するのは酷く気が進まないが、それでも出したと言う事は文面以上にある程度の気力はあると言う事だろう。

今回は衛士を守ってスミスが死んだ。だがそもそも命が残っていたとは想定されていなかった彼だ。結果的にはプラスマイナスゼロだが、彼に関わった衛士にとっては、その喪失は大きなものだろう。さらにスミスが担当していた少女に伝えてくれと預かった伝言も、彼には重すぎるかもしれない。

今回もし許可が下りれば衛士の望む通り、言伝と共にスミスが装備することとなったボレロ型の耐時スーツを少女、イリスに与えようと思う。恐らくそんな彼女は四月になって衛士と共に訓練校に来るのだ。

仮に四月までに衛士が立ち直ったとして、イリスと初めて出会うどんな反応をし合うのか。

エミリアは、今までの事のないそういった方面での心配に、いよいよと俄かな頭痛を覚え始めた。

なぜ人の為にこれほどまで気に病まなければならないのだろうか。やはり人を育成するという立場は性に合わないのだが——。

「エミリア、良い報告と悪い報告があるわ。どちらから聞きたい？」
何事も無い様に、勝手に部屋の扉を開けた保健医は不法侵入してくるなり、唐突にそんな事を口走る。

エミリアは、既に慣れた事だが、プライバシーも何も無い彼女を

心底イヤに思ってから、癖になりつつある溜息を吐いた。この調子では白髪が増えそうだが、元々白いこの髪には感謝したほうが良いだろうか。

「良い報告から」

「彼の専門教官が今日でめでたく解任よ」

「悪い報告は？」

「四月から座学教官に任命されたわよ」

「……死にたくなるな」

寝台に座る彼女は、手にしていた報告書をそのままにうな垂れて沈黙する。

もう長らく自宅には帰っていない。この倉庫じみた狭い部屋は慣れたものの、心身が休まるものではないのだ。だから嫌だというわけではないものの、少なくとも嫌悪を示す要因のひとつではある。

さらに任務を行うのとは違って、月に一度、教官という働きに対して報酬を得る仕組みだが――これでは身体が鈍ってしまう。定期的に、月に五、六度命をかける仕事をしてきた彼女にとっては、それはある種の苦痛であった。

活発な人間が軟禁されるような、ストレスの発散方法を失う苦悩。これからどうしようかと思いつながら、彼女は保健医が部屋の隅に置くナップサックに視線を投げた。

「それは？」

「教本と、テキスト半年分の計画表。スケジュール訓練期間は半年だからね」

四月にはここに来る他の訓練生にも配られるモノと同様である。

保健医はそれを伝えると、そつと手を差し伸ばした。

「これからもよろしくって事ね。めでたいわ」

「……あ、ああ」

――この生活が嫌になる主因が笑顔で握手を求める。一瞬、エミリアにはその姿が変異して悪魔のように見えたが、苦肉の末に、彼女はようやく手を差し返して、強く握る。

これからさらに半年この女と生活を共にする考えると憂鬱にな

る。これならば、時衛士の訓練に付きっ切りのほうがまだ幾分かマシだった。

赤い髪を掻き揚げて、それから彼女はエミリアの隣に腰をかけてにこやかに微笑んだ。

「お祝いにお酒、飲む？」

「飲まない」

「まあまあ」

彼女はそう良いながら白衣のポケットから銀色の平べったい、スキットルと呼ばれるアルコール濃度の高い蒸留酒用の水筒を取り出す。ウイスキーボトルと言えば分かりやすいだろう。ソレを手に取り、素早く蓋を開けてそれを傾け口の中に注ぎ込んで――すかさず、油断するエミリアへと顔を近づけた。

「なっ、き、貴様……！」

両手で肩を掴み、全力で拒む。だが素早く彼女の両肘を腕の関節に穿たれ、膝かっくんでもされるかのように緩む腕は大きな隙を生み、艶やかにとろけるような視線は瞬く間にエミリアに肉薄。その直後に保健医の口はそのまま彼女の口に触れて、無理矢理に口内の生温い酒を注ぎ込んだ――。

眠る前になると、酷く人が恋しくなるときがある。嫌な事があるとそれは一層強くなった。

衛士はその日も眠りにつけずに、こっそりと寮を抜け出して夜の来ない外を散歩していた。まだ肌寒く、上着を着なければ長い間外に出られないような気温の中だ。周囲にはそもそも人が日中ですらないし、夜中ならそれは尚更だった。

何も考えずにただ歩くと、やがて人通りのある街中までたどり着く。だがやはり昼中とは違い、人はまばらであった。

時刻も既に深夜帯。人口がどれほどのものか分からないが、それも仕方が無いことだろう。

彼はそれから、また以前のように人にぶつかって因縁をつけられるのも嫌なので、人気の少ない道の商店の端に座り込む。迷惑にならぬよう、既にシャツターが下りている店の前だ。

人がいない所を選ばないのは、少なくとも一人以上が視界に入る状態で居て欲しいからである。

衛士は壁を背にして膝を抱える。こうしていると、部屋の中に入るよりも幾らか気分は晴れるようだった。

——人が死ぬのは嫌だ。慣れる慣れない以前の問題だし、そもそも自分でも散々人を殺しておいて言える言葉ではないのは分かっている。だが殺さなければ殺されるし、そもそも銃口をこちらに向ける男の死と、自身を庇った男の死では大きく意味が違うのだ。

だというのに、夢に出るのは前者の男たちだった。

気がつくと四肢を押さえつけられ、銃剣でゆっくりと身体を滅多刺しにされていく。痛みが鮮明に蘇り、死ぬ直前で目が覚めるのだ。身体を起こすと、まだ肌寒い季節なのに汗をびっしょりかいていた。夢でも、寝起きでも酷く不快だ。任務が終えてから一週間の休養が与えられたのは不幸中の幸いといえるのだろうか。衛士には良く分からなかった。

昔ならば。ここに来る前の自分は、こんな気持ち覚えることは無かった。そんな暇は無かったと言い変える事が出来る。いつもならば、こんな感情を察する姉が、どうしようもない弟が眠りに付くまで傍に居てくれるのだ。

ただ偶然そういったタイミングが重なっただけかもしれない。だが少なくとも、そんな姉に彼は安心する事が出来た。彼女の存在は、それほどに衛士の中で大きくなっていったのだ。

だから、死んだからといって忘れられる存在ではない。いつでも彼女の事を考えているというわけではないが、今の衛士を支えるのは思い出の中の彼女だった。

情けない話だろう。酷いシスコンだろうと衛士は心の中で自分を罵倒するが、心の中でさえ力の籠らない声は、一切の効果を持たな

かった。

奮い立てない。元氣が出ない。一切の氣力が零れ落ちて、精神をまともに保てない。

だから、ただ呆然と座り込む衛士を心配して近づく人々の声などは、まるで届かなかった。右から左へ通り抜け、考える事を放棄する彼の頭は声を掛けられたという記憶を作らない。

寂しいのか、情けない自分が嫌になっているのかすら分からない。いや、それ以前に彼はそれ自体を考えようとはしなかった。

——涙は流れた。

思い返せば、ただそれだけのことに随分と苦悩していたような気がする。

だがそれが結果的に何をもたらしたのか。

悲しみがより強くなったただけだった。自分は悲しんでいるという表現方法を見つけたただけだった。

自分が馬鹿馬鹿しくなってくる。なんだか、これから欲した全てが手に入る度に、それが自分にとっての無駄なモノ、不要なモノとなってしまうようで怖くなった。

その中で、再びあの姉の明るい笑顔が脳裏を過ぎって——衛士は声を殺して、腕に顔を押し付ける。

ここに来て頑張ったつもりだった。立ち直ったような気がしていたが、やはりそれは”気がしていた”だけのようだった。つもりになつていたのだ。自分が強くなったつもりに。

「……なれるかな」

スミスに誓った、あの言葉を思い出す。

組織の中で一番、そして世界でも一番強くなってやると咆えた。脳内麻薬のお陰で高揚した感情が口走ったそれである。今となつては、とんでもない事だと笑い飛ばせやしない言葉だった。

「なれるさ」

不意に言葉が頭上に降り注ぐ。顔を上げると、天井の照明の影になる誰かが目の前に立っていた。

褐色の肌に、紅玉ルビーのように鮮やかな瞳。透き通るような白髪は片目を隠すように垂れて、やや厚めの唇は微笑を作るように口角を上げていた。

タンクトップにチノパン姿。豊満とは言いがたいものの谷間を作るバストは構わず襟元から零れそうになるも、彼女は気にせず屈み、衛士の隣に腰を落とした。

「だがまず実行に移さなければ難しいな。口だけならどうとも言える。だが実際になろうと、決意するのは案外難しいものなのだぞ？」

優しい口調は彼女には酷く似合わないものだった。
だが安心する。

不思議と心は落ちついた。身体に触れる腕は、その足は衣服越しに体温を伝えて、それが衛士の心を掴み安定させるようだった。

石鹸の良い香りがする。だがそれに混じって少し酒の臭いが鼻に付いた。果然と空白に染まる、何の情報も取り入れない視界は途端に鮮明になって、視界の端にエミリアを捉えるようになった。

「まずは四月からの訓練。十月になれば貴様も晴れて、ようやく正式に適正者として任務を受けることになる。過酷な日々だ」

「……耐えられる、かな」

「耐えるんだよ。貴様は今まで、そうしてきたじゃないか。それに多分、イリスもそうするだろうな。なんといってもスミスが担当に付いた少女だ。それほど胆力が無いはずが無い」

イリス。それはスミスが死する前に、衛士の言伝を頼んだ少女の名前だ。衛士はそれを思い出して、華奢なのか、それともプロレスラー顔負けの肉体を持っているのか分からぬ少女を想像して、そうか、と呟いた。

エミリアは、そうだと返して衛士へと顔を向ける。彼女の眼に飛び込むのは蒼白い肌だったが、辛うじて、彼の眼には生気が戻りかけているのを見た。

「そう、だよな。ここで頑張らなくちゃ。オレは、約束したもんな。」

強くなるって」

「そうだ。お前……貴様はここで踏ん張らなければならぬ。それを手伝ってやることは、誰にも出来ない」

「オレには、それが出来る……?」

「出来なければ私はここに来ては居ないさ」

——彼が夜な夜な出歩いていることは知っていた。だが咎めないのは、まだ未熟な少年が背負うにはやや重過ぎるものを背負っていることを知っていたからだ。だから、相談なら保健医が適切だと考えていた。

だから彼女に相談しては見たが、保健医はエミリアが声を掛けてやるのが一番だと言い切るのだ。

それを不信に思いながらも実際に来て見れば——実に情けない弟子の姿を目の当たりにして、全てを一先ず横に置いて、純粹に励ましてやりたくなった。

だから二言三言口を開けば、中々どうして、常日頃の態度が嘘のように彼は心を開いてくれる。

それが面白いというわけではなかったが、だが嬉しくないといえは嘘になるだろう。任務前には意見の行き違いでケンカになった程の仲だ。仲直りするタイミングが無いまま今日のこの日を迎えたが、少しばかりの危惧は、やはり杞憂に過ぎなかった。

「寒い所にばかりいては、貴様のような貧弱な身体はすぐ風邪を引く。寮へ戻るぞ」

もう大丈夫だろうと思えるようになったところで、彼女は立ち上がり、尻の汚れを軽く払って衛士へと手を差し伸べる。彼はそれを見据え、しっかりと手を返して強く握り、その感触にまた安心を覚えて、立ち上がる。

殆ど同じ目の高さの彼女の瞳を見据えて、衛士は不意に心の中に生まれた言葉を、少しばかり恥ずかしく思いながらも、言うならこの機会タイミングしかないのを知って、口にした。

「ありがとう……エミリアさん」

「どういたしまして、だ。トキ」

——なにやら、頬が熱くなる。途端に気恥ずかしくなって顔を背けると、既にエミリアは衛士に背を向けてそそくさと寮へ足を進めていた。

衛士は慌てるようにその隣に着くと、エミリアはそっぽを向くようにして衛士に横顔すら見せない。

どうしたのか、と心配することも無く、なぜ彼女がこんな事をするのか衛士にも分かった。

自分と同じく、気恥ずかしいのだ。

ケンカして以来まともに話すのはこれが初めての筈だ。報告書レポートさえも自暴自棄になって適当な事を書いたから、それが確かだった。

だから特別ソレをはやし立てたり、ちょっかいを出したりすることも無く、衛士は熱くなる頬に触れる冷気を心地よく感じながら隣を歩いた。むず痒くも、酷く安心する位置だった。この世界に来てこんな気持ちになれたのは、初めてのことだった。

だが不意に、この時間が一秒でも長く続けば良いと思ってしまったのは、人生で一番の不覚と言えるだろう。

衛士は再び頬を上気させるように紅潮させてから、近すぎず、また遠すぎない距離を開けて彼女の歩調に合わせて寮へと戻っていった。

未来の始まり

初夏の候。時衛士^{ときえいし}が砂時計を手に入れてから十四ヶ月。彼が肉親を失ってから十二ヶ月。地下空間^{ジオフロント}に連れてこられて、初めて仲間の死を覚えてから二ヶ月。

そして――彼が初めて、自身では知覚できぬ程僅かな恋心を抱いた女性と再会したのは今日のことだった。

さらに彼の登場以来、全てが順風満帆と思われていた抑圧組織リスに決定的な不穏因子が現れる。敵は彼等が持つ『副産物』と呼ばれる特殊な能力を持つ道具のように、人間個体が特殊能力を持つ者たちである。

リスが定義する『特異点』とは大きく異なる能力者故に、それらはリス内で『付焼刃^{スケアクロウ}』と呼ばれるようになっていた。

それらが集まって組織を作るわけでは無いものの、徐々に組織にその個体が増え始めているのは確かであるし、その上、特異能力の制御や能力自体も統計して”強くなっている”と言える。これは由々しき事態であり、リスとしても単純に対策を練るだけでは済まなくなってきた。

故にリス内部で呼称される、個体が副産物を持たずに特異能力を駆使する『特異点』への発展へと技術開発は活発化してきていたが、大きな成果は未だ見られなかった。

だからリスが、否、その中でも一部の上層部の人間が期待を向けるのは時衛士個人であったが、その理由を、思惑を知る人間は彼等以外にこの時点では存在していなかった。

そんな衛士の目の前に立つ、透き通るような白い肌に、上品そうな顔立ち。腰よりも長いブロンドの髪を揺らして、同時にその全身タイトのような耐時スーツをはちきらんとするバストを震わせながら笑う女性は、衛士が思い出に耽っている最中に他者との交友を築くように談笑を交わしていた。

彼女は衛士に無理矢理砂時計を押し付けるようなしたたかさを持っていたが、どうやらそれまでもが失われたわけではないようだった。彼はそれに俄かな安心を覚えてから、エミリアとミシエル、そして船坂がそれぞれ交わす会話から外れているのを良いことに、そそくさとその場を後にしようとして背を向けると――不意に、肩を掴まれる感触がそこに走る。

嫌な予感がして、その予感を認めたくない本能が首を硬直させるが、彼は反射的に背を向いてしまう。

すると彼の眼に飛び込んでくるのは、肩まで伸びる赤い瘰のある髪に、白衣姿が良く目立つ保健医であった。

つまり、この今だ熱射が照る蒼穹の下、ここに訓練校の全職員が集まったことになる。

極端な気温が苦手である保健医が外に出てくることに強い疑問を浮かべながらも、苦笑を浮かべて軽く頭を下げると、彼女は次いで腕を引き、彼の身を強引に引き寄せた。

「ほらほら、もっとお話しようよ」

「うあつ、酒臭い！」

「念願のミシエルちゃんでしょ？」

「昼間っから酒飲まないで下さいよ！ 最低限、オレに近づかないで下さい！」

衛士は暴れるように腕を引き剥がすと、その拍子に手の甲が柔らかな胸を打撃する。幸せな感触の後、彼女はわざとらしい悲鳴を上げてよろけると、そのまま近くのエミリアへと抱きついた。

彼はそんな思わぬ幸運なハプニングにも頬を染めるだけで沈黙し、気まづくなって再びその場を辞そうとするのだが、素早く、今度は船坂が彼の行動を制した。

巨大な体躯が、その風貌に合わぬ素早さで衛士の前に立ちふさがり。彼の肉体が視界いっぱいに広がった。

「話はそこはかとなく察した。ミシエルと積もる話があるんだろ？ すまん、邪魔者は退散する。明日は休みだから、ゆっくりして

いけ」

彼は大きな手のひらで二度ほど衛士の肩を叩くと、そのまま背を向け寮へと戻っていった。衛士はそんな船坂の広い背中を見送りながら、どうやら細部までは知らないらしいと言う事に深い溜息を吐いて脱力する。

――積もる話はあるが、一方的なものだ。彼女はその一切を覚えていなし、「初めまして」という言葉がそれを良く表してくれている。

そして以前、エミリアと初めて出会ったときに突っ掛かったことを、彼女は今更になって怨みでも晴らすように仕返してきたのだ。そのお陰でやんわりと嬉しい気持ちになるのと同時に、憂鬱な気分になるのは仕方が無いことだろう。

これからまともに彼女と接する事が出来るだろうか。

最も、そうするつもりだ。またこの胸がチクチクと痛みを覚え始め、彼女の姿を視界に収めれば胸が高鳴る。単なる女好きかとも思われたが、少なくとも現在ではココに来て性的な思いを抱いた女性が居ないのでそうではないと願いたい。

やがて船坂の姿が失せた頃、また、今度は控えめに衛士の肩を突付く存在が現れる。行動や力強さから考えてまずあの二人では無いことは確かだった。

衛士は眉間に作るしわを緩めて、笑みを作る。些か不器用なそれだったが、ないよりはマシだろう。

振り返ると、赤面するミシエルの姿。両手は下腹部で組まれて親指をもじもじと合わせて、故に寄せられるバストはさらなる強い自己主張を孕み始めていた。

「あの……なにか？」

保健医に何かを吹き込まれたのだろう。コト今回に限ってはエミリアも共犯である可能性も否めない。それを裏付けるように、彼女の背後では珍しく笑顔で言葉を交わしているらしい二人の姿があった。

「こ、今度はアナタの事、忘れません」

「えっ？」

「って、あの、赤髪の方に言えって言われたんですけど……すみません、あの、遊びにしているみたいで……」

——胸が締め付けられるように痛くなる。目頭が熱くなって、衛士は思わず手のひらで目を覆って俯いた。

別に彼女が死んだわけではないのに、なぜこんな気持ちになるのだろうか。ただ彼女の、衛士に対する記憶が失われただけなのだ。恋多き年頃の、初恋……いや、あれが恋と言えるものかも分からぬが、その程度のものなのだ。

だから言葉に詰まってしまう理由が分からない。それと同時に、保健医に俄かな殺意を覚えてしまった。

衛士は潤っただけの目を手の甲で拭い、それからミシエルの脇を通り抜けて、待っていたかのように腰に手を当てていた保健医へと向かった。

「こればかりは冗談で茶々入れないで下さいよ。ちょっと、マジに怒りますよ」

「あらら、失敗？」

「失敗もクソもねーっすよ」

作った拳を胸の前に持ち上げると、彼女は嫌がるように手を振った。

「やーよ。あたしデスク専門だもの」

汗が滲む額を手で拭いながら、髪を掻き揚げる。大きく開けた白衣は既に脱がれていて、その格好は燃えるように赤いキャミソールにデニムパンツという気軽な姿だった。

目のやり場に困る格好でも、衛士は彼女の全てを飲み込むような深い黒の瞳を見据え続けた。

それから肩をすくめて軽く微笑み「わかったわ」と短く頷くと、小さく手招きをする。衛士は彼女に合わせるように軽く腰を折って、保健医の近くに耳を持っていった。

その瞬間に、彼女は素早く肉薄して、その柔らかな唇を頬に押し付ける。髪が顔にかかり、心地よい程度の香水がの匂い香る。初めての感触に、衛士はその場に硬直したまま、やがて目の前に回りこむ保健医を見つめていた。

「ど、どーゆー意味ですか……」

「これで許してねって」

本名不詳、年齢不詳。二十台半ばであろう風貌を持つ彼女は、少女っぽく身体をくねらせて前屈みになる。ウイंकするが、不覚にも衛士の瞳は作り出された深い胸の谷間に視線を奪われていた。

――頭が痛い。

やはりどうやらオレは女好きであるようだ。情けない。

衛士はそう結論付けると、頭痛を覚える頭を押さえながら寮へと足を向ける。もう彼を制する人間は、誰も居なかった。

食事にはありつけたものの、人は既に失せていた。憲兵になるべく訓練に励む一般訓練兵も二、三〇人ほど居るはずなのだが、どうやら寮やらその他設備は適正者選ばれた人間とは別の場所にあるらしい。

グラウンドには時間別で訓練をするらしく稀にその姿を見ることがあるが、会話はしたことは無かった。

そして、衛士は二ヶ月も七人の適正者仲間と時を共にしているのにもかかわらず、まともに会話をするのはただ一人のみ。話も掛けられないし、こちらからも必要でない場合は声を掛けないどころか目もくれないのだから、こうなるのも当然といえば当然の結果だった。

しかしだからといって何かに苦勞するわけではないし、別段、人と騒いでいるよりも心地よい時間を過ごしていると言えたが……。

シャワーを浴び、下着にズボンという簡単な姿で其処を出ると、丁度目の前からやってくる小柄な少女の姿があった。

金色の長い髪はいつもならば後ろで一括りにされているのに、今

は綺麗に下げられている。新鮮なようででもない姿の彼女はまだ十五の幼さを誇る少女で――名を、イリスと言った。

衛士がシャワー室の大きな扉を出ると、イリスも衛士の存在に気付いたか足を止め、立ち止まる。衛士が合図するように軽く手を上げると彼女は軽い会釈をしてから、衛士へと寄って来た。

「もう、これからお休みですか？」

大きな上着から指先だけを出して、タオル類を胸に抱く。特にこれといった関心を持たない声が衛士に投げられた。

「ああ。そっちはもう訓練には慣れた？」

「体力は持ちませんが、慣れたと言えば慣れたような気がします。他の方も優しいですし」

「そうか。それじゃ、おやすみ」

「はい。失礼します」

話題が無く、故に質素な会話に終わる。衛士はそれから彼女とすれ違って足を進めると、間も無くそのホールから自室へ繋がる通路の奥から一人の少女が現れて――彼女は衛士の姿を見るなり、バツが悪そうに顔を背けてから短く舌打ちをして、大股で通路から出てきて、素早く、衛士の傍を通り過ぎた。

目もくれず、その表情には嫌悪の色さえ伺えた。彼自身には何かをしたという覚えは無かったが、やはりコミュニケーションをとらないだけで、団体生活はこれほどまで好き嫌いが大きく変わるものなのだろうと判別する。

別にそれが嫌だとか悲しいだとか言うわけでもなかったが、少なくとも訓練校での生活に支障が出ることだけが心配された。関わるときは感情を殺して、必要なときだけでも手を貸すべきだとは彼は考えているが、彼女が同じ考えと言うわけではないだろう。

そんな事を考えてから、大きな溜息を付く。これでは先が思いやられてしまう。

仮に団体戦を行った場合。彼女と同じチームになった場合。二人一組で嫌悪感を抱く人間と組まされた場合。それぞれで大きく支障

が出る。そして恐らく衛士が足を引っ張る状況になるだろう。

イリスとさえも微妙な関係だ。

どうにかしたいワケではないが、やはりただ心配だった。

今日の事もあったから想像できる心配すべてが襲い掛かる。さらに恐らくそれらが杞憂に終わることは無いだろう。

この生活も残るは四ヶ月だ。未だ折り返し地点にすら立ててはいないが――。

「ちょっと、トキくん？」

勝気な声が背を殴る。衛士は驚いたように肩を揺さぶって振り向くと、そこには迷彩服姿の、先ほどの少女が立っていた。

「なんでしよう」

「教官せんせいにひいきされてるからって、いい気にならないでよね」

――なるほど。

彼女の一言は、瞬間的に衛士の疑問を納得させる。

つまり、教官たちとのただの会話……雑談に近いそれらを、彼女等が見れば特別な講習に見えるのだろう。特殊なフィルターを通してしているわけではなく、初めてここに來た彼女等からすれば教官などと言う戦闘の専門家は特別な存在なのだ。

衛士はそんな彼等とは既に彼女等が来る一ヶ月も前から関係を持つていて、さらに命を懸ける任務に参加したのだ。だから教官からすれば殆ど同僚みたいなものだし、ある程度の共通認識や、衛士の深い推測によって会話も濃厚な部分までが成り立つ。

それを知らぬ彼女等だからこそ、そういった勘違いをしてしまうのだろう。

胸に感じていた重みがにわかに軽くなった気がして、衛士はほっと息を吐いた。

「なによ」

「いや……。ま、出来の悪い子ほどカワイイって言うじゃん？」

「その割には意外に普通の成績みたいだけど」

目立つな、と言われている以上そうするしかない。衛士は心の中

で本心を呟いてから、思考する間も無く、怪しまれないように答えてやった。

「精一杯やってそう見えるならオレも頑張った甲斐があったよ」

「……何よ、余裕ぶっちゃって。皆真剣にやってんのよ？ アンタだけ、いかにも楽しんでますみたいな顔しちゃってさ」

しかし実際、ただ走ったり、射撃訓練したりなどは大した困難さではなかった。体力的には十分に追いつけるものだし、ただ今日ばかりは突然のこの猛暑にやられたが、大きな問題にはならない。

三月から一ヶ月の訓練のほうがよく、ほど過酷であり、訓練時間も長かった。最も半年の訓練期間で”あの任務”をこなすぐらいなのだから、そう急ぐ必要も無いのかもしれない。

一度や二度、模擬的に命に関わるものを体験させなければと思うが、ただの訓練では動きや、体力、筋力を鍛えるだけ为中心となる。だから、既にその過程を終えたも同然の衛士にとっては、彼女の言葉にはどうしようもなく答えづらかった。

なにせ、本当に余裕の上に目立たぬようにとの事で、楽をせざるを得ないのだから。

「楽なんて、出来たらしたいくらいだけどね」

「その――その口調。上からだし、何よそれ。対等よ。歳だって同じだし、なのになんでそんなに達観したみたいない方なのよ！」

「……疲れてるんだよ。今日は暑かったし、早く休んだほうが良い」

「あなたの事が嫌いな」

「知ってる」

「ああ、もうっ！」

ハラワタが煮えくり返っているのだろう。彼女は苛付いたように強く地面を叩いて、その靴で高らかな音を鳴らす。そうしてから握った拳を振り上げて、少し考えてから身を翻してシャワー室の扉の向こう側へと引っ込んでいく。

衛士ははらはらしたように胸を撫で下ろしてから、背を向け自室へと戻る。

——これでは先が追いやられるような気がしたが、仕方が無いことだ。誰も悪くは無い。強いて言えば、予定より一ヶ月も早く衛士を呼び寄せたりリスが悪いのだ。

そのせいで大まかな技術や体力、筋力は身についてしまった。衛士に残されているものといえば、一年以上前、ここに来る前から続けていた筋トレくらいしか無いモノだ。

衛士はまた思い出にふけて現実逃避でもしようかと思ったが——この世界が、嫌なほど現実離れしすぎていてその気にはなれなかった。

「はっ、嫌な世界なら変えてやる」

誰にとも無く吐き捨てて、彼は静かな足取りで誰にも出会わないことを願いながら自室へと戻る。

——時衛士の全てが終わった六月一日。そして新たな全てが始まる今日、六月一日。

彼はその時点で既に多くのモノを背負い、抱き歩みを進めていた。それは誰に求められたものでもなく、強いられたものでもない。だが彼はそれを止めないだろう。

目的が随時強制的に変異させられたとしても、彼は彼なりに次を見つけ、自身が求める最善の未来を目指す。

故に世界は、誰もが知覚できぬ緩慢さで、酷く歪んだ未来へと時を刻んで行った——。

つづく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5277r/>

誰かを救える五分前 Part1

2011年4月7日23時55分発行